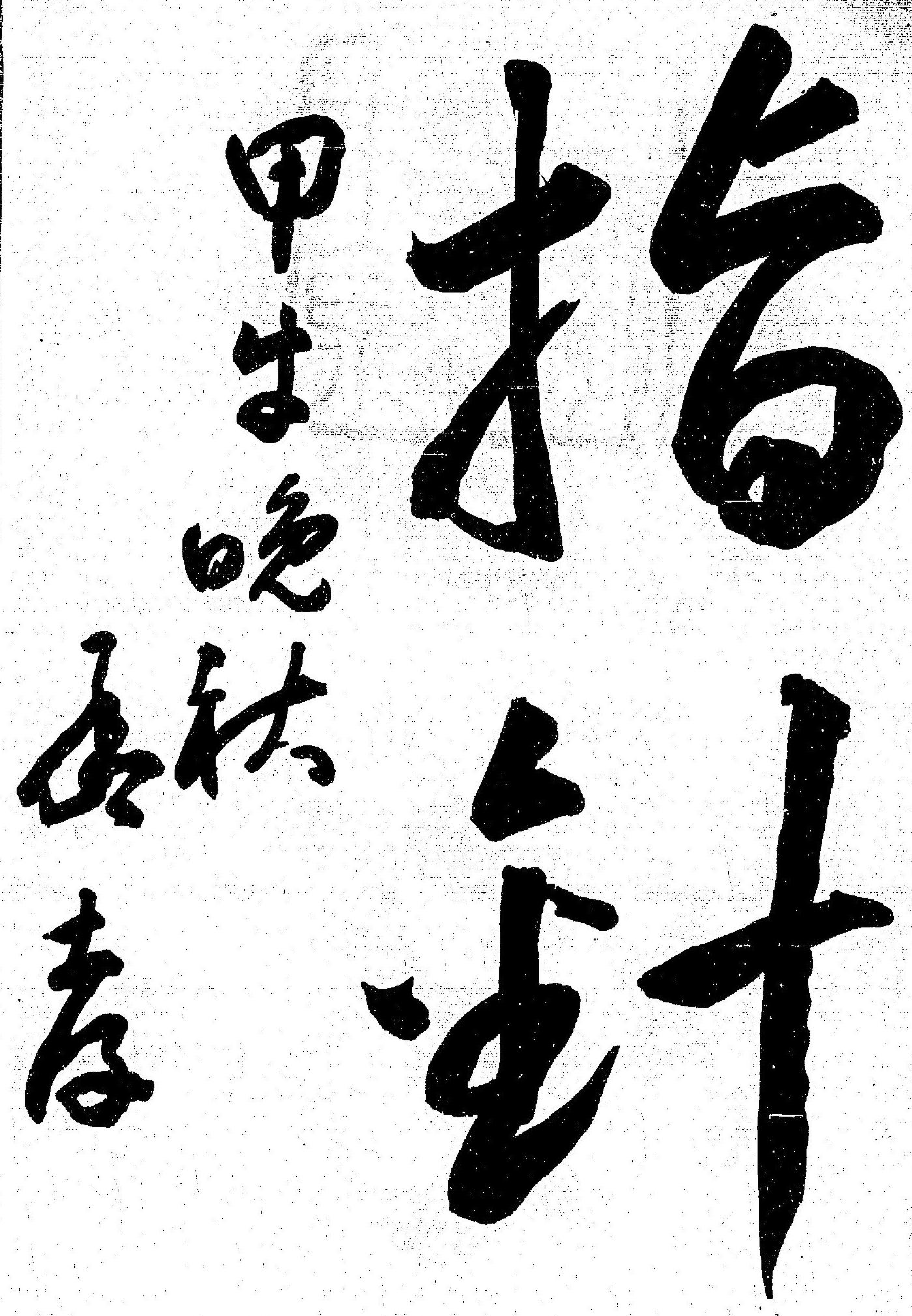
16
95

奈良縣監獄署第二課編輯

奈良縣看守教習用書

明治廿七年十二月印刷　禁賣買

獄務



目次

一看守及傭人分掌例　一丁
一監獄則同施行細則　一〇丁
一刑法摘要　四五丁
一刑法附則摘要　五三丁
一刑事訴訟法　五八丁
一輕罪ニ係ル控訴規則　七八丁
一重罪ニ係ル控訴規則　八〇丁
一處刑宣告者ノ騰本司獄官ヘ送致ノ件　八一丁
一已決囚ノ犯罪ニ關シ用濟ノ者司獄官ヘ報知ノ件　八二丁
一刑死者墓標及祭祀ニ關スル件　八三丁
一地方官々制摘要　八四丁
一看守奉職滿五年以上ノ者看守長ニ任用ノ件　八六丁
一廳府縣看守定員ノ件　仝
一仝　看守俸給ノ件　八七丁

一本縣看守俸給階級ノ件	八八丁
一女監取締押丁人員及俸給ノ件	八九丁
一看守教習規則	九〇丁
一看守教習規則標準	九三丁
一巡査看守判任待遇ノ件	九五丁
一巡査看守休暇概則	九六丁
一同　細　則	九七丁
一女監取締押丁同	九九丁
一巡査看守精勤證書授與規則	一〇〇丁
一巡査看守俸給支給規則	一〇四丁
一假出獄停止手續	一〇五丁
一假出場規則	一〇七丁
一囚人護送手續	一〇九丁
一徒流刑囚送致ノ件	一一二丁
一監獄署處務細則	一一三丁

一第二課事務取扱順序	一三一丁
一看守以下被服屬具給與規則	一四八丁
一看守點撿規則	一五三丁
一看守以下歸省願手續	一五七丁
一願書用紙ノ件	一五九丁
一看守病氣引籠療養手續	
一看守押丁詰婚手續	一六四丁
一看守押丁名刺ノ件	仝　丁
一看守勤務規程	一六五丁
一看守勤務一覽表	一六八丁
一看守職務心得	一七〇丁
一看守服務心得	一八七丁
一受持看守心得	一九二丁
一立番勤務心得	一九九丁
一巡警勤務心得	二〇一丁

一門衛看守心得　二〇三丁
一炊場受持看守心得　二〇五丁
一病監受持看守心得　二〇七丁
一在監人押送心得　二一〇丁
一外役戒護心得　二一四丁
一在監人撿束心得　二二〇丁
一在監人行状視察規程　二二四丁
一在監人衣体撿査心得　二三二丁
一在監人點撿心得　二三三丁
一監房器具衣類臥具撿査心得　二三四丁
一差入物品撿査心得　二三五丁
一在監人物品購求ノ件　二三六丁
一非常變災戒護心得　二三七丁
一牢衣施用規則　二四五丁
一在監人薙髪規則　二四六丁

一死刑場取締規則　二四八丁
一在監人勤止令　二五〇丁
一在監人心得書　二五五丁
一衛生事務取扱概則　二六五丁
一傳染病豫防規則　二六八丁
一記牒申報心得　二七四丁
一服装及姿勢心得　二七五丁
一帶劍心得　二七八丁
一警察禮式付看守禮式ハ警察禮式ニ準スルノ件　二八一丁
一官吏服務紀律　二八八丁
一看守懲罰ハ巡査懲罰例ニ準據スルノ件　二九一丁
一巡査懲罰例　仝　丁
一巡査看守給助細則　二九二丁
一同　施行順序　二九五丁
一看守押丁職務上ノ効勞賞與ハ警察賞與規則ニ據ルノ件　三〇八丁

一警察賞與規則　三〇九丁
一體操心得　三一四丁

特15
980

○内務省訓令第二十九號　明治廿二年六月廿六日

廳府縣　集治監

看守及監獄傭人ノ分掌例左ノ通改ム

第一章　看守ノ職務

第一條　晝夜交番シテ警守受持場ヲ巡警スヘシ

第二條　看守長ノ立會ヲ受ケ在監人員ノ點撿ヲ爲スヘシ

第三條　看守長ノ立會ヲ受ケ監房ヲ撿査シ其常置器具等ヲ點撿スヘシ

第四條　在監人ノ郷貫氏名年齢罪質刑名等ヲ記憶スルハ勿論日々ノ行狀ヲ視察シ其事項ヲ手帖ニ詳記シ看守長ノ撿閲ニ供スヘシ

第五條　在監人ノ役業ヲ督勵シ其科程ノ了否ヲ點撿スヘシ

第六條　服役者ヲシテ其作業ニ關セサル他事ヲ交談シ又ハ器具等ヲ交換シ或ハ漫リニ部外ノ工場ニ到ルカ如キ所爲ナカラシムヘシ

第七條　新ニ入監スルモノアルトキハ其身體衣服ヲ捜撿スヘシ其入監後監房ヲ出入スルトキモ亦仝シ

第八條　監門ヲ守リ其出入者ニ注目シ漫リニ通行セシムヘカラス

第九條　監房開閉ヲ掌リ其鎖否ヲ點撿スヘシ

第十條　工場器械庫其他ニアル物件排列ノ整否ヲ注視シ器具等ノ散失ナキ樣嚴密取締ヲ爲スヘシ

第十一條　炊塲浴塲等ヲ巡視シ火災ノ虞ナキ樣嚴密取締ヲ爲スヘシ

第十二條　獄則違犯者又ハ應禁物藏匿等アルコトヲ認知シタルトキハ嚴密ニ取糺シ其證跡ヲ明擧シテ看守長ニ申告スヘシ

第十三條　密室監禁者及屏禁闇獨愼者ノ動靜ハ特ニ之ヲ視察シ其狀況ヲ看守長ニ申スヘシ

第十四條　戒具ハ日々點撿シ不時ノ使用ニ支障ナカラシムヘシ

第十五條　食物ノ配與獄衣其他給與品及差入品等ノ受渡ニ立會ヒ不正不良ノ所爲ナカラシムヘシ

第十六條　在監人ノ接見及教誨ノ席ニ立會ヒ其擧動ヲ注視スヘシ

第十七條　病者ノ醫治ニ立會ヒ其擧動ヲ注視スヘシ

第十八條　在監人中ニ急發病者アルトキハ直ニ看守長ニ申告スヘシ

第十九條　水火風震等非常ノ變災ニ際シテハ最モ取締ヲ嚴ニシ在監人ヲ避ケシムルノ準備ヲナシ上官ノ指揮ヲ待ツヘシ

但事急遽ニ出テ上官ノ指揮ヲ待ツノ遑ナキトキハ救護ノ爲メ一時房外ニ出スコトヲ得

第廿條　反獄逃走等アルトキハ非常ノ合圖ヲ爲シ直ニ鎮壓捕獲ノ手配ヲナスヘシ此場合ニハ直ニ上官ニ報告スヘシ

但事急遽ニ出テ擱キ難キトキハ直ニ追跡スルコトヲ得

第廿一條　在監人ノ頭髮身體衣服ニ注目シ若シ垢染破損セシ等ノモノアルトキハ直ニ看守長ニ申告スヘシ

第廿二條　監房炊塲浴塲厠圊工場等ノ掃除ニ立會ヒ不潔ナカラシムヘシ

第廿三條　押丁授業手ノ在監人ニ接スル狀態ヲ視察シ若シ相狃ルヽモノアルヲ認ムルトキハ直ニ看守長ニ申告スヘシ

第廿四條　監內ノ異狀ヲ見聞スルトキハ直ニ看守長ニ申告スヘシ押丁ヨリ報告又ハ在監人等ヨリ密告ヲ得タルトキモ亦仝シ

第廿五條　在監人ノ押送ヲ掌リ其押送中ハ在監人ノ路人ト聲語シ又ハ之ヲ侮笑シ又ハ步行ヲ紊シテ行人ヲ妨クル等不都合ノ所爲ナカラシムヘシ

第廿六條　在監人ヨリ願訴ヲ爲サントスル者アルトキハ直ニ看守長ニ申告スヘシ若シ封書ヲ出ストキハ直ニ看守長ニ致スヘシ

第廿七條　文字ヲ書スル能ハサル在監者ノ爲メニ願訴ノ書面ヲ代書シ且之ヲ本人ニ讀ミ聽スヘシ

第二章　教誨師ノ職務

第廿八條　典獄ノ指揮ヲ受ケ專ラ已決囚及懲治人ノ教誨ニ從事シ又懲治人及十六歳未滿ノ已決囚ニ讀書算術習字等ノ學科ヲ教授スヘキモノトス

第廿九條　新ニ入監スル已決囚若クハ懲治人アルカ又ハ賞表ヲ受クヘキ者アルトキハ其者ニ對シ特ニ教誨ヲ爲スヘシ其出獄スルトキモ亦仝シ

第三十條　在監人ノ起居動靜勤怠及其行狀ノ良否ハ時々其狀ヲ具シテ典獄ニ報告スヘシ

第卅一條　監房ヲ巡回シ修身齊家ノ講談ヲ爲シ又掲示條項等ヲ解說スヘシ

第卅二條　懲治人ノ就學年月卒業ノ科目學業ノ優劣等ヲ簿冊ニ記載シ典獄ノ撿閲ニ供スヘシ

第卅三條　在監人ノ賞罰ニ付典獄ヨリ意見ヲ問フコトアルトキハ之ニ報答スヘシ

第卅四條　獄則處分ヲ受ケ受罰中ノ者アルトキハ其居所ニ就キ教誨ヲ加ヘ又其狀况ヲ視察シテ典獄ニ報告スヘシ

第卅五條　受罰者ニシテ改悛ノ狀顯著ナルヲ認知セシトキハ典獄ニ具狀スヘシ

第卅六條　授學上及教誨上ニ要スル書籍器具等ヲ管理シ散失破損セサル樣注意スヘシ

第卅七條　特赦免幽閉假出獄假出場假免懲罰ノ言渡又賞表授與式ニ立會フヘシ

第三章　醫師ノ職務

第卅八條　典獄ノ指揮ヲ受ケ在監人ノ疾病ヲ診察治療シ醫治ニ關スル一切ノ事務ニ從事スヘキモノトス

第卅九條　常ニ監內一般ノ衛生事項ニ注目シ其方法ヲ考究シテ意見ヲ典獄ニ具申スヘシ若シ衛生上ニ關スル事項ニ付典獄ヨリ諮問ヲ受ケタルトキハ之ヲ詳査シテ報答スヘシ

第四十條　在監人ヲ診斷シタルトキハ其氏名病性徵候治否及處方ヲ調治簿ニ詳記シ典獄ノ撿閲ニ供スヘシ

第四十一條　已決囚新ニ入監スルトキハ其體質ヲ撿査シ其體質ノ强弱等ヲ典獄ニ

具申スヘシ

第四十二條　各監房及工場等ヲ巡回シ在監人ノ飲食物及衣類等ヲ注視シテ衛生上ニ害アリト認ムル事アルトキハ改良ノ意見ヲ典獄ニ具申スヘシ

第四十三條　流行病及傳染病發生ノ兆アルカ又ハ該患者アルトキハ直ニ典獄ニ稟議シ其病症及感染ノ形狀ヲ詳悉シ豫防消毒ヲ施行スヘシ

第四十四條　減食又ハ闇室等ノ懲罰ニ處セラルヘキ者ヲ診察シ其身體ニ妨ケナキヤ否ヤヲ詳記シ其證明書ヲ典獄ニ差出スヘシ

第四十五條　在監人中ニ急發病者アルノ報知ヲ受ケタルトキハ直ニ其居所ニ就キ診察治療スヘシ

第四十六條　服役スヘキ囚徒ノ疾病快復スルトキハ其堪ユヘキ役業ノ種類ヲ指定シ典獄ニ具申スヘシ

第四十七條　患者攝生ノ爲メ特別ノ衣食物品等ヲ要スルトキハ事由ヲ詳記シ典獄ニ具申スヘシ

第四十八條　施療上危險ノ恐アル手術ヲ施ストキハ其旨ヲ典獄ニ具申シテ許可ヲ受クヘシ

第四十九條　患者癈篤疾若クハ危篤ニ至レハ診斷書ニ處方箋ヲ添ヘ之ヲ典獄ニ差出スヘシ

第五十條　在監人中病死又ハ變死シタルモノアルトキハ典獄竝ニ看守長ト倶ニ驗屍シ其死亡ノ原由及病症死狀等ヲ詳記シ死亡證書又ハ檢案書ヲ添ヘ之ヲ典獄ニ差出スヘシ

第五十一條　患者若シ死後ニ解剖ヲ請フモノアルトキハ速ニ之ヲ典獄ニ具申スヘシ

第五十二條　在監人中作病ヲ構ヘ診察ヲ乞フモノアルトキハ看守長ニ申告スヘシ

第五十三條　差入飲食物アルトキハ之ヲ檢査シ其可否ヲ典獄ニ具申スヘシ

第五十四條　看病者ノ適否ヲ監視シ意見アルトキハ直ニ典獄ニ具申スヘシ

第五十五條　醫療器械竝ニ書籍等ヲ管理シ散失破損セサル樣注意スヘシ

第五十六條　患者ノ日表及月表ヲ製シ典獄ノ檢閲ニ供スヘシ

第五十七條　看守押丁志願者ノ體格ヲ檢査スヘシ

第四章　女監取締ノ職務

第五十八條　看守長ノ指揮ヲ受ケ女監ノ戒護其他婦女ノ取締ニ關スル一切ノ事務

ニ従事スルモノトス
第五十九條　看守ノ職務第一條乃至第廿四條及第廿六條第廿七條ハ本職ニモ之ヲ適用ス
第六十條　病監ニ於テ治療中ノ未決患者ヲ看護スヘシ
第六十一條　作業器械及素品製品ノ受渡ヲ爲スヘシ

第五章　押丁ノ職務

第六十二條　看守ノ助手トナリ新ニ入監スル者ノ身体衣服ヲ捜検スヘシ入監後監房ヲ出入スルトキモ亦仝シ
第六十三條　看守ノ指揮ヲ受ケ監外押發ノ在監人ニ戒具ヲ施シ又ハ控繩戒護ニ從事スヘシ
第六十四條　死刑者アルトキハ上官ノ指揮ヲ受ケ其執行方ニ從事スヘシ
第六十五條　看守ノ助手トナリ監房ノ檢査ヲ爲スヘシ
第六十六條　看守ノ指揮ヲ受ケ監門及監房戸扉ノ開閉ヲ爲スヘシ
第六十七條　看守ノ立會ヲ受ケ食物ノ配與獄衣其他給與品及差入品ノ受渡ヲ爲スヘシ

第六十八條　上官ノ指揮ヲ受ケ病監ニ於テ治療中ノ未決患者ヲ看護スヘシ
第六十九條　上官ノ指揮ヲ受ケ刑死者及死亡者ノ身體取片付方ニ從事スヘシ
第七十條　看守ノ立會ヒヲ受ケ作業器械及素品製品ノ受渡ヲナスヘシ
第七十一條　工場内其他ニアル諸器具其他ノ物件ヲ排列シ看守ノ點檢ニ供スヘシ
第七十二條　獄具及消防具等ヲ監守シ毀損紛亂セサル樣注意スヘシ
第七十三條　在監人ノ頭髪身體衣服ニ注目シ若シ垢染破損セシ等ノモノアルトキハ直ニ看守ニ申告スヘシ
第七十四條　獄則違犯者又ハ應禁物藏匿等アルト認知シタルトキハ直ニ看守ニ申告スヘシ
第七十五條　監内ニ異狀アルトキハ直ニ之ヲ上官ニ申告スヘシ在監人ヨリ密告ヲ得タルトキモ亦仝シ
第七十六條　在監人ノ行狀ノ良否ヲ認知シタルトキハ之ヲ手帖ニ記シ置キ看守ニ申告スヘシ
第七十七條　炊場浴場等ニ於テハ火災ノ虞ナキ樣注意スヘシ

第六章　授業手ノ職務

第七十八條　工業掛員ノ指揮ヲ受ケ農業工業等ヲ教授スヘシ

第七十九條　受業囚ヲ督勵シ科程ノ良否ヲ注視スヘシ

第八十條　授業上ニ要スル器械雜具ヲ整理シ取扱上及保存方ニ注意スヘシ

第八十一條　役業ノ科程及工錢料定上ニ付テハ意見ヲ工業掛ニ開申スヘシ

第八十二條　役業ノ廢設及改良方ニ付意見アルトキハ之ヲ典獄ニ具申スヘシ

第八十三條　役業ヲ怠ルカ又ハ指導ニ從ハサルモノアルトキハ速ニ看守長ニ申告スヘシ

第八十四條　器具ノ新調及修繕ヲ要スルトキハ其買入又ハ修繕方ヲ工業掛ニ申立ツヘシ

第八十五條　毎月受業囚ノ勤怠及技藝ノ優劣進否等ヲ調査シ之ヲ看守長ニ具申スヘシ

朕監獄則ノ改正ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名　御璽

勅令第九十三號　廿二年七月十二日

監獄則

第一條　監獄ヲ別テ左ノ六種トス

一　集治監　徒刑流刑及舊法懲役終身ニ處セラレタル者ヲ拘禁スル所トス

二　假留監　徒刑流刑ニ處セラレタル者ヲ集治監ニ發遣スル迄拘禁スル所トス

三　地方監獄　拘留禁錮禁獄懲役ニ處セラレタル者及婦女ニシテ徒刑ニ處セラレタル者ヲ拘禁スル所トス

四　拘置監　刑事被告人ヲ拘禁スル所トス

五　留置場　刑事被告人ヲ一時留置スル所トス但警察署內ノ留置場ニ於テハ罰金ヲ禁錮ニ換フル者及拘留ニ處セラレタル者ヲ拘禁スルコトヲ得

六　懲治場　不論罪ニ係ル幼者及瘖啞者ヲ懲治スル所トス

第二條　監獄ハ內務大臣ノ監督ニ屬ス

第三條　集治監（北海道ニ在ルモノヲ除ク）及假留監ハ內務大臣之ヲ管理シ其他ノ監獄ハ警視總監北海道廳長官府縣知事（東京府ヲ除ク）之ヲ管理ス

第四條　內務大臣ハ隨時監獄巡閲官ヲシテ各監獄ヲ巡閲セシムルヘシ警視總監北

海道廳長官府縣知事東京府ヲ除クハ毎年少クトモ一回所轄ノ監獄ヲ巡閲スヘシ
裁判官ハ時々其裁判所管轄內ニ在ル拘置監ヲ巡視スヘシ
檢察官ハ時々其裁判所管轄內ニ在ル監獄ヲ巡視スヘシ

第五條　府縣會議員ハ臨時其府縣所轄ノ監獄ヲ巡見スルコトヲ得

第六條　新ニ入監スルモノアルトキハ典獄先ツ令狀又ハ宣告書ヲ査閲シテ之ヲ領シ其領收證ヲ引致シ來リタル者ニ交付シタル後入監セシムヘシ其文書ナクシテ引致セラレタル者ヲ入監セシムルコトヲ得ス

第七條　在監ノ婦女其子ヲ乳養セシト請フトキハ其齡滿三歲ニ至ル迄之ヲ許ス

第八條　新ニ入監スル者ノ携有スル財貨物件ハ典獄悉ク點檢シテ之ヲ領置スヘシ

第九條　水火風震等非常ノ變災ニ際シ監獄園內ニ於テ避災ノ手段ナシト考定スルトキハ典獄ハ其狀況ニ依リ在監ノ囚人懲治人及刑事被告人ヲ他所ニ押送シ其災ヲ避ケシムヘシ若シ押送スルノ遑ナキトキハ一時之ヲ解放スルコトヲ得
解放ニ遭ヒタル者ハ其時ヨリ二十四時以內ニ監署又ハ警察署ニ其旨ヲ申出ツヘシ

第十條　滿期ノ者ヲ釋放スルハ其滿期ノ翌日午前十時ヲ過クヘカラス

第十一條　囚人ハ各罪質ニ從テ嚴ニ其監房ヲ別異シ其中ニ就キ年齡ニ從ヒ左ノ如ク別異ス
一　滿十二歲以上十六歲未滿ノ者
二　滿十六歲以上二十歲未滿ノ者
三　滿二十歲以上ノ者
四　滿十六歲以上二十歲未滿再犯ノ者
五　滿二十歲以上再犯ノ者

第十二條　懲治人ハ左ノ年齡ニ從ヒ其監房ヲ別異ス
一　滿八歲以上十六歲未滿ノ者
二　滿十六歲以上二十歲未滿ノ者
三　滿二十歲以上ノ者

第十三條　刑事被告人ハ各罪質ニ從テ其監房ヲ別異シ其中ニ就キ年齡ニ從ヒ左ノ如ク別異ス
一　滿十二歲以上十六歲未滿ノ者
二　滿十六歲以上二十歲未滿ノ者

三　滿二十歳以上ノ者

第十四條　地方監獄拘置監懲治場ノ一區畫內ニ在ルモノハ墻壁ヲ以テ之ヲ區畫スヘシ

第十五條　凡ソ監獄ハ男監女監ノ別ヲ嚴隔スヘシ

第十六條　囚人及刑事被告人ヲ裁判所又ハ他監ニ押送スルトキハ男ト女トヲ分チ時宜ニ依リ戒具ヲ用ユルコトヲ得但懲治人ニハ戒具ヲ用ヒス

第十七條　定役ニ服スヘキ囚人ノ作業ハ毎囚ノ體力ニ應シテ之ヲ課シ一日ノ科程ヲ定メテ服役セシムヘシ但科程ノ標準ハ內務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第十八條　左ニ記載シタル日ハ服役ヲ免ス

一月一日二日	元始祭	孝明天皇祭	紀元節
春季皇靈祭	神武天皇祭	秋季皇靈祭	神嘗祭
天長節	新嘗祭	十二月卅一日	

父母ノ喪ニ遭フ者ハ三日免役ス

第十九條　無定役囚ニシテ監獄園內ニ於テ自ラ作業ヲ爲ント請フトキハ之ヲ許シ作業ノ種類ハ典獄之ヲ指定ス刑事被告人モ亦之ニ準スルコトヲ得

第二十條　懲治人ニハ毎日五時以內農業若クハ工藝ヲ敎ヘ力作セシムヘシ

第二十一條　役場ハ男女ノ別ヲ嚴隔シ仍ホ定役囚無定役囚懲治人ノ役場ハ各別ニ之ヲ設ケ其中ニ就キ丁年以上ノ者ト未丁年者トヲ區別スヘシ

第二十二條　定役ニ服スヘキ囚人現役一百日ヲ經レハ始メテ各自ノ工錢ヲ料定シ之ヲ十分シテ重罪囚ニハ其二分輕罪囚ニハ其四分ヲ與ヘ餘分ハ監獄ノ費用ニ供ス

第二十三條　前條ニ依リ作業ニ與フヘキ工錢ハ典獄之ヲ領置スヘシ

第二十四條　囚人懲治人及刑事被告人逃走シ監署ニ領置ノ貨物アルトキハ逃走ノ日ヨリ滿一箇年ヲ經テ之ヲ受クヘキ者ナキトキハ監獄慈惠ノ用ニ充ツ刑死者死亡者ノ領置貨物ニシテ受クヘキモノナキトキモ亦仝シ

第二十五條　囚人及懲治人監署ニ領置ノ貨物ヲ以テ其父母妻子ノ扶助及正當ノ費用ニ充ント請フトキハ典獄其事情ヲ取糺シテ之ヲ許可スヘシ

刑事被告人ニ係ルトキハ當該裁判官ノ允許ヲ經ヘシ

第二十六條　囚人及懲治人ノ衣服臥具ハ之ヲ貸與ス但拘留囚ハ自衣ヲ着スルコトヲ得

第二十七條　刑事被告人ノ衣服ハ總テ自辨トシ臥具ハ之ヲ貸與ス若シ臥具ヲ自辨セント請フモノアルトキハ之ヲ許ス赤貧ニシテ衣類ヲ自辨スルコト能ハサル者ニハ之ヲ貸與ス

第二十八條　囚人及懲治人一人一日ノ食糧

一下白米十分四麥十分六	七合乃至八合	最モ强キ作業ニ服スル者
一同	五合乃至六合	作業ニ服スル者
一同	四合	作業ニ服セサル者
一同	三合	十歳未滿ノ幼者
一菜	金壹錢以下	

地方ノ便宜ニ依リ粟稗麥薯ノ類ヲ以テ麥ニ代用スルコトヲ得又麥粟稗黍等ニ乏シキ地方ニ於テハ內務大臣ノ認可ヲ得テ下白米ノミヲ給スルコトヲ得

刑事被告人モ亦前項ニ準ス但自費ヲ以テ食物ヲ購求セント請フトキハ之ヲ許ス

第二十九條　定役ニ服スル男囚ノ髮ハ常ニ之ヲ短薙シ髭鬚ハ常ニ剃除セシム

定役ニ服スル女囚ノ梳髮ハ膏ヲ用ヒテ裝飾スルコトヲ許サス

第三十條　囚人及懲治人ニハ敎誨師ヲシテ悔過遷善ノ道ヲ講セシム

第三十一條　囚人十六歳未滿ノ者及懲治人ニハ毎日四時以內讀書習字算術ヲ敎フヘシ

第三十二條　囚人懲治人及刑事被告人現行ノ法律命令書ヲ看ント請フトキハ之ヲ許ス

囚人及懲治人書籍ヲ看ント請フトキハ修身宗敎敎育及營業ニ必要ナルモノニ限リ之ヲ許ス

刑事被告人書籍ヲ看ント請フトキハ總テ之ヲ許ス但領置外ノ書籍ハ當該裁判官ノ承認ヲ經ヘキモノトス

新聞紙及時事ノ論說ヲ記スルモノハ前二項ノ例ニアラス

第三十三條　囚人其親屬故舊ニ信書ヲ贈ルハ一箇月ニ一次懲治人ハ一箇月ニ二次トシ共ニ一通ニ過クルコトヲ得ス但官司ノ訊問等ニ由テ書信ヲ要スルトキ又ハ親屬故舊ニ回答セント請ヒ典獄ニ於テ之ヲ必要ト認メタルトキハ此限ニ在ラス

第三十四條　囚人及懲治人ノ發スル信書又ハ外人ヨリ送リ來ル信書ハ典獄之ヲ査閱スヘシ若シ書中不正不良ニ渉リ又ハ其改悛ヲ妨クルモノト認ルトキハ之ヲ發贈付與スルコトヲ許サス但刑事被告人ニ係ル信書ハ總テ當該裁判官ノ檢閱ヲ經

ヘキモノトス

第三十五條　囚人懲治人及刑事被告人ニ接見セント請フモノアルトキハ典獄ノ立會ヲ以テ之ヲ許スヘシ但典獄ニ於テ形跡ノ疑フヘキコトアリト認ムルトキハ之ヲ許サヽルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケタルモノハ裁判言渡アル迄辯護人ヲ除クノ外其現在地ノ裁判所長ノ允許ヲ受クヘシ密室監禁者ハ當該裁判官ノ允許ヲ受クヘシ

第三十六條　囚人懲治人及刑事被告人疾病ニ罹ルトキハ病狀ノ輕重ヲ料リ其監房若クハ病室ニ於テ醫療セシム懲治場ニ在ル者ハ情狀ニ由リ其親屬ニ交付スルコトヲ得

第三十七條　囚人懲治人及刑事被告人死亡シタルトキハ典獄看守長醫師ノ立會ヲ以テ之ヲ檢視シ監署ニ於テ速ニ其本籍ニ通知スヘシ其遺骸ハ親屬若クハ故舊ノ之ヲ請フ者ニ下付ス但死亡後二十四時以內ニ在テ其下付ヲ請フ者無キトキハ監署ニ於テ之ヲ假葬シ其姓名ヲ記シタル木牌ヲ立ツヘシ

刑死者ハ死相ヲ驗シタル後仍ホ五分時ヲ過サレハ其遺骸ヲ絞架ヨリ解下シ之ヲ埋葬シ若クハ下付スルコトヲ許サス

第三十八條　刑事被告人ニ其親屬故舊ヨリ書類書籍用紙衣類臥具其他必要ノ物品又ハ飲食物ヲ贈ラント請フトキハ之ヲ許ス但書類書籍ハ當該裁判官ノ撿閲ヲ受クヘシ其密室監禁者ニ係ルトキハ他物ニ於テモ亦仝シ

新聞紙及時事ノ論說ヲ記スルモノハ前項ノ例ニアラス

第三十九條　囚人及懲治人ニハ現行ノ法律命令書並ニ書籍用紙印紙郵便切手貨幣及內務大臣ニ於テ許可シタルモノヲ除クノ外差入ヲ許サス但書籍ハ第三十二條ニ記載シタル制限ニ從フ

賞與セシ者ニハ之ヲ表スル爲メ賞表ヲ與ヘ獄衣ニ縫着セシムヘシ

賞表ハ假出獄免幽閉又ハ特赦ヲ具狀スルノ憑據ト爲スコトヲ得

第四十一條　賞表ヲ有スル囚人ハ其監房ヲ區別シテ尋常囚人ト別異シ賞表ノ多寡ニ應シテ優遇ヲ爲スヘシ

第四十二條　囚人獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス

一　屛禁　晝夜他ノ監房又ハ役場ト隔絕シタル監房ニ獨居セシメ服役時間坐作ノ役ヲ課ス

二　減食　一日ノ食糧ヲ二合乃至三合ニ減シ塩湯二品ノ外菜ヲ與ヘス

三　闇室　闇室ニ入レ一日ノ食糧ヲ二合乃至三合ニ減シ塩湯二品ノ外菜ヲ與ヘス仍ホ臥具ヲ禁ス

屛禁ハ二月以內減食ハ一週日以內闇室ハ五晝夜以內トス

第四十三條　囚人十六歲未滿ノ者及懲治人獄則ヲ犯ストキハ其輕重ヲ量リ左ノ例ニ從テ處罰ス

一　獨愼　晝夜一室ニ獨居セシム

二　減食　一日ノ食糧ヲ二合乃至三合ニ減ス

獨愼ハ七晝夜以內減食ハ三日以內トス

第四十四條　減食若クハ闇室ノ罰ニ處スヘキ者アルトキハ醫師ヲシテ診視セシメ身體ニ妨ケナキヲ證シテ後之ヲ行フヘシ其處罰中ハ醫師ヲシテ毎日之ヲ視察セシメ醫師ニ於テ身體ニ妨ケアルヲ證スルトキハ處罰ヲ中止スヘシ

第四十五條　無期徒刑ノ囚人重罪ヲ犯シ若クハ逃走シ又ハ獄舍獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ為シタルトキハ一年以上五年以下其他ノ輕罪ヲ犯シタルトキハ一月以上一年以下兩脚又ハ一脚ニ鈦ヲ施シ仍ホ鐵丸ヲ屬シタル鐵索ヲ其鈦ニ貫キ腰

間ニ繚帶セシメ繚帶ノ所ニ下鍵ス其監房ニ在ルモ晝間ハ之ヲ施スモノトス

若シ再ヒ重罪ヲ犯シタルトキハ五年以上十年以下前項ノ例ニ照シテ處罰ス

鐵丸ノ量ハ二百目以上一貫目以下トシ被罰者ノ體力ニ應シテ之ヲ施ス丸ハ索尾ニ屬シ地上ヲ轉ハスモノトス若シ外役ニ服スルトキハ鐵丸ヲ除キ二人聯絆ノ法ニ從フ

第四十六條　施鈦中ノ者病ニ罹リ醫師ノ診斷ニヨリ鈦ノ解除ヲ必要トスルトキハ一時之ヲ解除スルコトヲ得但解除中經過セシ日數ハ施鈦期限ニ算入セス

第四十七條　賞表ヲ有スルモノ處罰ヲ受ケタルトキハ其情狀ニ由リ賞表一箇又ハ數箇ヲ褫奪スルコトアルヘシ

第四十八條　獄則ヲ犯シ罰セラレタル者改悛ノ狀著シキトキハ處罰中ト雖モ之ヲ免スルコトヲ得

第四十九條　免幽閉ヲ受ケタル流刑ノ者監署ノ命令ニ違背シタルトキハ七日以內之ヲ拘置スルコトヲ得

第五十條　囚人懲治人及刑事被告人司獄官吏ノ處置ニ對シ情苦ヲ訴ヘントスルトキハ第四條ニ記載シタル官吏巡閱ノ際封書又ハ口述ヲ以テ申告スルコトヲ得

第五十一條　此規則ヲ施行スル方法細則ハ内務大臣之ヲ定ム
第五十二條　此規則ハ陸海軍ニ屬スル監獄ニ適用セサルモノトス

○内務省令第八號　　二十二年七月十六日

監獄則施行細則

第一章　規程

第一條　此細則ニ於テ在監人ト稱スルハ四人懲治人及刑事被告人ヲ云フ
第二條　新ニ入監スルモノアルトキハ先ツ之ニ番號ヲ付シ一小房内ニ於テ通身ヲ撿査シ了リテ名籍ニ其要項ヲ詳錄シ仍ホ房内掲示ノ事項ヲ諭示スヘシ
第三條　各監房内ニハ在監人ノ遵守スヘキ事項ヲ掲示シ傍訓ヲ施シ解シ易カラシムヘシ其事項左ノ如シ
一在監人ハ互ニ和順ヲ主トシ常ニ敎令ヲ謹守スヘシ
一敎誨聽聞ノ席ニ就クトキハ愼テ容姿ヲ正フスヘシ 刑事被告人ヲ拘禁スル監房ニハ此項ヲ除ク
一每朝常用ノ諸器具ヲ淸潔ニシ之ヲ排列シテ點撿ヲ受ケ及席壁厠圊等ヲ掃除スヘシ
一窓壁若クハ物件ヲ汚損シ不淨器ノ外ヘ唾ハキ及貯水ヲ濫用スヘカアス
一房外ニ出タル時ハ他人ト手ヲ交ヘ又ハ濫リニ交談スヘカラス
一夜間ハ最モ鎭靜ヲ主トシ說話發聲又ハ濫リニ起歩スヘカラス
　但晝間ト雖モ放歌喧噪又ハ高聲ニ誦讀シ及隣房ヘ通聲交談スヘカラス
一許可ヲ得サル物品ヲ監房ニ置キ或ハ勝負ヲ爭ヒ若クハ賭博類似ノ遊戲ヲナシ或ハ他人ニ汚辱ヲ被ラシメ猥褻ニ涉ルカキ如キ所爲アルヘカラス
一服役中其作業ニ關セサル他事ヲ談話シ及服役セサル時間タリトモ部外ノ役場ニ至ルヘカラス
一許可ヲ得スシテ物件ヲ受授貸借スヘカラス
一監房ニ於テ異常ノ事アレハ晝夜ニ拘ラス直ニ看守所ニ通聲スヘシ
一病者アルトキハ同房ノ者共ニ介保シ看病人タル者ハ切實ニ之ヲ看護スヘシ
第四條　領置ノ貨物ハ其名數ヲ簿冊ニ記載シ典獄之ニ證印スヘシ領置ノ貨物ハ本人釋放又ハ假出獄免幽閉假出場ノ時之ヲ下付スヘシ
第五條　領置物品中保存ニ堪ヘ難キモノハ本人ヘ告知ノ上之ヲ賣却シテ其代金ヲ領置スルコトヲ得

第六條　入監中外人ヨリ差入タル貨物シテ領置スルモノモ亦第四條第五條ノ例ニ依ル

第七條　總テ監房ニ入ル、物品ハ典獄之ヲ點撿シ其危險ノ虞アルモノハ一切之ヲ禁スヘシ

第八條　入監後出房セシメタル者ニ對シテハ還房ノ際通身ノ撿査ヲ爲スヘシ

第九條　通身ノ撿査ハ一人宛之ヲ爲シ他人ヲシテ見セシムヘカラス但役場敎誨堂運動場及浴室等ヨリ一時多人數ヲ還房セシムル場合ハ此限リニアラス

第十條　男子ノ撿身ハ看守長臨監シ看守之ヲ行ヒ女子ニ係ルトキハ看守長臨監シ女監取締之ヲ行フヘシ

第十一條　典獄看守長ハ日夜不時ニ監獄ノ内外ヲ巡視スヘシ但看守長ノ巡視ハ一晝夜三回以上タルヘシ

第十二條　典獄ハ看守及女監取締ノ警守受持場ヲ定メ晝夜絶ヘス之ヲ巡警セシムヘシ

第十三條　典獄ハ看守長及看守女監取締ヲシテ常ニ在監人ノ行狀ヲ錄サシムヘシ
但押送途中ニ在テハ押送官吏之ヲ錄シテ典獄ニ差出スヘシ

第十四條　看守長ハ毎日二回以上各監房ニ就キ在監人ノ員數ヲ點撿シ毎日一回以上監房ヲ撿査スヘシ

第十五條　囚人及懲治人ノ放免期日ハ入監後典獄直ニ之ヲ調査シテ名籍簿ニ記入シ仍ホ本人ニ告知スヘシ

第十六條　囚人及懲治人ニシテ釋放スヘキ者アルトキハ典獄名籍簿ニ照シテ其氏名等ヲ問糺シ釋放スル旨ヲ言渡スヘシ刑事被告人ニシテ放免保釋及責付スヘキ者アルトキモ亦同シ

第十七條　領置ノ貨物ヲ下付スルトキハ典獄其名數ヲ領置簿ニ照シテ其旨ヲ記シ受取人ヲシテ證印セシムヘシ

第十八條　刑事被告人ノ中共犯人アルトキハ其監房ヲ別異シ談話通聲スルコトヲ得サラシメ裁判所又ハ他監ニ引致ノトキモ同行セシムルコトヲ得ス

第十九條　在監人ヲ他監ニ移ストキハ其名籍又ハ宣告書其他必要ノ文書及領置ノ貨物ヲ具シテ送致スヘシ

第二十條　在監人押送ノ際送致スル貨物ハ典獄ニ於テ目錄ヲ作リ其貨物並ニ目錄ハ押送官吏ヲシテ保管セシムヘシ但金錢ハ破綻ノ憂ナキ樣嚴緘シ之ニ封印ヲ捺

スヘシ

第二十一條　特赦アリタルトキハ典獄ハ速ニ其旨ヲ所屬長官ニ申報シ所屬長官ハ内務大臣ニ申報スヘシ

第二十二條　特赦免幽閉假出獄ノ申渡ハ其裁可又ハ許可ノ監署ニ達シタルトキヨリ二十四時間以内ニ之ヲ爲スヘシ

假出獄ノ申渡ヲ受ケタル者ニハ典獄其證票ヲ與ヘテ最近ノ警察署ヘ護送スヘシ

第二十三條　特赦免幽閉假出獄ヲ申渡シ又ハ賞表ヲ授與スルハ別ニ定ムル方式ニ依ル但賞表ハ免役日若クハ日曜日ニ於テ之ヲ與フヘシ

第二十四條　免幽閉ノ申渡ヲ受ケタル者ハ監獄近傍ノ地ヲ限リ居住セシメ典獄之ヲ監督スヘシ但土地家屋ナキ者ニハ之ヲ貸與スヘシ

已ムヲ得サル事故アリテ一時限外ニ出ンコトヲ請フトキハ典獄其事由ヲ取糺シテ許可スルコトアルヘシ

第二十五條　免幽閉中重罪輕罪ヲ犯シタル者アルトキハ其裁判確定ノ上免幽閉ヲ爲シタル所ノ監獄ニ於テ直チニ其刑ヲ執行スヘシ

第二十六條　免幽閉ノ申渡ヲ受ケタル者其配偶者又ハ其他ノ親屬ヲ招キテ同居シ又ハ結婚セント請フトキハ典獄其生計ノ方法ヲ取糺シテ許可スヘシ

第二十七條　假出獄中重罪輕罪ヲ犯シタル者アルトキハ其裁判確定ノ上現ニ之ヲ管束スル所ノ典獄ニ於テ假出獄ノ停止ヲ言渡シ證票ヲ取上ケ其旨ヲ所屬長官ニ申報シ所屬長官ハ内務司法兩大臣ニ申報スヘシ

甲地ニ於テ假出獄ヲ許サレタル者ヲ乙地ニ於テ停止シタルトキハ乙地典獄ヨリ其取上ケタル證票ヲ甲地典獄ニ送致シテ其旨ヲ通知スヘシ

前項ニ依リ乙地ニ於テ假出獄ヲ停止シタルトキハ集治監ニ入ルヘキ者ヲ除クノ外其地監獄ニ拘禁シ前刑後刑トモ乙地ニ於テ之ヲ行執スヘシ

第二十八條　死刑ノ宣告ヲ受ケタル者アルトキハ他ノ者ト別異シ一房ニ一名ヲ拘禁シテ特ニ戒護ヲ嚴ニスヘシ

第二十九條　死刑ノ執行ハ午前十時ヲ過ルヲ得ス其執行中ハ看守ヲシテ嚴ニ刑場ノ門戸ヲ護ラシムヘシ

第三十條　死刑ヲ執行スヘキ者同時ニ二人以上アルトキハ之ニ前後ヲ付シ一人宛執行シ其間他ノ受刑者ヲシテ刑場ニ入ラシムヘカラス

第三十一條　死刑ハ受刑者自衣著用ノ儘之ヲ執行スルコトヲ得

第三十二條　監房ハ看守長ノ立會アルニアラサレハ開扉スルコトヲ得ス但在監人ノ在ラサルトキハ此限ニ在ラス

第三十三條　囚人ノ監房ニハ疊ヲ敷クコトヲ得ス但病室及拘留囚ノ監房ハ此限ニ在ラス

第三十四條　密室ハ拘置監ニ設クヘシ

闇室ハ暗ニ空氣ヲ通セシメ毫モ光線ヲ通セサラシムルヲ要ス

密室及闇室ハ一室一人ヲ限トス

第三十五條　接見室ハ監舎ノ首部ニ設クヘシ

第三十六條　死刑場ハ監獄ノ一隅ニ設ケ墻壁ヲ以テ外見ヲ防クヘシ

第三十七條　各監房ノ鑰匙ハ彼此適用スヘキ爲メ其製式ヲ同クスヘシ

第三十八條　監房ノ鑰匙ハ常ニ一定ノ場所ニ置キ看守長之ヲ監守スヘシ

第三十九條　看守所ニハ闇室ヨリ鐵線ノ類ヲ通架シ置キ發病等ヲ報スルノ用ニ供スヘシ

第四十條　監獄ニハ防火具ヲ備ヘ置クヘシ

第四十一條　燈火ハ監房外ニ置キ在監人之ニ觸ルノ虞ナカラシムヘシ

第二章　役法及時限

第四十二條　定役ニ服スヘキ入監人アルトキハ典獄醫師ヲシテ其身體ヲ診視セシメテ强弱ヲ分チ就業簿ニ記入シ其就役スヘキ業名ヲ指定スヘシ

第四十三條　男囚ノ監獄内ノ作業ハ舂米瓦工煉化石工石工碎石鍛冶工油絞工耕耘木挽工抄紙工木工桶工藁工炊事掃除ノ内ヲ撰ムヘシ

女囚ノ作業ハ紡績裁縫機織洗濯ノ内ヲ撰ムヘシ

右ノ外各地方ノ便宜ニ依リ他ノ作業ニ服従セシメントスルトキハ内務大臣ノ認可ヲ得ヘシ

第四十四條　男囚ハ碎石開鑿採礦土方石工耕耘運搬若クハ監獄ノ用ニ限リ獄外ノ役ニ服セシムルコトヲ得其外役ニ服セシムルトキハ鍊鐵ノ鎖ヲ用ヒ二囚毎ニ聯絆シ晴雨ヲ問ハス笠ヲ用ヒテ其面ヲ掩ハシムヘシ

外役ノ囚徒ハ一組十人以上二十人以下ト定メ看守一人押丁二人以上ヲシテ之ヲ監セシム但島地ニシテ逃走ノ虞ナシト認ムル場合ニ於テハ此割合ヲ變更スルコトヲ得

第四十五條　定役ニ服スヘキ者刑期五分ノ三ヲ經過シタルトキハ典獄ニ於テ現ニ

其監獄ニ在ル所ノ作業ノ中ニ就キ出獄後自活ノ道ヲ得ヘキト認ムルモノヲ指定スヘシ但刑期一年未滿ノ者ハ此限ニアラス

第四十六條　定役ニ服スヘキ者ハ風雨積雪等ノ爲メ既定ノ作業ニ就カシメ難キトキト雖モ他ノ作業ニ就ケ休役セシムヘカラス

第四十七條　科程ノ了否ハ正午ト罷役前トニ於テ毎日二回之ヲ撿査スヘシ

第四十八條　毎日囚人ヲシテ作業ニ就カシムルニ際シ悉ク之ヲ監房外ニ整列セシメ看守長及看守女監取締點撿ヲナスヘシ還房セシムルトキモ亦同シ

第四十九條　在監人ノ起床ヨリ就寢ニ至ル迄ノ動作時限ハ別表ニ之ヲ定ム但作業ニ依リ已ムヲ得サル場合ニ於テハ內務大臣ノ認可ヲ得テ其時限ヲ伸縮スルコトヲ得(別表ハ本則ノ末ニ出ツ)

第五十條　起床還房就役罷役就寢其他ノ動止ヲ命スルハ鈴若クハ柝ヲ以テシ全監一齊ニ動止セシム

第三章　工錢

第五十一條　各種ノ工錢ハ其地普通ノ傭工錢ニ照シ各自ノ技能ト就役時間トニ應シ一日若干ト定ムヘシ

第五十二條　免役日ニ於テ囚人ノ炊事掃除病者ノ看護其他監獄ノ用ニ使役スルトキハ科程外ノ工錢ノ與フヘシ

第五十三條　在監人ニ與フヘキ工錢ハ毎月ノ首ニ於テ其前月總計金額ヲ本人ニ示スヘシ

第四章　給與

第五十四條　囚人ノ衣類ハ赭色懲治人ノ衣類並ニ刑事被告人ニ貸與スル衣類ハ淺葱色ニシテ總テ筒袖トシ長短二種ニ分ツ男ノ通常服ハ長衣就役服ハ短衣トシ女服ハ總テ長衣トス

第五十五條　囚人ノ蒲團ハ赭色懲治人及刑事被告人ノ蒲團ハ淺葱色トシ各自ニ貸與シテ二人以上合着セシムルコトヲ得ス

第五十六條　刑事被告人ノ着用スル衣類ニシテ時季ニ適セス又ハ汚穢シテ衞生上ニ害アリト認ムルトキハ之ヲ貸與ス

第五十七條　在監人ノ衣服ノ外襟及蒲團ニハ白布ヲ縫着シ之ニ其者ノ番號ヲ墨書スヘシ

第五十八條　在監人ニ貸與スル衣類雜具左ノ如シ

通常服

一單衣　一袷　一綿入　一襦袢

就役服

一單衣　一袷　一綿入　一襦袢　一股引

婦女ニハ股引ニ代テ前垂ヲ貸與スルコトヲ得

雜具

一蒲團　一蚊蟵　一莞莚　一木枕　一帶　長三尺

一褌　長三尺　一手巾　一嚢　一笠　一履物

以上ノ貸與品ハ地方ノ便宜ニ依リ之ヲ斟酌取捨シ澣濯補綴シテ其用ニ充ツルコトヲ得此他草鞋用紙ハ之ヲ附與ス

極寒ノ地方ニ於テハ内務大臣ノ認可ヲ得テ足袋ノ貸與スルコトヲ得

第五十九條　病者ニ貸與スル衣類雜具ハ醫師ノ意見ヲ問ヒタル上典獄ニ於テ變更又ハ增減スルコトヲ得

第六十條　病者ノ食量ハ醫師ノ診斷ニ依テ之ヲ增減スヘシ

第六十一條　病者ノ攝養ニ効アル飮食物又ハ温ヲ取ル湯婆等ヲ用ユルコトヲ要スルトキハ醫師ヲシテ其旨ヲ證明セシメタ典獄之ヲ考撿シテ許可スルヿアルヘシ

第六十二條　四人及懲治人作業ニ勉勵シテ食費ヲ償フニ足ルヘキ工錢ヲ得ル者ニハ其請ニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ賄ヒ之ヲ給スルコトヲ得但其種類分量ハ典獄豫メ制限ヲ設クヘシ

第六十三條　工錢ヲ以テ食物ヲ購給スルハ一月十回以下ニシテ一回金三錢ヲ過クルコトヲ得ス但其購給費ハ領置工錢ノ半額ヲ過クヘカラス

第六十四條　食用器具左ノ如シ

一木椀　一箸　一飯器

第六十五條　監房常置ノ器具左ノ如シ

一貯水器並ニ飮器　木製

一唾壺　木製又ハ竹製

一便器　木製大小二種但監房ニ厠圊ノ接續スルモノニハ此器ヲ用セス

一小箒　草ノ種類ヲ用テ製作セシ軟カナルモノ

一洗手盆　木製

第五章　衛生及死亡

第六十六條　監房ハ常ニ清掃シ不潔ナラシメサルヲ要ス監獄内ノ厠圊並ニ便器ハ度數ヲ定メテ掃除シ常ニ清潔ナラシムヘシ

第六十七條　病者ノ居室身體衣類臥具等ハ特ニ清潔ニ爲スヘシ

第六十八條　刑事被告人及定役ニ服セサル囚人ハ毎日一時以内監房外ニ於テ運動ヲ許ス

第六十九條　衣類臥具雜具其他ノ物品ハ種質ニ由リ時々熱湯ヲ用ヒテ之ヲ滌ヒ又ハ大氣ニ晒シ臭氣ヲ去リ虫害ヲ防クヲ要ス但病者ノ物品ト混一シテ之ヲ晒洗スヘカラス

第七十條　入浴ノ定度ハ毎年六月ヨリ九月迄ハ五日毎ニ一次以上十月ヨリ五月迄ハ十日毎ニ一次以上トス

第七十一條　刑事被告人又ハ定役ニ服セサル囚人及拘留囚ノ鬚髮ハ不潔ナラサル樣梳理セシムヘシ但鬚髮ヲ剃刈セシコトヲ請フ者アルトキハ典獄之ヲ許可スルコトアルヘシ

第七十二條　髮ヲ短薙セサルモノヽ監房ニハ木梳一箇ヲ備ヘ置クヘシ

第七十三條　刑事被告人ノ親族故舊ヨリ滌濯ノ爲メ其衣類ノ下付ヲ請フトキハ本人ノ承諾ヲ得テ典獄之ヲ許可スルコトアルヘシ

其密室監禁者ニ係ルトキハ當該裁判官ノ允許ヲ經ヘキモノトス

第七十四條　傳染病流行ノ兆アルトキハ其豫防ヲ愼密ニスヘシ若シ在監人中傳染病者アルトキハ直ニ離隔室ニ移シ其消毒ヲ嚴ニシ病性及感染ノ形狀ヲ詳悉シ典獄ヨリ所屬長官ニ報告シ且其旨ヲ市町村長及警察署ニ通知スヘシ

第七十五條　傳染病流行ノ際ハ飲食物ノ差入及購給ヲ停止スルコトヲ得

第七十六條　傳染病流行ノ地ヲ發シ若クハ其地方ヲ經過シタル者新ニ入監スルトキハ一週日以上他ノ者ト離隔シ其携有スル物品ハ消毒ヲ行フヘシ

第七十七條　死亡者又ハ刑死者アルトキハ其年月日時ヲ記シ典獄ヨリ親屬ニ通知スヘシ

刑事被告人死亡シ又ハ囚人及懲治人ニシテ裁判所ノ訊問中ニ係ル者死亡シタルトキハ之ヲ其裁判所ニ申報スヘシ

第七十八條　在監人病死シタルトキハ醫師ノ診案ニ據リ病症及其因由並ニ死亡ノ年月日時ヲ名籍簿ニ記載スヘシ若シ變死シタルトキハ醫師ノ診案ニ據リ死亡ノ因由及其年月日場所死狀等ヲ名籍簿ニ詳記スヘシ

第七十九條　死者ノ親族若クハ故舊ニ其遺骸ノ下付ヲ許シタルトキハ其者ヲシテ簿冊ヘ署名捺印セシムヘシ

監署ニ於テ遺骸ヲ假葬スルトキハ棺ニ入テ之ヲ埋メ其上ニ面三寸長三尺五寸ニ過キサル氏名標ヲ建ツヘシ

第八十條　在監人ノ遺骸ハ假葬シタル後ト雖モ下付ヲ請フ者アルトキハ之ヲ許ス

第八十一條　在監人死亡シ監署ニ領置ノ貨物アルトキハ親屬ニ下付ス刑死者ノ貨物モ亦同シ

親屬遠地ニ在テ物品ヲ送付スルニ入費ヲ要スルモノハ其物品ヲ販賣シテ代價ヲ遞送スルコトヲ得但遞送費ハ親屬ノ自辨トス

第八十二條　假葬シタル死亡者刑死者ノ遺骸ニシテ滿三ケ年ニ至ルモ引取人ナキトキハ更ニ合葬スルコトヲ得但合葬シタルトキハ其墓標ニ石ヲ用ユヘシ

第六章　書信及接見

第八十三條　在監人ヨリ發スル信書ハ書信紙ヲ用ヒシメ典獄之ヲ封緘遞送スルモノトス但郵便税ハ自辨トス

第八十四條　官司ノ訊問ニ由テ發信ヲ要スルニ當リ郵便税ヲ自辨スルコト能ハサルトキハ監獄費ヲ以テ支辨スヘシ

第八十五條　信書ヲ檢閲スルハ先ツ直行順讀シ次ニ逆讀斜讀又ハ横讀シ不正不良ノ文意アルヤ否ヤヲ詳査スヘシ

第八十六條　在監人ニ接見セント請フモノアルトキハ典獄其氏名身分住所職業及緣由ヲ詳悉シタル上之ヲ許スモノトス

接見ノ時間ハ三十分時ヲ過クルヲ得ス但死刑ノ執行以前及集治監又ハ假留監ニ押送以前ニ係ル囚人ニハ特ニ一時間ノ接見ヲ許スコトヲ得

接見ヲ許シタル者若シ接見ヲ請ヒシ旨趣ニ違フ談話ヲ為シタルカ又ハ姿貌其他形狀等ヲ以テ相通スルノ形跡アルトキハ之ヲ停止スヘシ

接見ノ際ハ在監人男子ニ係ルトキハ看守長看守立會女子ニ係ルトキハ看守長女監取締立會フヘシ

第八十七條　辯護人トノ接見ハ接見室ニ於テノ談話ニテ事實ヲ盡シ難キトキニ限リ訊問所ニ於テ之ヲ為サシムルコトヲ得

病囚トノ接見ハ危篤ノ際ニ限リ病室ニ於テ之ヲ為サシムルコトヲ得

第八十八條　在監人接見ノ時限ハ午前八時ヨリ午後四時迄ノ間トス

第七章　差入品

第八十九條　刑事被告人ニ差入ルヘキ飲食物ハ酒及煙草ヲ除キ監獄內ニ於テ炊烹ヲ要セサルモノニシテ一日三回一人一食ノ量ニ限ル

第九十條　總テ差入品ハ看守長立會看守ニ於テ之ヲ撿査シ毒氣酒氣又ハ包藏物其他通謀ノ媒介トナルモノナキヤ否ヲ精撿スヘシ但飲食物ノ撿査ニハ醫師ヲシテ立會ハシムヘシ

第九十一條　撿査ノ爲メ解縫シタル衣類臥具アルトキハ監獄ニ於テ之ヲ原形ニ復スヘシ

第九十二條　免幽閉ヲ受ケタル者親屬故舊ヨリ金錢衣服臥具等ノ寄贈ヲ受ケタルトキハ其旨ヲ典獄ニ申告セシムヘシ

第八章　敎誨

第九十三條　敎誨ハ免役日又ハ日曜日午後又ハ平日罷役後又ハ休役間ニ於テ之ヲ行フヘシ

第九十四條　免役日及日曜日ノ敎誨ハ敎誨堂ニ於テシ休役間又ハ罷役後ノ敎誨ハ被敎誨者ノ居所ニ就キ之ヲ爲スモノトス

第九章　賞與

第九十五條　監獄則ニ依リ賞與セシモノニ與フル賞表ニハ曲尺方二寸ノ淺葱色ノ布ヲ用ヒ賞與セシ每ニ之ヲ與ヘ上衣ノ左袖肩臂間ノ表面ニ縫着スルモノトス

第九十六條　賞表ヲ有スル者ニハ左ノ優遇ヲ爲スモノトス

一　第五十八條ニ定メタル衣類雜具ハ成ルヘク良品ヲ貸與ス

二　書信ハ一箇月ニ二通二次之ヲ爲スコトヲ許ス

三　入浴ハ尋常囚人ニ先タヽシムルコトアルヘシ

四　賞表二箇以上ヲ有スル者ニハ仍ホ作業ノ勞働稍輕キモノヲ課シ且飯米ノ割合ヲ十分ノ五ニ增加ス

五　賞表三箇以上ヲ有スルモノニハ仍ホ將來生計ノ爲メ作業ノ變換ヲ請ハシムルコトヲ得

六　賞表一箇ヲ得タル者ニハ監獄則第二十八條ニ定メタル外菜ヲ一週ニ一回其二箇ヲ得タル者ニハ二回其三箇以上ヲ得タル者ニハ三回增給ス但其價ハ一回一錢ニ過クルコトヲ得ス

第九十七條　四人及懲治人左ニ揭ケタル所爲アルトキ金二十五錢以下ヲ以テ之ヲ

賞與スルコトヲ得但賞表ヲ與フルノ限リニアラス

一　在監人逃走セントスル者ヲ密告シタルトキ

二　人命ヲ救援シ及逃走者ヲ捕得シタルトキ

三　監獄ニ係ル火水風災ヲ防禦シタルトキ

第九十八條　刑事被告人ニシテ前條ノ所爲アルトキハ之ヲ錄シテ所屬長官ニ申報シ仍ホ當該豫判官ノ參考ニ供スヘシ

第十章　懲罰

第九十九條　減食受罰者ハ其罰期中別房ニ入置クヘシ

第百條　懲罰ヲ受ケタル者ノ居房ハ其罰期終ルモ仍ホ懲罰ヲ受ケサル者ト別異スヘシ但改悛ノ狀著シキトキハ合居セシムルコトヲ得

第百一條　犯則者ニシテ事未タ發覺セサル前ニ於テ司獄官吏ニ自首シタルトキハ其懲罰ヲ全免又ハ減輕スルコトヲ得

數罪俱發シタルモノハ一ノ重キニ從ヒ處罰スヘシ

第百二條　懲罰ニ處セラレタル者裁判事件ニテ出廷スルトキハ當日ニ限リ其執行ヲ中止スヘシ但中止中罰過セシ日數ハ懲罰期限ニ算入スヘカラス

第百三條　兩脚ニ鈇ヲ施ス者改悛ノ狀顯ハレ其施鈇期限ノ半ヲ經過シタルトキハ一脚ノ鈇ヲ免除スルコトヲ得

第百四條　鈇ヲ施シタル者改悛ノ狀最モ顯著ニシテ其施鈇期限ノ四分ノ三ヲ經過シタルトキハ假ニ其鈇ヲ免除スルコトヲ得

第百五條　假ニ鈇ヲ免除シタル者其罰期內更ニ懲罰ヲ受クルトキ直ニ之ヲ復シ其假免中經過セシ日數ハ施鈇期限ニ算入スヘカラス

第百六條　懲罰ニ處シタル者アルトキハ典獄若クハ看守長時々其動靜ヲ窺察シ教誨師ヲシテ之ヲ問ハシムヘシ

附則

此細則ニ於テ市町村長トアルモノ市町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ戶長之ニ當ルヘシ

在監人動作時限表

時限／月日	一月
起床	午前六時
監房掃除並ニ喫飯	一時間
就役	午前七時
午飯	十二時ヨリ一時間
罷役	午後三時三十分
還房	五時迄
就寢	午後八時
服役時間合計	七時三十分時間

二月	六時	一時間	七時	十二時ヨリ一時間	四時	五時三十分迄	八時	八時間
三月	五時卅分	一時間	六時卅分	十二時ヨリ一時間	四時	六時迄	八時	八時三十分時間
四月	五時	一時間	六時	十二時ヨリ一時間	四時卅分	六時三十分迄	九時	九時三十分時間
五月	五時	一時間	六時	十二時ヨリ一時卅分時間	五時	七時迄	九時	九時三十分時間
六月	四時	一時間	五時	十二時ヨリ二時間	五時卅分	七時三十分迄	九時	十時三十分時間
七月	四時	一時間	五時	十二時ヨリ二時間	五時卅分	七時三十分迄	九時	十時三十分時間
八月	四時卅分	一時間	五時卅分	十二時ヨリ二時間	五時	七時迄	九時	九時三十分時間
九月	五時	一時間	六時	十二時ヨリ一時卅分時間	四時卅分	六時迄	八時	九時間
十月	五時卅分	一時間	六時卅分	十二時ヨリ一時間	四時	五時三十分迄	八時	八時三十分時間
十一月	六時	一時間	七時	十二時ヨリ一時間	四時	四時三十分迄	八時	八時間
十二月	六時卅分	一時間	七時卅分	十二時ヨリ一時間	三時卅分	四時迄	八時	七時間

備考

一就役罷役及還房ノ時間ヲ除クノ外ハ囚人ニシテ服役セサル者懲治人及刑事被告人ニモ亦本表ヲ適用ス

一炊事又ハ病者ノ看護ニ從事スル囚人並ニ病者ノ起床及就寢時間ハ本表ニ依ルノ限リニアラス

○內務省訓令第三十三號ノ內

特赦免幽閉假出獄ノ申渡及賞表授與式

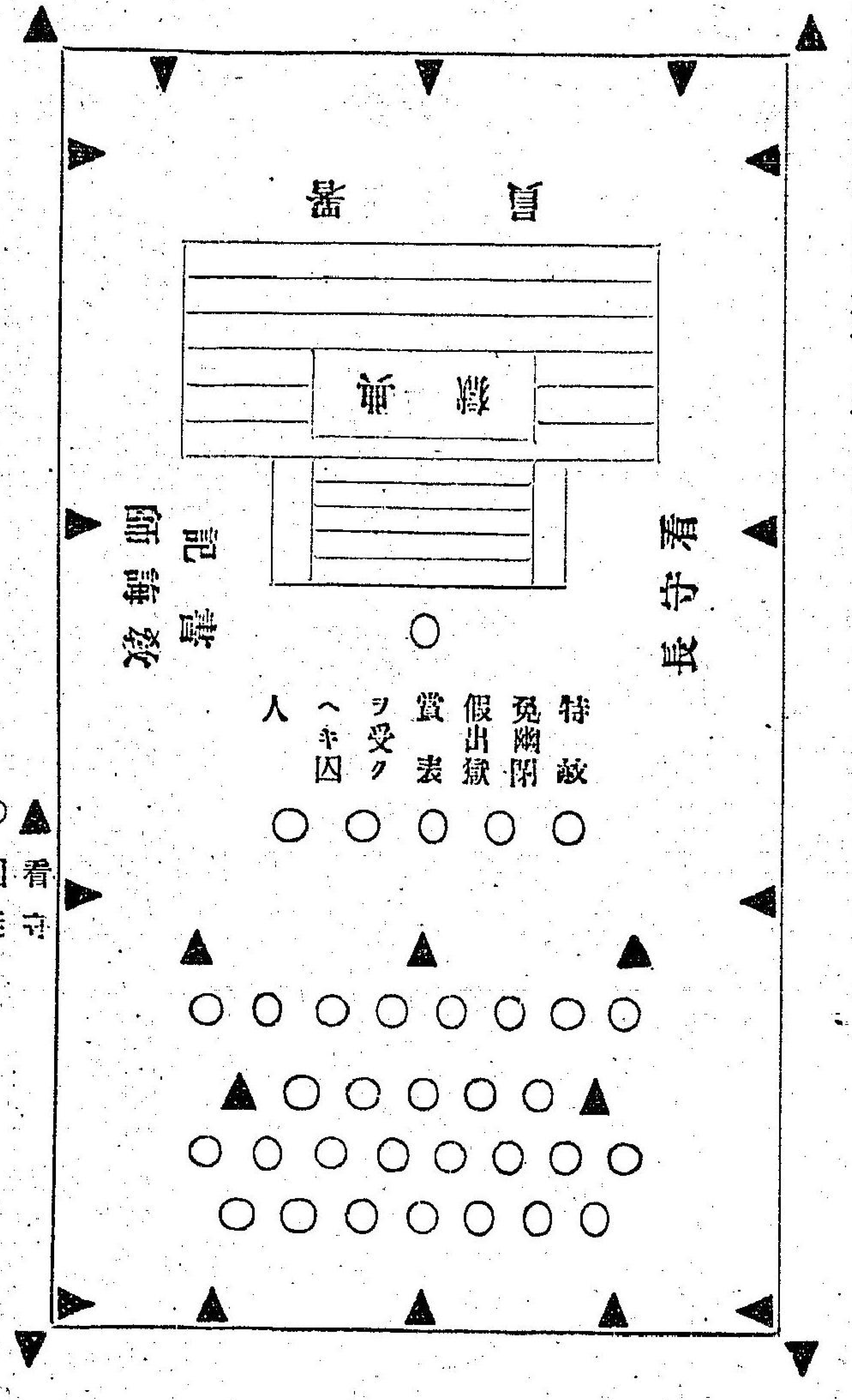
一式場ハ教誨堂又ハ衆囚ヲ整列セシムルニ足ルノ場所ヲ以テ之ニ充テ臨場官吏ノ席次及ヒ囚人ノ列次ハ左圖ノ如クスヘシ

但女囚ハ男囚ト同列セシメス其式場又ハ時日ヲ異ニスヘシ

一典獄席ニ着クヤ看守ハ衆囚ニ號令(氣ヲツケノ類)シ之ヲシテ敬禮セシムヘシ式畢テ典獄ノ退席セントスルトキモ亦同シ

一典獄卓ニ着ケハ書記ハ特赦免幽閉假出獄若クハ賞表ヲ受クヘキ囚人ヲ一人ツヽ順次ニ呼出シ典獄ノ卓前ニ進マシメ而シテ典獄ハ其申渡書ヲ執リ之ヲ朗讀シテ聽得セシメ免幽閉又ハ假出獄者ニハ尙ホ出獄後ノ心得方ヲ懇諭シテ其證票ヲ授

與シ賞表ヲ受クヘキ者ニハ其申渡書ノ謄本ヲ添ヘ賞表ヲ授與スヘシ
但賞表ハ白紙ニ包ム等其鄭重ナランコトヲ要ス
一假出場申渡モ亦此式ニ準スヘシ



○布告第三十六號　明治十三年七月十七日
刑法別冊之通改正候條此旨布告候事
但實際施行ノ期日ハ追テ布告スヘキ事

○布告第三十六號　明治十四年七月八日
刑法治罪法來ル明治十五年一月一日ヨリ施行候條此段布告候事

（別冊）

刑法摘要

第一編　總則

第一章　法例

第一條　凡法律ニ於テ罰ス可キ罪別テ三種ト爲ス
一　重罪
二　輕罪
三　違警罪

第二章　刑例

第一節　刑名

第六條　刑ハ主刑及ヒ附加刑ト爲ス

主刑ハ之ヲ宣告ス

附加刑ハ法律ニ於テ其宣告スル者ト宣告セサル者トヲ定ム

第七條　左ニ記載シタル者ヲ以テ重罪ノ主刑ト爲ス

一　死刑
二　無期徒刑
三　有期徒刑
四　無期流刑
五　有期流刑
六　重懲役
七　輕懲役
八　重禁獄
九　輕禁獄

第八條　左ニ記載シタル者ヲ以テ輕罪ノ主刑ト爲ス

一　重禁錮
二　輕禁錮
三　罰金

第九條　左ニ記載シタル者ヲ以テ違警罪ノ主刑ト爲ス

一　拘留
二　科料

第十條　左ニ記載シタル者ヲ以テ附加刑ト爲ス

一　剝奪公權
二　停止公權
三　禁治産
四　監視
五　罰金
六　沒收

第十一條　刑ヲ執行シ及ヒ犯人ヲ撿束スル方法細目ハ別ニ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第二節　主刑處分

第十二條　死刑ハ絞首ス但規則ニ定ムル所ノ官吏臨撿シ獄內ニ於テ之ヲ行フ

第十三條　死刑ハ司法卿ノ命令アルニ非サレハ之ヲ行フヿヲ得ス

第十四條　大祀令節國禁ノ日ハ死刑ヲ行フヿヲ禁ス

第十五條　死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懷胎ナル時ハ其執行ヲ停メ分娩後一百日ヲ經ルニ非サレハ刑ヲ行ハス

第十六條　死刑ノ遺體ハ親屬故舊請フ者アレハ之ヲ下付ス但式ヲ用ヰテ葬ルヿヲ許サス

第十八條　徒刑ノ婦女ハ島地ニ發遣セス內地ノ懲役場ニ於テ定役ニ服ス

第二十五條　定役ニ服スル囚人ノ工錢ハ監獄ノ規則ニ從ヒ其幾分ヲ獄舍ノ費用ニ供シ其幾分ヲ囚人ニ給與ス但現役百日以內ハ給與ノ限ニ在ラス

第四十條　監視ノ期限ハ主刑ノ終リタル日ヨリ起算ス主刑ノ期滿免除ヲ得タル時ハ其捕ニ就キタル日ヨリ起算ス

第五節　刑期計算

第四十九條　刑期ヲ計算スルニ一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ曆ニ從フ

第五十條　刑ハ裁判確定シタル後ニ非サレハ之ヲ執行スルヿヲ得ス

第五十一條　刑期ハ刑名宣告ノ日ヨリ起算ス若シ上訴ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ從フ

一　犯人自ラ上訴シテ其上訴正當ナル時ハ前判宣告ノ日ヨリ起算ス若シ其上訴不當ナル時ハ後判宣告ノ日ヨリ起算ス

二　撿査官ノ上訴ニ係ル者ハ其上訴正當ナルト否トヲ分タス前判宣告ノ日ヨリ起算ス

三　上訴中保釋ヲ得又ハ責付セラレタル者ハ其日數ヲ刑期ニ算入スルヿヲ得ス

第五十二條　刑期限內逃走シ再ヒ捕ニ就キタル者ハ其逃走ノ日數ヲ除キ前後受刑ノ日ヲ計算ス

第六節　假出獄

第五十三條　重罪輕罪ノ刑ニ處セラレタル者獄則ヲ謹守シ悛改ノ狀アル時ハ其刑期四分ノ三ヲ經過スルノ後行政ノ處分ヲ以テ假ニ出獄ヲ許スヿヲ得

無期徒刑ノ囚ハ拾五年ヲ經過スルノ後亦仝シ

流刑ノ囚ハ第二十一條ニ照シ幽閉ヲ免スルノ外假出獄ノ例ヲ用ヰス

第五十五條　假出獄ヲ許サレタル者ハ行政ノ處分ヲ以テ治產ノ禁ノ幾分ヲ免スルコトヲ得但本刑期限內特別ニ定メタル監視ニ付ス

第五十六條　假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ直チニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ハ刑期ニ算入スルコトヲ得ス

第五十七條　刑期限內更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者ハ假出獄ヲ許サス

第二編

第三章

第三節　囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

第百四十二條　已決ノ囚徒逃走シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ獄舍獄具ヲ毀壞シ又ハ暴行脅迫ヲ爲シテ逃走シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第百四十三條　已決ノ囚徒逃走ノ罪ヲ犯スト雖モ再犯ヲ以テ論セス其刑期限內再ヒ逃走シタル者ハ再犯ヲ以テ論ス

第百四十四條　未決ノ囚徒入監中逃走シタル者ハ第百四十二條ノ例ニ同シ但原犯ノ罪ヲ判決スル時ニ於テ數罪俱發ノ例ニ照シテ處斷ス

第百四十五條　囚徒三人以上通謀シテ逃走シタル時ハ第百四十二條ノ例ニ照シテ各一等ヲ加フ

第百四十六條　囚徒ヲ逃走セシムル爲メ兇器其他ノ器具ヲ給與シ又ハ逃走ノ方法ヲ指示シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス因テ囚徒ノ逃走ヲ致シタル時ハ一等ヲ加フ

第百四十七條　囚徒ヲ劫奪シ又ハ暴行脅迫ヲ以テ囚徒ノ逃走ヲ助ケタル者ハ一年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ輕懲役ニ處ス

第百四十八條　囚徒ヲ看守シ又ハ護送スル者囚徒ヲ逃走セシメタル時ハ亦前條ノ例ニ同シ

第百四十九條　前數條ニ記載シタル輕罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第百五十條　看守又ハ護送者其懈怠ニ因リ囚徒ノ逃走ヲ覺ラサル時ハ二圓以上二十圓以下ノ罰金ニ處ス

若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル時ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二編
第九章　官吏瀆職ノ罪
第二節　官吏人民ニ對スル罪

第二百七十九條　司獄官吏程式規則ヲ遵守セスシテ囚人ヲ監禁シ若クハ囚人ヲ出獄セシム可キノ時ニ至リ之ヲ放免セサル者ハ亦前條ノ例ニ同シ

第二百八十條　前二條ニ記載シタル官吏又ハ護送者囚人ニ對シ飲食衣服ヲ屏去シ其他苛酷ノ所爲ヲ施シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ囚人ヲ死傷ニ致シタル時ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ一等ヲ加ヘ重キニ從テ處斷ス

第二百八十一條　水火震災ノ際官吏囚人ノ監禁ヲ解クコトヲ怠リ因テ死傷ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シテ一等ヲ加フ

第二百八十四條　官吏人ノ囑托ヲ受ケ賄賂ヲ收受シ又ハ之ヲ聽許シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

因テ不正ノ處分ヲ爲シタル時ハ一等ヲ加フ

○布告第六十七號　明治十四年十二月十九日

刑法附則別冊之通リ相定メ明治十五年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

右奉　勅旨布告候事

（別冊）

刑法附則　摘要

第一章　主刑執行

第一條　死刑ハ其執行ヲ爲ス裁判所ノ檢察官書記及ヒ典獄刑場ニ立會ヒ典獄ヨリ囚人ニ死刑ヲ執行スルコトヲ告示シタル後押丁ヲシテ之ヲ決行セシム但其期限ハ午前十時前トス

第二條　死刑ヲ行フ時ハ刑場ノ警戒ヲ嚴ニシ執行ニ關スル者ノ外刑場ニ入ルコトヲ許サス但立會官吏ノ許可ヲ得タル者ハ此限ニ在ラス

第四條　左ニ記載シタル日ハ死刑ヲ行フコトヲ禁ス

元始祭
孝明天皇祭
紀元節

春季皇靈祭
仁孝天皇祭
神武天皇祭
六月大祓
秋季皇靈祭
神宮神嘗祭
天長節
後桃園天皇
新嘗祭
光格天皇祭
十二月大祓

第五條　死刑ノ宣告ヲ受ケタル婦女懐胎ト申スル者ハ醫師及ヒ穩婆ヲシテ之ヲ撿査セシメ果シテ懐胎ナル時ハ撿察官ヨリ司法卿ニ上申シテ其執行ヲ停メ産後一百日ヲ經テ更ニ司法卿ノ命令ヲ受ケ決行スヘシ

第六條　死刑ノ遺骸ハ一定ノ場所ニ埋ム若シ親屬故舊請フ者アル時ハ典獄之ヲ許

可シ下付スルコトヲ得

第七條　死刑ノ宣告ヲ受ケタル者執行ニ至ルマテ何時ニテモ典獄ノ許可ヲ得テ其親屬故舊ニ接見スルコトヲ得

第十六條　懲役重禁錮ノ囚ハ便宜ニ從ヒ獄外ノ役ニ服セシムルコトヲ得

第十七條　禁獄輕禁錮ノ囚獄内ニ於テ自ラ工業ヲ爲サントスル者ハ典獄之ヲ許可ス可シ

第十八條　服役限内更ニ罪ヲ犯シ再ヒ定役ニ服スル者後犯ノ刑期百日以内ハ工錢ヲ給與セス

第十九條　囚人ニ給與スル工錢ノ額ヲ定メ之ヲ交付シ及ヒ領置スル方法ハ監獄ノ規則ニ從フ

第二十條　罰金科料ノ宣告ヲ受ケ未タ納完セサル前ニ於テ犯人身死スル時ハ之ヲ徵收セス附加ノ罰金ニ於ルモ亦同シ

第二章

第二十一條　監視ハ主刑ノ終リタル後仍ホ將來ヲ撿束スル爲メ警察官吏ヲシテ犯人ノ行狀ヲ監視セシムル者トス

第二十二條　監視ニ付ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定メシメ主刑ノ終リタル時典獄ヨリ犯人ヲ其住居地ノ警察署ニ護送シ監視ヲ執行セシム主刑ノ期滿免除ヲ得タル者又ハ主刑ヲ免シ止タ監視ニ付スル者ハ其裁判所ノ檢察官ヨリ警察署ニ護送ス可シ

第三十二條　監視ニ付スル者住居ナク及ヒ引取人ナキ時ハ其期限間監獄中ノ別房ニ留置シ工業ヲ爲サシメ又ハ使役ニ供ス住居遠地ニ在テ歸着スル資力ナキ者又同シ

第三十三條　監獄中ノ別房ニ留置シタル者限內引取人ヲ得又ハ住居ノ地ニ歸着スル資力ヲ得タル時ハ其地ニ送致シテ殘期ノ監視ヲ執行セシム可シ

第三十四條　刑期限內再ヒ罪ヲ犯シ初犯再犯共ニ監視ニ付ス可キ時又ハ監視ノ期限間再ヒ罪ヲ犯シ更ニ監視ニ付ス可キ時ハ並ニ主刑滿期ノ後前後ノ期限ヲ通算シテ監視ヲ執行ス可シ

第三十五條　罰金ヲ禁錮ニ換ヘタル者監視ニ付ス可キ時ハ其禁錮ノ日數ヲ監視ノ期限ニ算入ス可シ

第三章　假出獄及特別監視

第三十八條　假出獄ヲ許ス可キ者アル時ハ典獄ヨリ其犯人ノ行狀及ヒ刑名入獄ノ年月ヲ記載シ假ニ出獄ヲ許サレンコトヲ內務司法兩卿ニ上申シテ許可ヲ受ク可シ

第三十九條　假出獄ヲ許シタル時ハ典獄ヨリ其證票ヲ犯人ニ下付ス可シ

第四十條　假出獄證票ニハ左ノ條件ヲ記載スヘシ

一　本人ノ屬籍氏名年齡住所罪名刑名及ヒ處刑ノ年月日

二　殘期何年何月何日間假出獄ヲ許ス事

三　假出獄中ハ特別監視ニ付ス可キ事

四　假出獄中更ニ重輕罪ヲ犯シタル時ハ直チニ出獄ヲ停止シ出獄中ノ日數ヲ刑期ニ算入セサル事

第四十二條　假出獄ヲ許ス可キ者ハ豫メ其住所ヲ定メシメ出獄ノ日典獄ヨリ其證票ノ謄本ヲ添ヘ犯人ヲ其住居ノ地ノ警察署ニ護送シ特別監視ヲ執行セシム可シ

第四十三條　特別監視ニ付スル者ハ第二十三條第二十四條第二十五條第二十六條第二十九條第三十一條ノ例ヲ適用ス

第四十六條　假出獄ヲ許サレタル者刑期滿限ノ日ニ至レハ假出獄證票ヲ警察署ニ

還納シ警察所ヨリ證票ヲ出シタル典獄ニ遞送ス可シ
主刑滿限ノ後監視ニ付ス可キ犯人ナル時ハ警察署ニ於テ第二章ノ例ニ從テ處分ス可シ

第四十七條　假出獄ヲ許ス可キ者住所ナク及ヒニ引取人ナキ時ハ第三十二條ノ例ニ從ヒ監獄中ノ別房ニ留置ス可シ

刑事訴訟法　明治二十三年十月六日

第一編　總則

第一條　公訴ハ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用スルコトヲ目的トスルモノニシテ法律ニ定メタル區別ニ從ヒ檢事之ヲ行フ

第二條　私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償贓物ノ返還ヲ目的トスルモノニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス

第八條　公訴ノ時效ハ左ノ期間ヲ經過スルニ因テ成就ス
第一　違警罪ハ六月
第二　輕罪ハ三年

第三　重罪ハ十年

第十五條　此法律ニ於テ期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シ日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス若シ最終ノ日休暇ニ當ルトキハ期間ニ算入ス可ラス但時效ノ期間ハ此限ニ在ラス
一日ト稱スルハ二十四時ヲ以テシ一月ト稱スルハ三十日ヲ以テシ一年ト稱スルハ暦ニ從フ

第二十條　官吏公吏ノ作ル可キ書類ハ其所屬官署公署ノ印ヲ用ヰ年月日及ヒ場所ヲ記載シテ署名捺印シ毎葉ニ契印ス可シ若シ官署公署ノ印ヲ用ユルコト能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ此規定ニ背キタル時ハ其書類ノ効ナカル可シ
官吏公吏ニ非ラサル者ノ作ル可キ書類ニハ本人自ラ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ官吏公吏ノ面前ニ於テ作リタル場合ヲ除ク外立會人代署シ其事由ヲ記載ス可シ

第二十一條　官吏其他何人ニ限ラス訴訟ニ關スル書類ノ原本正本又ハ謄本ヲ作ルニ付キ文字ノ改竄ス可カラス若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記入アルトキハ之ニ認印

ス可シ文字ヲ削除スルトキハ之ヲ讀得ヘキ爲メ字體ヲ存シ其數ヲ記載ス可シ此
規定ニ背キタルトキハ其變更增減ノ効ナカルヘシ

第三編

第一章

第一節　告訴及告發

第五十二條　官吏公吏其職務ヲ行フニ因リ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ速ニ其職務ヲ行フ地ノ撿事ニ告發ス可シ

告發ハ官吏公吏ノ署名捺印シタル書面ヲ以テ之ヲ爲シ成ルヘク證憑及ヒ事實參考ト爲ル可キ事物ヲ添フ可シ

第五十三條　何人ニ限ラス犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタルトキハ第五十條第五十一條ノ規定ニ從ヒ其所在ノ地若クハ犯罪ノ地ノ撿事又ハ司法警察官ニ告發スルコトヲ得

告發ヲ受ケタル司法警察官ハ第四十九條ノ規定ニ從ヒ其處分ヲ爲ス可シ

第三編

第一章

第二節　現行犯罪

第五十六條　現行犯罪トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ

第六十條　何人ニ限ラス重罪又ハ禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪ノ現行犯アル場合ニ於テハ直チニ被告人ヲ逮捕スルコトヲ得

第三編

第三章

第一節　令狀

第七十六條　總テ令狀ニハ被告事件及被告人ノ氏名職業住所ヲ記載ス可シ但召喚狀ヲ除ク外其氏名分明ナラサルトキハ容貌體格等ヲ明示スヘシ

又令狀ニハ之ヲ發スル年月日時ヲ記載シ判事及裁判所書記署名捺印ス可シ

召喚狀ハ執達吏ヲシテ被告人ニ送達セシメ勾引狀勾留狀ハ巡査憲兵卒ヲシテ之ヲ執行セシム

第七十七條　勾引狀勾引狀ハ時宜ニ因リ正本數通ヲ作リ巡査憲兵卒數人ニ分付スルコトアル可シ

前項ノ令狀ヲ執行スルニハ被告人ニ正本ヲ示シ其謄本ヲ下付ス可シ此場合ニ於テハ其正本謄本ニ執行ノ場所日時ヲ記載シ被告人ヲシテ署名捺印セシム若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其旨ヲ附記ス可シ

第八十二條　勾留狀ヲ受ケタル被告人ハ速ニ其令狀ニ記載シタル監獄署ニ引致ス可シ若シ其監獄署ニ引致スルコト能ハサルトキハ假ニ最近ノ監獄署ニ引致スルコトヲ得

何レノ場合ニ於テモ監獄署長ハ令狀ヲ檢閲シテ被告人ヲ受取リ其證書ヲ渡ス可シ

第八十四條　勾留狀ヲ受ク可キ被告人既ニ監獄署ニ在ルトキハ執達吏ヲシテ之ヲ本人ニ送達セシムヘシ

第八十五條　密室監禁ノ場合ヲ除ク外被告人ハ監獄則ニ從ヒ官吏ノ立會ニ依リ其親屬故舊又ハ辯護士ニ接見スルコトヲ得

書翰書籍其他ノ書類ハ豫審判事又ハ檢事ノ檢閲ヲ經タル後ニ非ラサレハ被告人ト外人ト之ヲ授受スルコトヲ許サス但豫審判事又ハ檢事ハ其書類ヲ留置クコトヲ得

第三章

第二節　密室監禁

第八十七條　豫審判事ハ豫審中事實發見ノ爲メ必要ナリト思料シタルトキハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ勾留狀ヲ受ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スル言渡ヲ爲スコトヲ得

第八十八條　密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類其他ノ物品ヲ授受スルコトヲ許サス

第八十九條　密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カラス但十日毎ニ其言渡ヲ更改スルコトヲ得

言渡ヲ更改スルトキハ其事由ヲ裁判所長ニ報告ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊問ス可シ

第三編

第三章

第三節　證據

第九十二條　豫審判事臨檢搜索物件差押又ハ被告人證人ノ訊問ヲ爲スニハ裁判所書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作リ豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルコト能ハサルトキハ立會人二名アルヲ要ス但監獄署ニ就テ被告人ヲ訊問スルトキハ其監獄署ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ

前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作リ之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印スヘシ

書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其効ナカル可シ

第三編

第三章

第四節　被告人ノ訊問及ヒ對質

第九十七條　被告人ハ供述書ノ謄本ヲ求ムルコトヲ得

第三編

第三章

第九節　保釋

第百五十條　豫審判事ハ豫審中勾留狀ヲ受ケタル被告人ノ請求ニ因リ檢事ノ意見ヲ聽キ何時ニテモ呼出ニ應シ出頭ス可キ證書ヲ差出シ且保證人ヲ立テシメ保釋ヲ許スコトヲ得

被告人無能力ナルトキハ法律上代理人ヨリ保釋ヲ求ムルコトヲ得

第百五十一條　保證ノ金額ハ豫審判事之ヲ定メ保釋ヲ許ス言渡書ニ記載ス可シ

第百五十二條　保證ヲ爲スニハ被告人又ハ法律上代理人ヨリ金錢若クハ有價證券ヲ差出ス可シ

又裁判所ノ管轄地内ニ住シ且十分ナル資力アル者ヨリ金額ニ充ツ可キ保證書ヲ差出スコトヲ得

第三編

第三章

第十節　豫審終結

第百六十五條　豫審判事ハ左ノ場合ニ於テ免訴ノ言渡ヲ爲シ且被告人勾留ヲ受ケタルトキハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ

第一　犯罪ノ證憑十分ナラサルトキ
第二　被告事件罪トナラサルトキ
第三　公訴ノ時効ニ罹ルトキ
第四　確定判決ヲ經タルトキ
第五　大赦アリタルトキ
第六　法律ニ於テ其罪ヲ全免スルトキ

第百六十六條　被告事件違警罪ナリト思料シタルトキハ區裁判所ニ移ス言渡ヲ為シ且被告人勾留ヲ受ケタルトキハ釋放ノ言渡ヲ為ス可シ

第百六十七條　被告事件裁判所構成法第十六條第二號ニ記載シタル輕罪ナリト思料シタルトキハ區裁判所ニ移ス言渡ヲ為シ其他ノ輕罪ナリト思料シタルトキハ其裁判所ノ輕罪公判ニ付スル言渡ヲ為ス可シ

被告人勾留ヲ受ケタル場合ニ於テ罰金ノ刑ニ該ルモノト思料シタルトキハ釋放ノ言渡ヲ為ス可シ

禁錮ノ刑ニ該ル可キモノト思料シタルトキハ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ為スコトヲ得若シ被告人未タ勾留ヲ受ケサルトキハ令狀ヲ發スルコトヲ得

第百六十八條　被告事件重罪ナリト思料シタルトキハ其裁判所ノ重罪公判ニ付スル言渡ヲ為ス可シ若シ保釋ヲ許シ又ハ責付ヲ為シタルトキハ其言渡ヲ取消シ被告人未タ勾留ヲ受ケサルトキハ令狀ヲ發ス可シ

第百七十四條　豫審終結ノ決定ハ抗告ノ期間內抗告アリタルトキハ其決定アルマテ執行ヲ停止ス但保釋責付ノ言渡ヲ取消ス決定ハ其執行ヲ停止セス

第百七十五條　豫審ニ於テ被告人免訴ノ言渡ヲ受ケ其決定確定シタルトキハ罪名ノ變更アルモ同一ノ事件ニ付再ヒ訴ヲ受クルコトナカル可シ但新ナル證憑アルトキハ此限ニ在ラス新ナル證憑アルトキハ檢事ヨリ之ヲ其裁判所ニ差出シ裁判所ニ於テハ其起訴ヲ許ス可キヤ否ヤヲ決定ス可シ

第四編

第一章　通則

第百七十七條　被告人ハ公廷ニ於テ身体ノ拘束ヲ受クルコトナシ但守卒ヲ置クコトアル可シ

第百七十八條　裁判所ニ於テハ何時ニテモ禁錮以上ノ刑ニ該ル可キ被告人ニ對シ勾引狀又ハ勾留狀ヲ發スルコトヲ得

第百七十九條　被告人ハ辯論ノ爲メ辯護人ヲ用ユルコトヲ得
辯護人ハ裁判所所屬ノ辯護士中ヨリ之ヲ撰任ス可シ但裁判所ノ允許ヲ得タルトキハ辯護士ニ非ラサル者ト雖トモ辯護人ト爲スコトヲ得

第百八十三條　被告人精神錯亂又ハ疾病ニ因リ出頭スルコト能ハサルトキハ全癒ニ至ルマテ辯論ヲ停止ス但罰金以下ノ刑ニ該ル可キ事件ニ付被告人代人ヲ差出シタル時ハ此限ニ在ラス
辯論ニ取掛リタル後被告人精神錯亂シタルトキハ其全癒ノ後新ニ辯論ヲ爲ス可シ其他ノ疾病ニ罹ルトキハ全癒ノ後前ニ停止シタルヨリ以後ノ手續ヲ爲ス可シ但五日間辯論ヲ停止シ又ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求アリタルトキハ新ニ辯論ヲ爲ス可シ
若シ被告事件及法律ノ適用ニ付既ニ辯論ヲ終リタルトキハ其全癒ノ後更ニ取調ヲ爲スコトナク裁判ヲ爲ス可シ

第二百三條　刑ノ言渡ヲ爲スニハ事實及法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且犯罪ノ證憑ヲ明示ス可シ
無罪又ハ免訴ノ言渡ヲ爲スニ付テモ亦其理由ヲ明示ス可シ

第二百六條　訴訟關係人ハ其費用ヲ以テ判決ノ正本謄本又ハ抄本ヲ求ムルコトヲ得但上訴ノ爲メ其求ヲ爲シタルトキハ書記ヨリ二十四時以内ニ之ヲ下付ス可シ

第四編

第二章　區裁判所公判

第二百二十二條　被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬セサルトキハ判決ヲ以テ管轄違ノ言渡ヲ爲ス可シ若シ被告人勾留ヲ受ケタルトキハ放免ノ言渡ヲ爲ス可シ
本條ノ塲合ニ於テ勾留ヲ要スルモノト認メタルトキハ前勾留狀ヲ存シ又ハ新ニ勾留狀ヲ發シ其事件ヲ檢事ニ交付ス可シ

第二百二十三條　被告事件其裁判所ノ管轄ニ屬シ且犯罪ノ證憑十分ナルトキハ判決ヲ以テ法律ニ從ヒ刑ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十四條　犯罪ノ證憑十分ナラス又ハ被告事件罪ト爲ラサルトキハ判決ヲ以テ無罪ノ言渡ヲ爲シ又第百六十五條第三號以下ノ塲合ニ於テハ判決ヲ以テ免訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

第二百二十九條　故障申立ノ期間ハ三日トス此期間ハ罰金以下ノ刑ヲ言渡シタル判決及私訴ノ判決ニ付テハ闕席判決ノ送達ヲ以テ始マリ禁錮ノ刑ヲ言渡シタル

判決ニ付テハ被告人自ラ其送達ヲ受ケ又ハ判決執行ニ因リ刑ノ言渡アリタルコトヲ知リタル日ヲ以テ始マル

第二百三十條　故障ヲ申立テントスル者ハ闕席判決ヲ爲シタル裁判所ニ其申立書ヲ差出ス可シ

第五編　上訴

第一章　通則

第二百四十五條　勾留ヲ受ケタル被告人上訴ヲ爲スニハ其申立書ヲ監獄署長ニ差出シ署長ハ之ヲ其裁判所ニ送致ス可シ

第二百四十六條　檢事ヲ除ク外上訴ヲ爲シタル者ハ其判決アルマテ何時ニテモ之ヲ取下クルコトヲ得

第二百四十七條　訴訟關係人天災其他避ク可ラサル事變ノ爲メ上訴期間ヲ經過シタル塲合ニ於テ其旨疏明シタルトキハ期間ヲ經過シタルニ因リ失ヒタル權利ヲ回復スルコトヲ得但障礙ノ止ミタル日ヨリ通常ノ期間內ニ其疏明方法ヲ申立ニ記載シ上訴ヲ爲ス可シ

第二百四十八條　前條ノ申立アリタルトキハ裁判所書記速ニ其申立書ヲ相手方ニ送達ス可シ相手方ハ三日內ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

上訴ヲ裁判ス可キ裁判所ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽キ先ツ其申立ヲ許スヘキヤ否ヤヲ決定ス可シ

第五編

第二章　控訴

第二百五十二條　控訴ノ期間ハ判決言渡アリタル日ヨリ五日トス

闕席判決ヲ受ケタル者ハ故障ノ期間內故障ヲ爲サスシテ直チニ控訴ヲ爲スコトヲ得

第二百五十三條　本案ノ判決ニ對スル控訴ノ期間內及控訴アリタルトキハ判決ノ執行ヲ停止ス

第二百五十四條　控訴ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所ニ差出ス可シ

裁判所ハ控訴申立アリタルコトヲ速ニ相手方ニ通知ス可シ

第二百五十六條　訴訟記錄ハ檢事ヨリ控訴裁判所ノ檢事ニ送致シ其檢事ハ之ヲ裁判所ニ差出ス可シ

公訴ノ判決ニ對シ控訴アリタル塲合ニ於テ被告人勾留ヲ受ケタルトキハ檢事ヨ

リ之ヲ控訴裁判所ノ監獄ニ移ス可シ

第二百六十五條　被告人辯護人又ハ法律上代理人ノミ控訴ヲ爲シタルトキハ原判決ヲ變更シテ被告人ノ不利益ト爲スコトヲ許サス

被告人ノ利益ノ爲メ檢事ヨリ控訴ヲ爲シタルトキ亦同シ

第五編

第三章　上告

第二百六十八條　上告ハ法律ニ違背シタル裁判ナルコトヲ理由トスルトキニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

法則ヲ適用セス又ハ不當ニ適用シタルトキハ法律ニ違背シタルモノトス

第二百六十九條　裁判ハ左ノ場合ニ於テ常ニ法律ニ違背シタルモノトス

第一　規定ニ從ヒ判決裁判所ヲ構成セサリシトキ

第二　法律ニ依リ職務ノ執行ヨリ除斥セラレタル判事裁判ニ參與シタルトキ但忌避ノ申請又ハ上訴ヲ以テ除斥ノ理由ヲ主張シタルモ其効ナカリシトキハ之ヲ以テ上告ノ理由ト爲スコトヲ得ス

第三　判事忌避セラレ其忌避ノ申請ノ理由アリト認メタルニ拘ハラズ裁判ニ參與シタルトキ

第四　裁判所ニ於テ其管轄又ハ管轄違ヲ不當ニ認メタルトキ

第五　法律ニ背キ公訴ヲ受理シ又ハ受理セサルトキ

第六　法律ニ定メタル場合ニ於テ檢事ノ意見ヲ聽カサルトキ

第七　裁判所ニ於テ請求ヲ受ケタル事件ニ付判決ヲ爲サス又ハ職權ヲ以テ判決スルコトヲ得ヘキ場合ヲ除ク外請求ヲ受ケサル事件ニ付判決ヲ爲シタルトキ

第八　判決ヲ公行セス又ハ公開ヲ禁スル言渡ナクシテ辯論ヲ公ニセサルトキ

第九　裁判ニ理由ヲ付セス又ハ其理由ノ齟齬アルトキ

第十　擬律ノ錯誤アルトキ

第二百七十條　免訴又ハ無罪ノ言渡アリタル場合ニ於テハ被告人ノ利益ノ爲メ設ケタル規定ニ背キタルコト又ハ土地ノ管轄違アリト雖トモ上告ノ理由ト爲スコトヲ得ス

第二百七十一條　上告申立ノ期間ハ判決言渡アリタル日ヨリ三日トス

第二百七十三條　上告ヲ爲スニハ其申立書ヲ原裁判所ニ差出シ且其申立ヲ爲シタ

ル日ヨリ五日内ニ趣意書ヲ差出ス可シ
裁判所ハ上告申立書及趣意書ヲ受取リタルヨリ二十四時間内ニ之ヲ相手方ニ送達ス可シ

第二百七十四條　相手方ハ上告申立書及趣意書ヲ受取リタル日ヨリ五日内ニ答辯書ヲ原裁判所ニ差出スコトヲ得
裁判所ハ其答辯書ヲ受取リタルヨリ二十四時内ニ之ヲ上告申立人ニ送達ス可シ

第五編

第四章　抗告

第二百九十三條　抗告ハ法律ニ於テ特ニ許シタル場合ニ限リ之ヲ為スコトヲ得

第二百九十五條　抗告ノ期間ハ裁判ノ送達アリタル日ヨリ三日トス

第二百九十六條　抗告ヲ為スニハ其申立書ヲ原裁判ヲ為シタル裁判所又ハ豫審判事ニ差出ス可シ
其裁判所又ハ豫審判事ニ於テ抗告ヲ理由アリトスルトキハ不服ノ點ヲ更正シ又理由ナシトスルトキハ意見ヲ付シテ三日内ニ抗告申立書ヲ抗告裁判所ニ送致シ且豫審終結ノ決定ニ對スル抗告ニ付テハ訴訟記錄ヲモ送致ス可シ

第六編　再審

第三百一條　再審ノ訴ハ左ノ場合ニ於テ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ被告人ノ利益ノ為メ之ヲ為スコトヲ得但判決確定ノ後ニ非サレハ之ヲ為スコトヲ得ス

第一　人ヲ殺シタル罪ニ付刑ノ言渡アリタルモ其殺サレタリト認メラレシ者犯罪前既ニ死去シタル確證アリタルトキ

第二　同一ノ事件ニ付共犯ニ非ラスシテ別ニ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタルトキ

第三　犯罪アル以前ニ作リタル公正證書ヲ以テ當時其場所ニ在ラサルコトヲ證明シタルトキ

第四　被告人ヲ陷害シタル罪ニ依リ刑ノ言渡ヲ受ケタル者アリタルトキ

第五　公正證書ヲ以テ訴訟記錄ニ僞造又ハ錯誤アルコトヲ證明シタルトキ

第六　判決ノ證據トナリタル民事上ノ判決他ノ確定トナリタル判決ヲ以テ廢棄若クハ破毀セラレタルトキ

第三百二條　再審ノ訴ヲ為スコトヲ得ヘキ者左ノ如シ

第一　刑ノ言渡ヲ為シタル裁判所ノ檢事

第二　刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル控訴裁判所ノ檢事

第三　刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ヲ管轄スル上告裁判所ノ檢事

但司法大臣ノ命ニ因リ又ハ職權ヲ以テ其訴ヲ爲ス可シ

第四　刑ノ言渡ヲ受ケタル者

第五　刑ノ言渡ヲ受ケタル者死去シタルトキハ其親屬

第三百三條　再審ノ訴ハ刑ノ消滅シタルニ拘ハラス何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第三百四條　再審ノ訴ヲ爲サントスル者ハ其趣意書ニ原判決ノ謄本及證憑書類ヲ添ヘ之ヲ原裁判所ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢事ハ其書類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ上告裁判所ノ檢事ニ差出ス可シ

原裁判所ノ檢事及控訴裁判所ノ檢事自ラ再審ノ訴ヲ爲サントスルトキハ前項ノ手續ニ從ヒ其書類ヲ差出ス可シ

第八編　裁判執行復權及ヒ特赦

第一章　裁判執行

第三百十七條　刑ノ執行ハ判決確定ノ後ニアラサレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第三百十八條　死刑ノ言渡確定シタルトキハ檢事ヨリ速ニ訴訟記錄ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

司法大臣ヨリ死刑ヲ執行ス可キ命令アリタルトキハ三日內ニ其執行ヲ爲ス可シ

第三百十九條　死刑ヲ除クノ外刑ノ言渡確定シタルトキハ直チニ之ヲ執行ス可シ

體刑ノ言渡ヲ受ケ其執行ヲ遁レタル者ニ對シ檢事ノ發シタル逮捕狀ハ勾留狀ト同一ノ効ヲ有ス其闕席判決ニ係ル場合ニ於テ發シタル者亦同シ

第三百二十條　刑ノ執行ハ其刑ヲ言渡シタル裁判所ノ檢事又ハ上告裁判所ヨリ命ヲ受ケタル裁判所ノ檢事ノ指揮ニ因リ之ヲ爲ス可シ

罰金科料訴訟費用及沒收物品追徵金ハ檢事ノ命令ニ依リ之ヲ徵收ス可シ

破壞又ハ廢棄ス可キ沒收物品ハ檢事之ヲ處分ス可シ

第三百二十一條　死刑ノ執行ニ付テハ裁判所書記始末書ヲ作リ刑ノ執行規則ニ從ヒ立會ヲ爲シタル官吏ト共ニ署名捺印ス可シ

第三百二十二條　刑ノ言渡ヲ受ケタル者其言渡ニ付疑義ノ申立又ハ其執行ニ付異議ノ申立ヲ爲シタルトキハ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ニ於テ之ヲ決定ス可シ此決定ニ對シテハ抗告ヲ爲スコトヲ得

第三章　特赦

第三百三十一條　特赦ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ刑ノ言渡ヲ爲シタル裁判所ノ檢事又ハ監獄署長ヨリ犯人ノ情狀ヲ具シ司法大臣ニ申立ツルコトヲ得

監獄署長ヨリ特赦ノ申立ヲ爲ストキハ檢事ヲ經由ス可シ但檢事ハ意見書ヲ添フ可シ

特赦ノ申立アリタルトキハ司法大臣ヨリ其書類ニ意見書ヲ添ヘ上奏ス可シ

第三百三十二條　司法大臣ハ刑ノ言渡確定シタル後何時ニテモ特赦ノ申立ヲ爲スコトヲ得

死刑ヲ除ク外特赦ノ申立アリト雖トモ刑ノ執行ヲ停止セス

○布告第二號　明治十八年一月六日

輕罪控訴規則

第一條　削除

第二條　削除

第三條　被告人公訴ノ裁判言渡ニ對シ控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金拾圓ヲ豫納スヘシ

第四條　被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ前條保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セシムヘシ

第五條　削除

（參考）明治二十三年六月二十八日

法律第四十七號

明治十八年一月第二號布告第三條中公訴ノ裁判言渡ニ對シトアルヲ公訴ニ關シト改メ第一條第二條第五條ヲ削除ス

第三項　輕罪控訴人

○內務省達甲第十三號　明治十八年四月廿四日

警視廳

府　縣（東京府沖繩縣ヲ除ク）

輕罪ニ係ル控訴ノ義ニ付本年第二號ヲ以テ公布相成候ニ付テハ控訴裁判所管轄區域內各地方ヨリ控訴ヲ爲シタル被告人ニ係ル拘禁中ノ諸費ハ總テ最前裁判言渡ア

リタル地方ノ地方税ヲ以テ支辨シ其費用交付方等ハ客年當省乙第廿九號達ニ準據シ可取計此旨相達候事

但控訴裁決後已決囚ニ屬スル諸費モ本文同樣可心得事

○法律第七號　明治二十三年二月八日（官報二月十日）

重罪控訴豫納金規則

第一條　重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者控訴ヲ爲サントスルトキハ裁判費用ノ保證トシテ金貳拾圓ヲ豫納スヘシ

第二條　重罪ノ刑ノ言渡ヲ受ケタル者貧困ニシテ保證金ヲ豫納スル能ハサルトキハ控訴ノ申立ト同時ニ保證金ノ免除ヲ請求スルコトヲ得

第三條　保證金ノ免除ヲ請求シタル者ハ其請求ヲ爲シタル日ヨリ十四日内ニ控訴ノ趣意書ト共ニ裁判費用支辨ノ資力ナキコトヲ證スヘキ住居地市町村長ノ證明書ヲ差出ス可シ但シ其市町村役場ニ三里以外ニ在ルトキハ治罪法第十九條ニ規定シタル猶豫ヲ與フ

第四條　前二條ニ記載シタル書類ハ訴訟ニ關スル一切ノ書類ト共ニ第一審裁判所ノ檢事ヨリ控訴院ノ書記課ニ之ヲ送致スヘシ

第五條　控訴院ハ檢事ノ意見ヲ聽キ保證金免除請求ノ當否ヲ決定ス可シ但控訴ノ事由ナシト認ムルカ又ハ事由アルモ實益ナシト認ムルトキハ免除ヲ與ヘサルモノトス

第六條　保證金ノ免除ナキトキハ控訴ノ申立ハ其効ナキモノトス

第七條　被告人ニ於テ證人鑑定人ノ呼出ヲ請求スルトキ第一條ノ保證金ニテ不足ト認ムル場合ニ於テハ別段其費用ヲ豫納セシムヘシ

○司法省達丙第八號　十五年三月六日

大審院
裁判所
警視廳
府縣（東京府ヲ除ク）

處刑宣告ノ後犯人ヲ司獄官ヘ護送セシムル際ニ於テハ監獄則ニ從ヒ檢察官ヨリ右宣告書ノ謄本ヲ司獄官ヘ送達スル儀ト心得ヘシ此旨相達候事

○司法省達丙第二號　十七年六月廿三日

大審院
裁判所
警視廳
府縣（東京府ヲ除ク）

已決囚ノ犯罪ニ付之ヲ裁判所ニ呼出シ審理ノ末刑ノ言渡ヲナス場合ニ於テハ明治十五年當省丙第八號達ニ依リ檢察官ヨリ其宣告書ノ謄本ヲ司獄官ニ送達スルハ勿論自今已決囚ニ對スル其他ノ宣告ニ付テモ其豫審ニ係ルト公判ニ係ルトヲ問ハス書記ヨリ宣告書ノ謄本ヲ司獄官ニ送達シ又證人トシテ出廷セシメタル已決囚用濟ニ至リタルトキハ亦書記ヨリ其旨ヲ司獄官ニ報知ス可儀ト心得ヘシ此旨相達候事

○司法省刑第七四一號　十九年十月廿三日

裁判所（大審院ヲ除ク）

刑事ノ審判上事實參考ノ爲メ已決囚ヲ召喚スルコト往々有之趣ニ候處右ハ其逃走ノ機會ヲ與ヘ且刑罰ノ効用ヲ薄フスル等ノ恐アルヲ以テ自今事ノ重要ナルモノニシテ他ニ充分ナル證憑ナク且ツ其取調方ヲ囑託スルコトヲ得サル場合ニ非サレハ召喚ス可カラサル儀ト心得ヘシ

右内訓ス

○内務省令第十一號　明治二十四年七月廿七日

第一條　刑死者ノ墓標ニハ氏名法號族籍年齡生死ノ年月日ヲ記入スルニ止メ他ノ事項ヲ記入スル事ヲ得ス

其墓標ハ遺骸ノ埋葬地又ハ祖先ノ塋域ノ外之レヲ建設スル事ヲ得ス

異樣ノ墓標ヲ建設シ及ヒ文字ニ彩色ヲ施ス事ヲ得ス

第二條　所轄警察署ノ許可ヲ得スシテ刑死者ノ爲メ公然祭祀ヲ行フコトヲ得ス

但親族ノ香花ヲ供スルノ類ハ此限ニアラス

第三條　刑死者ノ寫眞其他肖像ヲ公然陳列シ又ハ販賣スル事ヲ得ス

第四條　前各條項ニ違背シタル者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金若クハ十一日以上二十五日以下ノ輕禁錮ニ處ス

第五條　犯罪ニ關シ現ニ搜査起訴勾留服刑中ノ者若クハ搜査起訴勾留服刑中ニ死

去シタルモノ及ヒ刑ヲ免レント欲シ自殺シ或ハ犯罪現行ノ際殺害セラレタル者ニ付地方長官（東京府ハ警視總監）ハ安寧秩序ヲ保持スルニ必要ナリト認ムルトキハ特ニ命令ヲ下シ第一條第二條第三條ニ掲ル所爲ヲ禁スルコトヲ得其命令ニ違背シタル者ハ第四條ニヨリ處分ス

地方官々制　摘要

一各府縣ニ左ノ職員ヲ置ク

一知事ハ一人勅任トス

一書記官警部長收稅長參事官及典獄ハ各一人奏任トス

一屬警部收稅屬監獄書記及看守長ハ判任トス

一知事ハ內務大臣ノ指揮監督ヲ承ケ各省ノ主務ニ就テハ各省大臣ノ指揮監督ヲ承ケ法律命令ヲ執行シ部內ノ行政事務ヲ管理ス

一知事ハ部內ノ行政事務ニ付其職權若クハ特別ノ委任ニ依リ管內一般又ハ其一部ニ府縣令ヲ發スルコトヲ得

一知事ハ非常急變ノ塲合ニ臨ミ兵力ヲ要シ又ハ警護ノ爲メ兵備ヲ要スルトキハ師團長又ハ旅團長ニ移牒シテ出兵ヲ請フコトヲ得

一知事ハ所部ノ官吏ヲ監督シ奏任官ノ功過ハ內務大臣若クハ主務大臣ニ具狀シ判任官以下ノ進退ハ之レヲ專行ス

一知事ハ所部ノ奏任官ノ懲戒ヲ內務大臣若クハ主務大臣ニ具狀シ判任官以下ハ之レヲ專行ス

一各府縣ニ左ノ部署ヲ置ク

內務部

警察部

收稅部

監獄署

一監獄署ニ於テハ監獄ニ關スル事務ヲ掌ル

一書記官ハ內務部長警部長ハ警察部長收稅長ハ收稅部長典獄ハ監獄署長トナリ知事ノ命ヲ承ケ部下ノ官吏ヲ監督シ所部ノ事務ヲ掌理ス

一警察部收稅部及監獄署ニ分課ヲ設クルコトヲ要スルトキハ知事之レヲ定メ主務大臣ニ報告ス可シ

一内務部各課長ハ屬ヲ以テ之レニ充ツ但シ技師又ハ技手ヲ以テ之ニ充ツルヿヲ得
一監獄書記ハ監獄署又ハ監獄支署ニ屬シ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス
一看守長ハ監獄署又ハ監獄支署ニ屬シ上官ノ指揮ヲ承ケ監獄ノ戒護ヲ掌リ看守ヲ指揮監督ス
一巡査及看守ニ關スル規程ハ別ニ定ムル所ニ依ル

○勅令第百四十六號　二十三年七月二十五日

看守奉職滿五年以上ニシテ精勤證書ヲ有シ現ニ其職ヲ奉スル者ハ文官試驗試補及見習規則第二條ノ規定ニ依ラス文官普通試驗委員長ノ銓衡ヲ經テ看守長ニ任用スルコトヲ得

但シ試驗ヲ經ズシテ任用シタル看守長ハ普通試驗ヲ經ルニアラサレハ他ノ判任官ニ轉スルコトヲ得ス

○勅令第四號　廿七年一月六日

第壹條　廳府縣看守ノ定員ハ拘禁男子五百人ニ付七十五人トシ拘禁男子五百人以上ハ百人ヲ増ス毎ニ看守拾人ヲ加ヘ五百人以下ハ百人ヲ減スル毎ニ看守拾人ヲ減ス

第貳條　監獄支署アル地方ニ在テハ前條定員ノ外各支署ニ三人以下ノ看守ヲ増置スルコトヲ得

第參條　看守定員ノ増減ハ拘禁男子貳百人ノ差ヲ生シタル時ニ於テ之ヲ行フ

第四條　監獄ノ搆造ニ依リ本令ニ依リ難キ時ハ内務大臣ハ勅裁ヲ經テ之ヲ増減スルヿヲ得

附　則

第五條　本令ハ明治廿八年四月一日ヨリ施行ス

○勅令第百拾五號　廿六年十月十九日

集治監看守ノ俸給ハ最下限ヲ月俸八圓トス但敎習中ノ者ニハ月俸六圓ヲ給ス

本令ハ廳府縣看守ニモ適用ス

附　則

本令ハ明治廿七年四月一日ヨリ施行ス

内務部
監獄署

○廳達第二十九號

明治廿六年勅令第百十五號ニ基キ本縣看守月俸ノ階級ハ十圓九圓八圓ノ三級ト相定ム但シ敎習中ノ者ニハ月俸六圓ヲ給ス

廿七年三月十六日　知事

○勅令第二百二十八號　廿三年十月十日

集治監假留監看守ノ人員及俸給ヲ定ムルヿ左ノ如シ

一　看守ノ人員ハ在監人五百名ニ付七十五名トス

但シ三池集治監及北海道ニアル各集治監ハ此定員ノ外五十名以下ノ看守ヲ増置スルヿヲ得

二　在監五百名ヲ超ユル時ハ百名ヲ増ス毎ニ看守拾名ヲ加ヘ五百名ニ滿タサル時ハ百名ヲ減スル毎ニ看守拾名ヲ減ス

三　看守人員ノ増減ヲ行フハ在監人ノ員數ニ百名ノ差ヲ生シタルノ時ニ於テスヘシ

四　看守俸給ハ月俸拾圓以下六圓以上トス

但シ勤續滿九年以上ノ者ハ拾貳圓滿十二年以上ハ拾五圓ヲ給スルヿヲ得

五　在監人ノ減少ニ依リ過員トナリタル看守ハ休職ヲ命シ現俸三分ノ一ヲ給スルヿヲ得

但シ休職ハ一年間ヲ一期トス期滿ツレハ其職ヲ免ス

○勅令第百卅九號　廿三年十月十日

勅令第百二十八號集治監假留監看守人員及俸給ノ件中俸給及休暇ニ關スル規定ハ廳府縣看守ニ適用ス

廳府縣

○內務省訓令第一號

女監取締及押丁ノ人員並ニ俸給左ノ如ク改ム

但シ明治廿八年四月一日ヨリ施行ス

明治廿七年一月九日

內務大臣　伯爵井上馨

一　女監取締ハ毎監獄拘禁婦女貳拾五人以上ハ貳人ヲ置キ以上ハ拘禁婦女貳拾五

人ヲ増ス毎ニ女監取締一人ヲ加フ

二　一監獄内ニ在ルモ拘置女監ト囚人女監トノ位地隔離シタル所ニアリテハ前項定員ノ外女監取締一人ヲ増置スルヿヲ得又稀ニ婦女ヲ拘禁スル小監獄ニ在テハ相當ノ婦女ヲ女監取締ノ豫備ニ定メ置キ必要アル毎ニ出勤セシムルヿヲ得

三　押丁ハ拘禁男子五百人ニ付拾人ヲ置クヿヲ得以上ハ拘禁男子百人ヲ増ス毎ニ一人ヲ加ヘ以下ハ百人ヲ減スル毎ニ一人ヲ減ス

四　女監取締人員ノ増減ハ拘禁婦女貳拾五人ノ差押丁ノ増減ハ拘禁男子壹百人ノ差ヲ生シタルトキニ於テ之レヲ行フ

五　女監取締ノ俸給ハ四圓以上拾五圓以下トシ押丁ノ俸給ハ四圓以上八圓以下トシ總テ日給トス

奈良縣訓令乙第二〇〇號

監獄署

看守教習規則左ノ通相定ム

廿四年四月廿日　　知事

看守教習規則

第一條　新ニ採用スル看守ハ監獄ニ關スル諸規則ノ要領ヲ教授シ後本務ニ從事セシム教習ノ期限ハ二ケ月トス

第二條　教習期限中ハ教官又ハ先任看守ノ指導ニ依リ實務ノ習練ヲ受クルモノトス

第三條　教習ノ科目左ノ如シ

一　監獄ニ關スル諸法規　遇囚上諸心得　戒護上諸心得　記牒ニ關スル諸心得　職務ニ關スル諸令達

二　刑法ノ大要

三　實務練習

第四條　教習期限ノ終ニ於テ其成蹟ヲ試驗シ（實務練習ヲ除ク）一科目評点六十点以上ヲ及第トス

但シ一科目点六十点以上ニ渉ルモ他ノ科目ニ於テ六十点以下ナルトキハ落第トス

第五條　落第ノ者ハ尚ホ一ケ月間教習ヲ爲シ更ニ試驗ヲ行フモノトス若シ尚ホ落第シタルトキハ事宜ニ依リ其職ヲ免スルヿアルヘシ

第六條　修業試驗ニ及第シタルモノニハ卒業證書ヲ授與ス

第七條　敎授ハ口述ヲ以テ之ヲ爲シ受業生ハ之ヲ筆記スルモノトス

第八條　受業生ハ其敎習期限內休暇歸省等ヲ許サス

但シ自己疾病ニ罹リタル片ハ此限ニアラス

第九條　受業生ハ授業上ニ付テハ敎官ノ指揮命令ニ服從シ其他ハ一般看守ノ規定ヲ遵守スヘシ

第拾條　授業時限ハ左ノ時間表ニ據ル

授業時間表

科目＼曜日	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日
監獄ニ係ル諸規則及諸心得	午前八時ヨリ仝十時三十分迄	仝上		仝上	仝上	
刑法			午前八時ヨリ十時迄			仝上
實習	十時三十分ヨリ一時間	仝上	仝上	仝上	仝上	仝上
備考						

本表時間ハ敎官ノ見込ニ依リ伸縮スルヿアルヘシ

奈良縣

○訓第七一〇號

新ニ採用スル看守ハ別紙敎習規則標準ニ依リ獄務ノ要領ヲ訓練シ實務ニ通曉セシムヘシ

廿三年十月廿七日

西郷內務大臣

看守敎習規則標準

第一條

新ニ採用スル看守ハ先ツ敎習シテ後本務ニ從事セシムルモノトス

第二條

敎官ニハ書記看守長ノ中ヲ以テ之ニ充ツヘキモノトス

第三條

授業ハ監獄ノ職務ニ關スル要領ヲ示スモノトス其科目概子左ノ如シ

一看守及監獄傭人分掌例

一監獄則及施行細則
一監獄官吏ニ關スル刑法ノ諸條項
一監獄ニ關スル諸法規ノ大要
一戒護ノ心得立番巡警押送外役
一在監人處遇ノ心得
一在監人行狀勘查ノ心得
一諸檢查ノ心得身體人員差入物品監房器具衣服臥具
一非常變災時ノ心得水火風震反獄逃走
一役業ニ關スル心得
一傳染病豫防及患者取扱方心得
一記牒申報ノ心得
一服裝及帶劍ノ心得
一禮式及姿勢ノ心得
一官吏服務紀律ノ大要
一看守懲罰例給助例及警察賞與規則廿二年訓令第一號大要

一實習体操戒具使用法消防法演習擊劍

第四條

教習期限ハ二ケ月トス

第五條

教習中看守ハ見習ノ爲メ教官又ハ先任看守ノ指導ヲ以テ實務ニ臍ラシムヘシ

第六條

教習期限ノ終ニ於テ修業ノ成蹟ヲ試驗スヘキモノトス

第七條

試驗ニ於テ及第シタル者ハ直チニ本務ニ服セシメ其落第シタルモノハ仍ホ一ケ月間練習セシメ更ニ試驗ヲ受ケシムルコトアルヘシ

○勅令第百七十號　廿四年八月十日

巡查看守ハ判任官ヲ以テ待遇ス

○訓第七〇九號

今般勅令第百七十號ヲ以テ巡査看守ハ判任官ヲ以テ待遇スルコトニ相成タルハ全ク巡査看守ノ其職任ノ重キニ對シテ相當ノ待遇ヲ與ヘラタルト仝時ニ又タ之ヲシテ充分ノ實効ヲ擧ケシメントノ主旨ニ外ナラサルニ付巡査看守ハ其優待ヲ加ヘラレタルカ爲メニ苟モ傲慢ニ流ルヽコトナク此際益々奮勵シテ其職任ノ重ヲ尽サヽル可カラス殊ニ巡査ニ在リテハ公衆ニ直接シテ其職務ヲ行フ者ナレハ一層此ニ注意ヲ加ヘテ常ニ公正ト誠實トヲ以テ其職務ニ當リ親切ト叮嚀トヲ以テ其公衆ニ接シ以テ益々警察ノ實効ヲ擧ケンコトヲ勉メサルヘカラス宜ク此ノ意ヲ体シ心得違ノ者無之樣厚ク訓諭セラルヘシ

右訓令ス

明治廿四年八月十五日　品川内務大臣

知事宛

○内務省號外達　十八年七月三十日

警視廳
府縣 東京府ヲ除ク

巡査看守休暇概則左之通相定候條其細目順序ハ適宜相定可屆出此旨相達候事

但本文ニ抵觸スル從前之指令ハ取消候事

巡査看守休暇概則

第一條　巡査看守ハ常ニ定員ノ充足ヲ要スルヲ以テ休暇ヲ許サヽルヘキ者ナレ𪜈其勤務上差支ナキニ於テハ皆勤ノ者ニ限リ特ニ慰勞ノ爲メ休暇ヲ與フルコトヲ得

第二條　休暇ノ日數ハ左ノ割合ニ從フ

	休暇日數
一ケ年間皆勤ノ者	三週間
半ケ年間皆勤ノ者	一週間

第三條　非番父母祭日及職務上負傷者ノ欠勤日數ハ欠勤日數ニ算入セス

第四條　休暇日數ハ數年ニ通算シテ併與スルヲ得ス

○訓令第十九號

奈良監獄
五條監獄

看守休暇細則左之通相定ム

二十一年七月廿三日　奈良縣知事子爵税所篤

看守休暇細則

第一條　看守休暇ハ內務省達休暇概則ニ基キ半ケ年皆勤セシ者ハ一週間一ケ年皆勤セシ者ハ三週間ヲ給與ス

第二條　休暇ヲ得ントスル者ハ典獄（五條監獄ハ上席判任官）ニ出願許可ヲ受ク可シ

第三條　皆勤日數ハ拜命ノ日ヨリ起算シ病氣引籠リ歸省等ニテ欠勤スル者ハ其出勤ノ日ヨリ起算ス

但忌引又ハ公事ノ爲メ欠勤若クハ軍籍ニアリテ復習點呼等ニ付欠勤スル者ハ其日數ヲ除キ前後通算スルモノトス

第四條　休暇ハ一年又ハ半ケ年分ヲ一時若クハ數回ニ分チ出願スルヲ得ト雖𪜈一回二日以下出願スルヿヲ得ス

第五條　休暇中宿泊ヲ要スル地ヘ旅行セントスル片ハ典獄（五條監獄ハ上席判任官）ノ許可ヲ受ク可シ

第六條　休暇ハ公務ノ都合ニヨリ停止又ハ分賜スルヿアル可シ

○訓令第七號

五條監獄支署
警守課

明治廿一年七月本縣訓令第十九號看守休暇細則第四條ニ休暇ハ一回二日以下出願スルヲ得サル旨規定シアレ共當分ノ內隔日勤務ニアラサル看守ニ限リ二日以下ト雖𪜈出願シ得ル義ト心得ヘシ

右訓令ス

廿六年十月廿四日　典獄

○廳達廿三號

監獄署

女監取締押丁休暇規則左之通相定ム

廿五年三月十九日　知事

第一條　女監取締押丁ニシテ皆勤セシ者ハ慰勞ノ爲メ左ノ割合ニ依リ休暇ヲ與フ

一　一ケ年間皆勤ノ者　十二日間

一　半ケ年間皆勤ノ者　五日間

第二條 非番父母祭日及職務上負傷者ノ欠勤ハ欠勤日數ニ算入セス
但シ忌引又ハ官司ノ召喚若クハ軍籍ニ在テ復習點呼等ノ爲メ欠勤シ本務ニ從事セサル日數ハ之ヲ除キ前後通算スヘシ

第三條 皆勤日數ハ拜命ノ日ヨリ起算シ病氣引籠リ看護皈省等ニシテ欠勤スルモノハ其出勤ノ日ヨリ起算スヘシ

第四條 休暇ハ一年又ハ半年分ヲ一時若クハ數回ニ分チ給與スヘシ
但休暇日數ハ數年ニ通算シテ併與スルヲ得ス

第五條 休暇ヲ得ントスル者ハ典獄ニ（五條監獄支署ハ署長）出願許可ヲ受クヘシ

第六條 休暇中宿泊ヲ要スル地ヘ旅行セントスル者ハ典獄ニ（五條監獄支署ハ署長）出願許可ヲ受クヘシ

第七條 休暇ハ公務ノ都合ニ依リ停止セラルヽコトアルヘシ

○内務省訓令第廿一號 二十二年五月廿五日 廳府縣ヲ除ク東京府

巡査看守精勤證書授與規則左ノ通相定ム

巡査看守精勤證書授與規則

第一條 精勤證書ハ巡査看守ノ精勤ヲ證シ其名譽ヲ表スルモノトス

第二條 精勤證書ハ警察署長若クハ典獄ノ具狀ニ依リ廳府縣長官審査ノ上之ヲ授與スルモノトス

第三條 精勤證書ハ左ノ諸項ニ適合スルモノニ授與スヘシ

一 行狀方正
二 勤務勉勵
三 事務熟達
四 滿三年奉職

第四條 第三條ニ適合ノ者ト雖𪜈左ノ事項ニ該當スルモノハ精勤證書ヲ授與スルヿヲ得ス

一 官吏服務規律ニ違背シ若クハ巡査懲罰令ニ依リ月俸一ヶ月百分ノ廿以上ノ罰金ヲ科セラレタルモノ及ヒ百分ノ廿以下ノ罰金ト雖𪜈一年二回以上ニ及フモノ
二 奉職後刑法其他ノ法律規則ニ依リ處分ヲ受ケタルモノ

第五條 精勤證書ヲ有スルモノニシテ退職後再任ヲ求ムルトキハ試驗ヲ爲サスシ

テ採用スルヿヲ得

但シ年齡制限及体格試驗ハ此限ニアラス

第六條　水火災若クハ盜難等ニ罹リ精勤證書ヲ亡ヒタルトキハ再ヒ之レヲ授與スヘシ

第七條　精勤證書ヲ授ケタル後其行狀修マラス若クハ第四條ノ事項ニ該當スルモノアルトキハ其證書ヲ沒收スルヿアル可シ

第八條　精勤證書ハ左ノ雛形ニ依リ調製スヘシ

雛形圖略ス

○訓第五九八號

巡査看守精勤證書授與幷ニ沒收ノ件左之通施行セラルヘシ

一巡査看守精勤證書授與規則第四條ニ該當スル過誤失錯ニ依リ處分ヲ受ケタル後勤續精勤セシモノニハ其處分翌月ヨリ起算シ同則第三條ニ適合スルトキ該證書ヲ授與スルヿアルヘシ

一巡査懲罰例ニ依リ免職シ若クハ在職中行狀修ラスシテ體面ヲ汚シ（巡査懲罰例第二條ニ該當セサルモノ）又ハ退職後ト雖モ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルモノハ精勤證書ヲ沒收スヘシ

右訓令ス

明治廿二年八月廿四日　　內務大臣　松方正義

知事宛

○警甲第二八號

本年五月廿五日當省訓令第廿一號巡査看守精勤證書授與規則第三條四項ノ年限ハ該發布以前ニ溯リ起算ス又タ巡査ヨリ看守ニ看守ヨリ巡査ニ轉シ前後其年月ヲ通算シ滿三年ニ及フモ同項ヲ適用ス可カラサル儀ニ有之候條此旨及御通牒候也

明治廿二年八月廿四日　　內務書記官

知事宛

○內務省令第二十三號　　十九年十月十六日

廳府縣

集治監

巡査看守俸給支給規則左ノ通相定ム　　假留監

巡査看守俸給支給規則

第一條　巡査看守ノ月俸ハ毎月末日ヲ以テ支給ノ定日トス
但シ休暇日ニ當ル時ハ繰上ケトス

第二條　巡査教習中ハ認可ヲ經テ定額ノ俸給ヲ減少支給スルヿヲ得

第三條　免職ノトキハ當月分ノ俸給日割ヲ以テ支給スヘシ

第四條　願濟休暇旅行ノ日及私事ノ故障（自己ノ病氣ヲ除ク）ニ由リ出署セサモルノ日數二十日後ハ日割ヲ以テ俸給ノ半額ヲ減スルモノトス

第五條　豫備及後備軍籍ニアルモノ召集ノ節ハ其出發ノ日ヨリ歸署ノ前日迄ハ俸給ヲ支給セス

第六條　右ニ掲クルモノヽ外ハ判任官俸給支給細則ニ依ル

○司法省達丙第七號　　明治十八年九月十日

警視廳

府縣（東京府ヲ除ク）

集治監

第一條　假出獄中更ニ重罪輕罪ヲ犯シタル者アルトキハ其裁判確定ノ後現ニ之レヲ管束スル所ノ典獄ニ於テ直チニ仮出獄ノ停止ヲ申渡シ當初下付シタル仮出獄證票ヲ取上クヘシ

第二條　典獄ニ於テ仮出獄ヲ停止シタルトキハ其事狀ヲ具シ內務司法両卿ニ開申スヘシ

第三條　甲地方ニ於テ仮出獄ヲ許シタル者ヲ乙地方ニ於テ停止シタルトキハ乙地方典獄ヨリ其事狀ヲ甲地方典獄ニ通知シ仮出獄ノ證票ヲ送致スヘシ

第四條　前條ノ場合ニ於テ乙地方監獄ニ拘禁スルトキハ其監ノ新入者トナシ本刑後刑共乙地方ニ於テ執行スヘシ

仮出獄停止申渡書式

府縣族籍
何　某
年　齡

刑名
刑期

其方儀受刑以來獄則ヲ謹守シ改悛ノ狀著明ナルニ由リ何年　月　日仮出獄ヲ許シ其證票ヲ與ヘタル處復重(輕)罪ヲ犯シ拘禁ニ就クヲ以テ其出獄ヲ停止シ證票ヲ取上候事

年　月　日　　某監獄署

典獄　何　某　印

甲地方ニ於テ仮出獄ヲ許シタルモノヲ乙地方ニ於テ停止ノ申渡ヲナストキノ書式

刑名　　府縣族籍

刑期　　何　某

年齢

其方儀何年　月　日某集治監／監獄署ニ於テ仮出獄ヲ許シ其證票ヲ與ヘタル處復重(輕)罪ヲ犯シ拘禁ニ就クヲ以テ其出獄ヲ停止シ證票取上候事

年　月　日　　某集治監／監獄署

典獄　何　某　印

○內務省令第二十四號　十九年十一月十日

刑法第七十九條第八十條第八十二條ニ依リ懲治場ニ留置セラレタルモノニシテ獄則ヲ謹守シ改悛ノ狀アル時ハ警視總監北海道廳長官府縣知事ハ左ノ規則ニ據リ假リニ出場ヲ許スコトヲ得

仮出場規則

第一條　假出場ヲ許ス可キモノアル時ハ典獄ヨリ其長官ニ狀ヲ具シ認可ヲ受クヘシ

第二條　假出場ヲ許シタル時ハ典獄ヨリ其證票ヲ本人ニ下付スヘシ

第三條　假出場證票ニハ左ノ條件ヲ記載スヘシ

一本人ノ屬籍氏名年齢住所懲治期限及ヒ宣告並ニ滿期ノ年月日

一殘期何年何月何日間假出場ヲ許ス（何年何月何日起／何年何月何日滿）

一本日出場ヲ許スニ由リ住居ノ地ニ歸着ノ上ハ卽時所轄警察署ニ其旨ヲ屆出ヘシ

一每月一回謹愼ヲ表スル爲メ所轄警察署ニ至リ仮出場證票ニ出シ察警官吏ノ認印ヲ受クヘシ若シ止ムヲ得サル事故アレハ其事由ヲ屆出ヘシ

一一日程ヲ過タル地ニ旅行スル時ハ其行先並ニ滯在日數等ヲ詳記シ所轄警察署

ニ届出ヘシ但シ其滯在一月以上ニ渉ル時ハ一箇月每ニ其滯在地ノ警察署ニ到リ前項ノ手續ヲ爲スヘシ

一事故アリテ其住居ヲ轉スル片ハ所轄警察署ニ届出ヘシ

一第三項以下ノ事ハ本人自ラ爲ス能ハサル塲合ニ於テハ親族故舊代リテ之レヲ爲スコヲ得

右ノ各項ニ違背シタル時ハ直ニ出塲ヲ停止シ出塲中ノ日數ヲ懲治期限內ニ算入スルコヲ得ス

第四條　假出塲ヲ許シタル片ハ典獄ヨリ假出塲證票及ヒ懲治申渡書ノ謄本ヲ具シ本人住居ノ地ノ警察署ニ通知スヘシ

第五條　警察署ニ於テ轉居ノ届ヲ得タル時ハ之ヲ其轉居地ノ警察署ニ通知シ第四條ニ記載シタル書類ヲ遞送スヘシ

第六條　假出塲ヲ許ス可キモノ住所ナク及引取人ナキ時ハ猶ホ懲治塲ニ留置シテ他ノ懲治者ト嚴ニ別異スヘシ

但シ住居遠地ニアリテ歸省スルノ資力ナキモノ亦タ同シ

第七條　假出塲ヲ停止スヘキ時ハ本人住居ノ地ノ典獄ニ於テ其旨ヲ言渡シ直チニ假出塲證票取上其殘期ヲ執行スヘシ

但シ甲地方ニ於テ下付セシ證票乙地方ニ於テ取上ケタル時ハ其事狀ヲ甲地方典獄ニ通知シ證票ヲ送致スヘシ

第八條　假出塲ヲ許サレタル其懲治期滿限ノ日ニ至レハ假出塲證票ヲ所轄警察署ニ還納シ該警察署ヨリ証票ヲ出シタル典獄ニ之ヲ遞送スヘシ

囚人護送手續　太政官第十號達 十五年二月一日

第一條　甲廳ヨリ乙廳又ハ集治監ヘ送移スル囚人ハ囚籍及處刑宣告書所持ノ物品ヲ併セ沿道警察本分署ニ於テ遞傳護送スヘシ

但シ府縣管內本支監獄ノ間ニ護送スル囚人モ其距離十里以外ニ至ルモノハ本文ニ準スルヲ得

第二條　新タニ就捕セシ犯罪人及諸令狀ニ據リ引致スル刑事被告人又ハ脫送ノ軍人軍屬ノ遞傳護送ヲ要スル者モ前條ノ手續ニ準スヘシ

但シ入監後糾問等ノ爲メ所在ノ法衙ニ往復スルハ本條ノ限リニアラス

第三條　第一條第二條ノ護送ニ付スル囚人ノ員數及發出日時ハ其當該官吏ヨリ前

以テ沿道警察本分署ヘ遞報スヘシ

第四條　護送囚人ノ數ハ一行十名以下トス護送警吏及ヒ繩取ノ人員ハ適宜タルヘシ

但シ便利海路ニヨルヰハ適宜囚人ヲ增加スルヲ得

第五條　遞傳護送ハ日出ヨリ日沒マテヲ限リトス

第六條　警察本分署ニ於テハ護送囚人ノ鄉貫氏名刑名又ハ犯罪見込書ノ要領及着發日時ヲ記載シ置クヘシ

第七條　護送ノ囚人ハ沿道警察本分署ニ宿セシムヘシ若シ支障アルヰハ該地戶長ニ照會シ宿所ヲ定メ適宜取締ヲナスヘシ

第八條　護送途中囚人發病スル時ハ沿道警察本分署ニ付シ治療スヘシ若シ死去スル時ハ該地戶長ニ埋葬ヲ囑シ（引取人アルモノハ之レニ下付ス）醫師ニ死去證書ヲ作ラシメ戶長及ヒ護送警吏連印シ書類物品ヲ併セ送達スヘキ衙署ニ遞付シ仍ホ發出衙署ニ報知スヘシ

第九條　護送途中囚人逃走スルヰハ先ツ緝捕方ヲ最寄警察本分署ニ報告シ仍ホ發出衙署及送達スヘキ衙署ヘ報告スヘシ

但シ第八條及本文ノ手續ヲ爲スタメ他囚ノ護送ヲ遲緩スヘカラス若シ速ニ手續ヲ了シ難キ場合ハ最寄警察本分署ノ助力ヲ請フヿヲ得

第十條　遞傳護送スル警察官吏ノ旅費ハ都テ沿道地方ノ警察費ヲ以テ支辨スヘシ

但シ繩取雇給ハ第十一條第十二條ノ區別ニ依リ囚人ニ屬スル費用中ニテ支辨スヘシ

第十一條　第一條ニ揭クル囚徒ニ屬スル護送中ノ費用ハ明治十四年第十七號布告ニ依リ區分シ集治監ニ送ルヰハ沿道府縣ノ仕拂ニ立テ其他ハ出發府縣ノ監獄費ヨリ支辨スヘシ

第十二條　第二條ニ揭クル犯人ニ屬スル護送中ノ費用ハ沿道地方警察費ヲ以テ支辨スヘシ

第十三條　護送囚人死沒シ引取人ナキモ其所持金錢物品（埋葬費ニ足ルモノ）アルモノ及ヒ軍人軍屬ノ埋葬費ハ第十一條第十二條支辨ノ限リニ非ス尤モ其費額ハ都テ拾圓以內タルヘシ

但シ軍人軍屬ノ分ハ追テ陸軍省ヨリ拂戾スヘシ

第十四條　遞傳ニ係ル囚人犯罪人ノ賄費額ハ警察本分署ニ於テハ都テ拘留人ノ例

ニ依ルヘシ他ニ宿泊セシムルトキハ一宿ニ賄臥具點燈手數料ヲ合セテ金廿五錢以下一晝食金七錢以下藥價診察料等ハ實費支辨スヘシ

○內務省達乙第三十號　十七年七月八日

警視廳
府縣 東京府沖縄縣北海道三縣ヲ除ク

今般各假留監設置セラレ候ニ付キ徒刑流刑及「禁獄」ノ刑ニ處セラレタル囚徒送致方及ヒ聯合地方ノ區分左ノ通リ相定メ候條此旨相達候事

徒刑流刑禁獄囚送致方

一徒刑流刑「禁獄」ノ刑ニ處セラレタル囚徒裁判確定セシ時ハ之レヲ管束セシ地方ヨリ警察遞傳ヲ以テ直ニ其聯合假留監人ヘ押送スヘシ

但シ本監ノ都合ニ依リ典獄ヨリ其聯合地方ヘ囚徒押送ノ延期ヲ通知スルコアルヘシ

聯合地方區分略ス

○廳達第百廿二號

監獄署

其署處務細則別冊ノ通改正ス

但本則ハ明治二十六年十二月一日ヨリ施行ス

明治二十六年十一月三十日　奈良縣知事小牧昌業

監獄署處務細則

第一章　分課及權限

第一欵　監獄署

第一條　監獄署ニ第一課第二課第三課及醫務所ヲ置キ第三章ニ定ムル區別ニ依リ事務ヲ分掌セシム

第二條　各課所ニ長一人課僚若干ヲ置キ第一課長第三課長ハ監獄書記第二課長ハ看守長醫務所長ハ監獄醫ヲ以テ之ニ充テ課僚ハ監獄書記看守長監獄醫看守雇女監取締授業手押丁ヲ以テ之ニ充ツ

第三條　課所長ハ典獄ノ指揮ヲ承ケ課所務ヲ掌理シ課所長事故アルトキハ首席課僚其ノ事務ヲ代理ス

課僚ハ上官ノ指揮ヲ承ケ事務ニ從事ス

第四條　監獄署ニ看守敎習所ヲ置ク其ノ組織規定ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第二欵　五條監獄支署

第五條　五條監獄支署ニ第一係第二係醫務係ヲ置キ第一係ハ第二章第八條第十條第二係ハ第九條醫務係ハ第十一條ニ定ムル所ニ準シ各事務ヲ分掌セシム

第六條　支署ニ支署長ノ外監獄書記看守長監獄醫看守雇女監取締押丁若干名ヲ在勤セシム

第七條　支署長ハ典獄ノ指揮ヲ承ケ支署ノ事務ヲ掌理シ支署長事故アルトキハ上席監獄書記又ハ看守長ノ内一人ヲ以テ其ノ事務ヲ代理セシム

支署員ハ上官ノ指揮ヲ承ケ事務ニ從事ス

第二章　事務分掌

第八條　第一課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　文書ノ往復及保存ニ關スル事

二　統計及報告ニ關スル事

三　吏員ノ身分ニ關スル事

四　監獄ノ構造ニ關スル事

五　在監人ノ出入、名籍、刑期、願訴、特赦、假出獄、領置、給與、差入品及敎誨敎育ニ關スル事

六　右ノ外他ノ課所ノ主管ニ屬セサル事項

第九條　第二課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　監獄ノ戒護ニ關スル事

二　在監人ノ行狀賞罰幷書信接見ニ關スル事

第十條　第三課ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　作業ノ科程、工錢、器具、材料、製品ニ關スル事

二　諸物品ノ購入、販賣ニ關スル事

三　監獄ノ地所建物ニ關スル事

四　經費及雜收入ノ豫算ニ關スル事

第十一條　醫務所ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル

一　在監人ノ疾病死亡及調劑ニ關スル事

二　監獄ノ衛生ニ關スル事

第三章　文書取扱手續

第十二條　凡ソ監獄署ニ到達シタル文書ハ第一課ニ於テ收受開緘シ書式ニ依リ受付簿ニ登錄シ文書ノ欄外ニ收受ノ年月日及番號ヲ付記シ直ニ署長ニ出シ署長査閲ノ後主務ノ課所長ニ配付シ受付簿ニ受領印ヲ受クヘシ但親展又ハ金券入ノ表記アル文書ハ總テ開緘セス受付簿ニ登錄シ其ノ名宛ノ官吏ニ配付スルモノトス

第十三條　課所長文書ノ配付ヲ受ケタルトキハ自ラ之ヲ調理シ若クハ課所員ヲシテ調理セシムヘシ

第十四條　主任文書ノ配付ヲ受ケタルトキハ書式ニ依リ直ニ理事簿ニ登錄シ處分案ヲ起草シ課所中ノ合議ヲ經テ課所長ニ出シ課所長査閲ノ上署長ニ出シ知事ノ裁決ヲ受クヘシ但新タナル立案及署長限リ判決處分スル文書モ亦本條ノ手續ニ從フ

第十五條　文書調理ノ期限ハ文書ノ配付ヲ受ケタル日ヨリ三日ヲ超ユルヲ得ス若シ期限內ニ處理スル能ハサルモノハ豫メ期日ヲ定メ主務ノ課所長ヲ經テ署長ノ允許ヲ受クヘシ但至急ヲ要スルモノ又ハ本人出頭シテ處分ヲ待ツモノハ卽時處理スルヲ要ス

第十六條　他ノ部課所ニ交涉スル案件ハ其ノ關係アル部課所ニ合議シ又他ノ部課所ヨリ合議ヲ受ケタルトキハ速ニ調査ヲ了シ順次回付シ其ノ回尾ヨリ主務ノ部課所ニ還付スヘシ

第十七條　合議案ニ對シ意見ヲ異ニスルトキハ主任者ニ商議シ議相協ハサルトキハ課所長ノ指揮ヲ受ケ其ノ兩課所以上ニ涉ルモノハ署長ノ判決ヲ受ケ他部ニ涉ルモノハ意見書ヲ付シテ主務官ニ還付シ他部ヨリ意見書ヲ付シタル回議ノ還付ヲ受ケタルトキハ主務課所長ニ申告シ仍ホ改案ヲ要セスト認ムルトキハ意見書添付ノ儘主務署長ニ出スヘシ

第十八條　合議ニ付スヘキ案件ハ主務課所長捺印ノ上關係アル他課所ニ回付シ合議ヲ了リタル後署長ニ出スヘシ其ノ事ノ他部ニ交涉セルモノハ主務署長ノ捺印ヲ受ケ他部ニ回付シ合議全了シタル後主務署長ヨリ知事ニ差出シ又署長限リ決行スヘキ案件ハ他部ノ合議ヲ了リタル後主務署長ニ出スヘシ但知事ノ裁決ヲ要スルモノハ甲印委任ニ係ルモノハ乙印ヲ回議ノ上部ニ押捺スヘシ

第十九條　參事官ノ審査ニ付スヘキ案件ハ知事ノ裁決ヲ受ル前仝官ニ回付スヘシ

第二十條　合議ヲ受ケタル文書ニシテ其事件ノ再回ヲ要スルモノハ課所名ノ肩ニ(要再回)ノ印ヲ捺シ回付スヘシ其ノ裁決濟ノ上主務課所ヨリ再回アリテ撿閲又

ハ處分ヲ了リタルトキハ諾印ノ下ニ捺印シテ還付ス

第廿一條　至急又ハ機密ヲ要スルモノ若クハ親展書留ヲ以テ發スヘキ文書ハ主任者ニ於テ文書ノ欄外ニ(急)(秘)(親展)(書留)ノ印ヲ捺スヘシ

第廿二條　主任官裁決濟ノ文書ヲ受ケタルトキハ第一課ニ交付シ第一課文書主任ニ於テハ其ノ淨書スヘキモノハ直ニ淨書校合ヲ了リ番號ヲ付シ捺印ノ上發送ノ手續ヲ爲シ原案ハ主任官ニ還付スヘシ

但付屬ノ文書ハ主任官ニ於テ淨書校合スヘシ

第廿三條　凡ソ文書ヲ淨書シタルトキハ原案ニ淨書ノ年月日及番號ヲ記入シ淨書校合ヲ爲シタル者共ニ捺印スヘシ

第廿四條　發送スヘキ文書ノ番號要旨發送先及發送ノ年月日ハ番號錄ニ記入整理スヘシ

第廿五條　郵便電信切手及葉書ヲ使用シタルトキハ書式ニ依リ郵便電信差立簿ニ登記シ日々第一課長ノ捺印ヲ受クヘシ

第廿六條　郵便ニ依ルモノヲ除クノ外他ヘ文書若クハ物件ヲ發送スルトキハ送致錄ニ其ノ件名及發送ノ年月日ヲ記シテ送付スヘシ

第廿七條　總テ決行濟ノ文書ハ主務ノ課所ニ於テ分類編纂シ翌年一月ニ第一課ニ交付スヘシ

第廿八條　第一課ニ於テハ毎月發受文書ノ件數表ヲ製シ署長ニ出シ署長查閱ノ上知事ノ閲覽ニ供スヘシ

第廿九條　五條監獄支署ノ文書取扱手續ハ本章ノ定ムル所ニ準據セシム

第四章　番號及文例

第三十條　各官衙ヘ發送スル文書ノ番號ハ左ノ例ニ依ルヘシ

一稟第何號

右ハ典獄名ヲ以テ知事ニ稟議スル文書ニ用ユ

一申第何號

右ハ典獄名ヲ以テ知事ニ上申スル文書ニ用ユ

一甲第何號

右ハ署長名又ハ署名ヲ以テ管外各官衙ニ往復スル文書ニ用ユ

一乙第何號

右ハ署長名又ハ署名ヲ以テ管内各官衙ヘ往復スル文書ニ用ユ

一指第何號

右ハ典獄名ヲ以テ課署所ノ諸訓稟議ニ對シ發スル文書ニ用フ

一訓示第何號

右ハ典獄名ヲ以テ課署所ニ發スル訓示ノ文書ニ用フ

第三十一條　知事又ハ縣名ヲ以テ往復スル文書ノ番號及文例ハ奈良縣廳處務細則ノ規定ニ依ルヘシ

第三十二條　典獄ヨリ課所署ニ對スル訓示及指揮文例左ノ如シ

訓示第何號

何々、、、、爲心得此段及訓示候也

年月日　署長

何々宛

第二例

指第何號

何々、、、、之通心得ラルヘク此段及(指揮)(訓示)候也

年月日　署長

何々宛

(受附簿様式)（第一）

受附月日	受附番號	出所名	文書ノ要旨	結了	受附者印	受領者印
何月何日	一	內務部	何々ノ件照會	何月何日回答ス		
同	二	奈良地方裁判所	何某外何人宣告書到來	回答ヲ要セス		
同	三	何監獄署	何々ノ件通知	同		
何月何日	四	何警察署	何某監置受人ノ件回答	同		
同	五	何官	何某宛親展封書			
同	六	何官	何某宛金券入封書	何月何日領收書送付ス		

（理事簿）（第二）

受理	發議	處理順序
何月何日	何月何日	何月何日何課へ合議（合議ヲ受ケタル者受領印）
何々ノ件取調方照會何監獄署	何々ノ件伺	何月何日何課へ回覽（回覽ヲ受ケタル者受領印）
		何月何日回答ス
		何月何日決行ス

受理	發議	處理順序
月 日	月 日	

（知事決裁ノ回議用紙）（第三）

明治 年 月 日受
明治 年 月 日受

知事 代理

監獄署長

課長

（署長判決ノ回議用紙）（第四）

明治　年　月　日議

明治　年　月　日行

署長

課長

係

（課所長限決行ノ回議用紙）（第五）

明治　年　月　日議

明治　年　月　日行

課長

係

（發送文書番號錄）（第六）

發送月日											
番號											
文書ノ要旨											
發送先											

總テ番號錄ハ本書之樣式ニ準シテ區分調製スヘシ

（郵便差立簿）（第七）

月中

日												
種類 受又越高												
送先												
書狀	量目											
	箇數											
	賃錢											
葉書												
印刷物	量目											
	箇數											
	賃錢											
書留	量目											
	箇數											
	賃錢											
別配達	量目											
	箇數											
	賃錢											
發送先												
種類 殘高												

（電信差立簿）（第八）

差立月日	發信人	受信人	字數	音信種類	金額

（送致錄）（第九）

何月何日	何々ノ件照會	○奈良地方裁判所檢事局
何月何日	何々ノ件回答	内務部

受領者印

奈良縣監獄署又ハ五條監獄支署文書件數　明治　年　月

管外官衙名	收受	發遣
内閣		
會計檢查院		
外務省		
内務省		
大藏省		
陸軍省		
海軍省		
司法省		
文部省		
農商務省		
遞信省		
大審院		
控訴院		
警視廳		
道廳府縣		
裁判所		
集治監		
假留監		
大小林區署		
監獄署及支署		
警察部及本分署		
郵便電信局		
本金庫及支金庫		
社寺		
市郡區役所		
町村役場		
計		

管内官衙名		收受	發遣
知事官房			
内務部及各課			
警察部及本分署			
收税部及收税署			
監獄署及支署			
郡役所			
町村役場			
指令			
合計			
願	官吏		
願 人民	食物差入		
	金品差入		
	接見		
	聞取		
	書類捺印		
	金品下付		
	監視受		
伺	官吏		
	人民		
届	官吏		
	人民		
合計	官吏		
	人民		
	計		

在監人	
刑事被告人	
囚人	
懲治人	
別房留置人	
計	

通信	
發信	
來信	

知事ヘ上申伺等ハ欄外ニ其目ヲ設ケテ記入スヘシ仍本表中掲載ナキ官廳ト往復セシトキハ管内外ノ別ニ依リ其欄ヲ設ケテ記入スヘシ

○訓示第一〇號　廿七年四月二十一日

第二課事務取扱順序

第一章　入監

第一條　刑事被告人ノ新ニ入監スルモノアルトキハ第一課ノ通知ニ依リ看守長又ハ看守部長立會シ看守ヲシテ身体衣服ヲ捜撿セシメ異狀ナキヲ認メタル上入監セシムヘシ

第二條　入監ニ先チ本人ニ番號ヲ付シ臥具ヲ貸與シ續ヒテ監內ニ於テ遵守スヘキ條項ヲ云ヒ聞カセタル上入房セシメ其席ヲ指定スヘシ

但入房セシムルト仝時ニ本人ノ被告事件及番號生年月日等ヲ記入セシ小札ヲ房扉前ニ揭クヘシ

第三條　刑事被告人ヲ裁判所ヘ押送スル𪜈ハ勿論入浴運動等總テ監房出入ノ際ハ笠ヲ被ラシメ決シテ他房ノ者ニ相窺知セラレサル樣注意スヘキモノトス
第四條　入浴及運動等ハ一房每ニ之ヲ爲サシムヘシ
第五條　食物及差入物等ヲ本人ニ渡ストキハ必ラス押丁ヲシテ之ヲ爲サシメ看守之ヲ監督スヘシ
第六條　新ニ刑ヲ執行スル𪜈ハ看守長又ハ看守部長ハ第一課ノ通知ニ依リ規定ノ時限前ニ看守ヲシテ本人ヲ調所ニ引致セシムヘシ
第七條　調所ニ引致セシ𪜈ハ看守ハ第一課員ト協力シ所持ノ物品ヲ調査シ之ヲ纒メシメ散逸セサル樣取締ヲナスヘシ
第八條　前項ノ物品ヲ取纒メタル後ハ成規ノ衣服ヲ貸與シ容姿ヲ正フセシメ紀律正シク整列セシメ署長ノ出場ヲ俟タシムヘシ
第九條　署長出場セシ𪜈ハ看守ハ(氣ヲ付ケ)禮(故ヘ)ノ禮ヲ下シ敬禮セシメ刑ノ執行ヲ言渡サレタル後ハ再ヒ(禮)(故ヘ)ノ令ヲ下シ夫ヨリ引卒シテ第二課ノ調所ニ入レ頭髮ヲ短薙シ且ツ髭鬚ヲ剃除セシメタル上各監房ニ一名宛入房セシメ後チ敎誨師ニ通知スヘシ

第十條　看守長及看守部長ハ雜務擔當看守ニ命シ本人ノ囚名札ヲ其居房扉前ニ揭ケシメ且ツ本人ニ其席ヲ指定シ且ツ服スヘキ役業科程及遵守スヘキ條件ヲ云ヒ聞カセ且ツ本人ヲ各役場擔當看守ニ交付スヘシ

第二章　出監

第十一條　刑期滿限ニ依リ釋放スヘキ者第一課ノ通知ヲ受ケタル𪜈ハ看守長又ハ看守部長ハ其釋放スヘキ前日午食後雜務看守ヲシテ各役場擔當看守ニ通知シ第二課調所ニ引致セシメ休役ヲ命シ次ニ醫務所ニ引致シ体量ノ撿查ヲ受ケシメタル後チ釋放監ニ一名宛入房セシメタル上敎誨師ニ通知スヘシ
第十二條　釋放當日ニ至ラハ規定時限ヨリ二時間前ニ第一課調所ニ引致シ看守ヲシテ身体衣服ヲ捜撿セシメ續ヒテ第一課ニ領置セル衣類雜品等ヲ受取ラシメ貸與セシ衣服ヲ返納セシメ自衣ヲ着セシメタル上正シク整列セシメ署長ノ出場ヲ俟タシムヘシ
第十三條　署長出場スル𪜈ハ(氣ヲ付ケ)禮(故ヘ)ノ令ヲ下シ署長ノ言渡ヲ受ケシメ署長退場スル𪜈ハ(禮)及(故ヘ)ノ令ヲ下シ續ヒテ本人ヲ引卒シ監門ニ至リ門衞看守ニ釋放及其氏名ヲ通知シ出門セシムヘシ

第十四條　釋放スヘキ者ニシテ監視執行ノ爲メ察察署ヘ押送スヘキモノアルトキハ押送看守ハ第一課ヨリ遞付錄及一件書類ヲ受取リ之ヲ押送シ警察署ノ領收證ヲ受ケ歸署ノ上其旨看守長及看守部長ニ復命スヘシ

第十五條　刑事被告人ノ免訴又ハ無罪等ニテ出獄スルモノハ第十二條第十三條ノ例ニ依リ取扱フヘシ

第三章　在監人接見

第十六條　在監人ニ接見ヲ請フモノアル旨受付掛ヨリ通知ヲ受ケタルトキハ看守長又ハ看守部長ハ直ニ願人ニ就キ接見スヘキ要件及在監人ト願人トノ關係ヲ詳悉シ許可スヘキモノト認メタルトキハ其要件ヲ帳簿ニ記入シ署長ノ認可ヲ受ケ速ニ看守又ハ女監取締ヲシテ在監人ヲ接見室ニ引致セシメ願人ハ小使ヲシテ接見室ニ誘ハシムヘシ

但許可スヘカラサル者ト認メタルトキハ其旨申聞ケ退署セシムヘシ

第十七條　接見セシムル塲合ハ其交談スヘキ要件ヲ先ツ在監人ニ申聞ケ置キ許可セシ條項以外ニ渉ルカ如キヿナキ樣注意スヘシ

第十八條　接見ノ際ハ規定ノ時限ヲ超過セサル樣立會者ニ於テ嚴重取締ヲナスヘ

シ

第十九條　辯護士（裁判所ニ届出アルモノニ限ル）ニシテ刑事被告人ニ對シ犯罪ノ事實ヲ聞取ル爲メ接見ヲ出願セシトキハ其事件ノ單簡ナルモノハ接見室ニ於テシ否ラサルモノハ訊問所ニ於テ之ヲ爲サシムヘシ

第二十條　病監ニ於テ接見セシムル塲合ハ立會者ハ双方ノ間ニ在テ之ヲ爲サシメ其擧動ニ注意スヘシ

第二十一條　接見ヲ終ヘタルトキハ（病監ニアルモノヲ除ク）先ツ在監人ヲシテ退去セシメ次ニ願人ニ及フヘシ

第二十二條　接見所ニ於テハ互ニ書類等ノ披見ヲ擅ニセシムヘカラサルハ勿論之レカ授受ヲ許スヘカラス披見セシムル必要アル塲合ハ立會看守長又ハ看守部長ニ於テ一應檢査シ差支ナキ限リハ披見セシムルヲ得

第二十三條　接見ヲ終リタルトキハ帳簿ヲ署長ニ差出シ認印ヲ受ケ立會看守長又ハ看守部長モ認印シ置クヘシ

第二十四條　署長在署セサルトキハ第二課長ニ於テ之ヲ許否シ後チ其旨ヲ署長ニ報告スヘシ

第二十五條、接見ノ爲メ在監人ニ與ヘタル感情ノ摸樣等ハ場合ニ依リ立會看守長又ハ看守部長ハ署長ニ報告ヲナスヘシ

第二十六條　接見ハ在監人ト外人トノ間ニ通謀スル好時機タルヲ以テ立會者ハ最モ周密ノ注意ヲ要ス

第二十七條　接見中不都合ノ行爲アツテ中止シタルトキハ其旨署長ニ報告スヘシ

第四章　在監人書信

第二十八條　刑事被告人ヨリ發信センコトヲ願出ルトキハ擔當看守女取締ハ之ヲ書信認所ニ誘引シ筆記セシメ終ラハ直ニ歸監セシムヘシ

但訴訟上及請願書ヲ認ムル場合モ又仝樣トス

第二十九條　四人懲治人等ヨリ發信セント請フトキハ工場內一定ノ場所ニ於テ定日ニ（每日曜日午後）之ヲ認メシメ終ラハ直ニ歸席セシムヘシ

第三十條　書信等ノ草稿ハ總テ之ヲ取揚ケ決シテ監內ニ持歸ルヲ禁スヘシ

但訴訟書類ニシテ後日必要ナル者ハ之ヲ纏メ本人ノ氏名ヲ記シタル札ヲ付ケ之ヲ領置スヘシ

第三十一條　拘置監及役場擔當看守女監取締ニ於テ在監人ノ書信及願書等ヲ受ケタルトキハ受持報告簿ニ記載シ共ニ看守長又ハ看守部長ニ送付スヘシ

但至急ヲ要スルモノハ抑丁ヲシテ（女監ハ女監取締）直ニ看守長又ハ看守部長ニ送致シ其旨受持報告簿ニ記入シ置クヘシ

第三十二條　看守長又ハ看守部長ニ於テ書類ノ送付ヲ受ケタルトキハ直ニ課長ニ出シ課長ハ撿閱ノ上認印シテ在監人發信簿ニ記入セシメ速ニ署長ニ差出スヘシ

第三十三條　在監人ニ送リ來ル信書ヲ受ケタルトキハ課長ニ於テ一應之ヲ撿シ在監人受信簿ニ記入セシメ署長ニ差出シ撿閱ヲ受ケタル上敎誨師ニ示シ（刑事被告人ハ除ク）後ヲ各擔當看守女監取締ヲシテ本人ニ送達セシムヘシ

但不正不良又ハ改悛ノ妨クモノト見認ムル文意アルトキハ意見ヲ署長ニ具申シ其有害タル文意ヲ塗抹スル乎或ハ示サヽルコトアルヘシ刑事被告人ニ係ルトキハ其意見ヲ付箋スヘシ

第三十四條　刑事被告人ノ發受スル信書ハ署長撿閱ノ上裁判所ニ送付スヘシ

但發受不認可ノ者アルトキハ之ヲ署長ニ報告スヘシ

第三十五條　擔當看守女監取締ハ其來信ヲ在監人ニ示シ又ハ讀聞セ之ニ認印シ受持報告簿ニ其旨ヲ記入シ看守長又ハ看守部長ニ返付スヘシ

但書信ヲ在監人ニ讀聞ス場合ハ可成的其書信ノ要旨ヲ他人ニ聞カシメサル樣充分注意スヘシ

第三十六條　示濟ノ書信等ハ第二課ニ於テ之ヲ各自ノ身分帳簿ニ綴込ムヘシ刑事被告人ノ書信ハ袋ニ入レ出獄迄保管スヘシ

但刑事被告人ニシテ囚人トナルトキハ其書信ヲ身分帳簿ニ綴込ムモノトス

第三十七條　在監人出獄スルトキハ保管セシ書信類ハ悉ク之ヲ本人ニ交付スヘシ

但交付ノ際帳簿ニ記入シ受取人ヲシテ捺印セシメ置クヘシ

第三十八條　擔當看守女監取締ニ於テ在監人受信ノ爲メ如何ナル感覺ヲ惹起セルヤヲ視察シ摸樣ニ依リ看守長又ハ看守部長ニ報告スヘシ

第五章　在監人犯則

第三十九條　犯則者アルヲ認メタルトキハ看守ハ細大ヲ問ハス其行爲ヲ犯則申告簿ニ記シ看守長又ハ看守部長ニ送致スヘシ

第四十條　犯則申告ヲ受ケタルトキハ課長ハ本人ヲ呼出シ其事實ヲ審問シ訓戒ニ付スヘキモノハ之ヲ訓戒シ處罰ヲ要スルモノハ其犯狀及處罰案ヲ本人身分帳簿中懲罰表ニ教誨師ハ意見ヲ式ノ如ク記入シ之ヲ署長ニ差出シ裁決ヲ受ケ後チ之ヲ本人ニ言渡スヘシ

但犯狀ノ差措キ難キモノヲ除ク外ハ定役囚ニ在テハ可成的役業ヲ妨ケサル時間ニ於テ審問スルノ注意アルヲ要ス

第四十一條　懲罰ヲ執行スル前ニ於テ（屏禁獨愼罰ヲ除ク）看守長又ハ看守部長ハ看守ヲシテ本人ヲ醫務所ニ引致シ身体ヲ檢査セシメ執行シ差支ナキヤ否ヤヲ確ムヘシ

第四十二條　懲罰滿期ニ依リ之ヲ免スルトキハ本人ヲ看守長ノ面前ニ引致シ仝官ハ將來犯則スヘカラサル樣相當ノ訓戒ヲ加ヘ之ヲ擔當看守ニ交付スヘシ

第四十三條　懲罰執行中ハ讀書入浴發信ヲ停止シ且ツ嚴重ニ容姿ヲ正フセシメ其狀況ヲ視察スヘシ

但屏禁獨愼罰ニ限リ入浴及發信ヲ停止セス

第四十四條　懲罰執行中ハ特ニ指定セシ看守ノ外決シテ他ノ看守押丁ヲ受罰者ノ所在ニ至ラシムヘカラス

第四十五條　懲罰ヲ執行セシトキハ看守長又ハ看守部長ハ其日時ヲ懲罰表執行欄內ニ式ノ如ク記入捺印スヘシ

第四十六條　懲罰執行中改悛ノ狀顯著ニシテ之ヲ免スルノ必要アルモノト認メタルトキハ看守長又ハ看守部長ニ於テ其狀況ヲ詳記シタル上申書ヲ作リ之ヲ課長ニ送付シ課長ハ意見ヲ付シテ典獄ニ差出シ裁決ヲ經ヘシ

第四十七條　疾病其他ノ事故ニ依リ懲罰執行ヲ中止シタルトキハ看守長又ハ看守部長ニ於テ其事由ヲ日誌ニ記入シ署長ノ檢閲ニ供スヘシ

第四十八條　懲罰執行ヲ中止シタル者ハ其事故止ミタルトキハ直ニ殘罰ヲ執行シ遲延セサル樣看守長又ハ看守部長ニ於テ注意スヘシ

但殘罰ヲ執行セシトキハ其事由ヲ日誌ニ記入シ署長ノ檢閲ニ供スヘシ

第四十九條　在監人ニシテ刑法ニ觸ルヽ犯罪アルトキハ課長ニ於テ之レカ書類ノ取纒メヲナシ告發ノ手續ヲナスヘシ

第六章　在監人賞譽

第五十條　賞表ヲ授與スヘキ囚人アルトキハ課長ハ上申書ニ本人ノ身分帳簿ヲ添ヘ關係各課所ヘ回議シ若クハ會議ヲ開キ協議ノ上一件書類ヲ署長ニ差出シ裁決ヲ得ヘシ

第五十一條　賞表ヲ授與スルトキハ課長ハ其前日中ニ於テ授與式ヲ執行スヘキ時限ヲ定メ監獄書記教誨師ニ通知スヘシ

第五十二條　賞表授與式ヲ行フニハ一定ノ役場ニ囚人ヲ集メ紀律正シテ着席セシムヘシ

但シ幼年監女監ハ各別ニ授與式ヲ行フ故各其一定ノ場所ニ集ムルモノトス

第五十三條　監獄則施行細則第九十七條ニ依リ賞譽スヘキ者アルトキハ其關係セシ吏員ニ於テ其狀況ヲ詳悉シタル上申書ヲ作リ課長ニ送付シ課長ハ之ニ意見ヲ付シ署長ニ差出シ裁決ヲ受クヘシ

第五十四條　監獄則施行細則第九十八條ニ依ルモノハ課長ニ於テ其書類ヲ取纒メ前項仝樣取扱フヘシ

第五十五條　賞表ヲ受クヘキ囚人ニ與ル賞詞ノ謄本ハ左ノ書式ニ據ルヘシ

重懲役何年四　　何　　某

其方儀獄則ヲ謹守シ（作業ニ勉勵シ且ツ改悛ノ狀顯著ナルヲ以テ）又ハ（改悛ノ狀著シク父母ニ報恩スル志厚キヲ以テ）賞譽シ賞表一個又ハ二個ヲ授與ス

年　月　日　　典　獄　氏　名

贈與スル囚人ニ對シテハ左ノ如シ

重懲役何年四　何　某

其方儀獄則ヲ謹守シ作業ニ勉勵シ改悛ノ狀顯著ナルヲ以テ（又ハ何々前賞詞ヲ記ス）曩ニ賞表ヲ授與シタル爾來能ク志操ヲ變セス倍々獄則ヲ守リ作業ニ勉勵シ改悛ノ狀顯著ナルヲ以テ（又ハ何々賞スヘキヿヲ記ス）尙ホ賞表一個増與ス

年　月　日　　典　獄　氏　名

第五十六條　賞與セシ囚人ハ之ヲ帳簿ニ記入シ置クヘシ

第七章　看守長及看守部長心得

第五十七條　新タニ採用セシ看守女監取締押丁アルトキハ看守長又ハ看守部長ニ於テ先ツ署內ヲ（女監取締ハ女監構內ニ限ル）一覽セシメ續ヒテ禮式及囚人待遇上ニ關スル要旨ヲ敎授シ次ニ諸規則ヲ一讀セシメタル上ニアラサレハ勤務セシムヘカラス其敎授日數ハ三日トス

第五十八條　押丁ヨリ看守ニ採用シタル者ニ付テハ看守職務ノ要旨ヲ敎授シタル上勤務セシムル三日間ノ日數ヲ與フル限リニアラス

第五十九條　新タニ採用セシ者ニ對シテハ直ニ本人ノ身分帳ヲ調整シ置クヘシ

第六十條　新タニ採用セシ者ハ先ツ夜勤ニ從事セシメ次ニ日勤ニ從事セシムル配置ヲナスヘシ

第六十一條　看守以下職務上怠慢又ハ失誤等アルトキハ其輕キモノハ看守長又ハ看守部長ニ於テ篤懇訓戒シテ將來ノ注意ヲ促カシ懲罰例ニ觸ルヽ行爲ハ速ニ待罪書ヲ差出スヘキ旨ヲ命スヘシ決シテ輕微ナル行爲ナリトシテ不問ニ措ク等ノ事ナキヲ要ス

第六十二條　看守長又ハ看守部長ハ看守以下出勤時限ヨリ二時間以內ニ其勤怠簿ヲ調査シ脫漏ナキヤ否ヤヲ確ムヘシ

第六十三條　看守長又ハ看守部長ハ看守以下ヨリ差出ス所ノ願伺屆書ハ畧字又ハ誤字ナキヤ否ヤヲ調査シ且ツ書式ニ適合シアルヤヲ取調タル上認印ヲナシ之ヲ課長ニ送致スヘシ

第六十四條　看守長又ハ看守部長ハ看守以下皆勤休暇原簿ヲ整理シ且ツ休暇證書ヲ本人ニ下付スヘシ

第六十五條　看守長又ハ看守部長ハ看守以下勤務配置表ヲ管理シ其配置箇所時限等ハ式ニ從ヒ其時々記入スヘシ

第六十六條　看守長又ハ看守部長ハ看守以下勤務ノ都合ニ依リ半休暇又ハ全休暇ヲ與フルニハ豫メ其順序ヲ定メ置キ之ヲ配置表ニ記入スヘシ

但勤務配置上餘員ヲ生シタル場合ニアラサレハ本項ノ休暇ヲ與ヘサルノ注意アルヲ要ス

第六十七條　看守長又ハ看守部長ハ男子ヲ女監構内ニ入ラシメサル樣嚴重取締ヲナスヘシ

第六十八條　看守長又ハ看守部長ハ囚人ヲ監獄構外ノ役ニ服セシムルトキハ其囚人ノ氏名ヲ記載シ之ヲ擔當看守ニ交付シ且ツ都度戒護上相當ノ注意ヲ加フヘシ

第六十九條　看守長又看守部長ハ構内外ヲ巡視シ（一時間ニ一回以上）皓然タル清潔整然タル紀律ヲ確保スルコトニ付其責ヲ負フモノトス

但構内外掃除ハ午前午後ノ兩度ニナサシメ且ツ其時限ヲ定メ置クモノトス

第七十條　看守長又ハ看守部長ハ看守以下執務上規程ニ違ハス正確ニ勤務セシムルコトニ付テ其責ヲ負フモノトス

第七十一條　看守長又ハ看守部長ハ監房及役場ニ於ケル規定ノ在監人區別ニ付周密ノ注意ヲ加ヘ混同セシムル等ノコトナキ樣嚴ニ取締ヲナスヘシ

第七十二條　看守長又ハ看守部長ハ刑事被告人ニシテ押送ノ際戒具ヲ要セサル者ナリト認ムルトキハ押送看守ニ其旨ヲ申聞クヘシ

第七十三條　看守長又ハ看守部長ハ在監人ニ差入ル、物品ノ撿査ニ立會スルトキハ周密ナル注意ヲ加ヘ不正ノ所業アラシムヘカラス

第七十四條　看守長又ハ看守部長ハ人員撿査（四名簿及房扉前四名札及現員ト照合スヘシ）監房撿査等ニ立會スルトキハ人員ノ正確ナルヤ又ハ監房ニ異狀ナキヤ否ヤ等ヲ精撿シ且ツ監內諸物品ノ規程通リ整頓シアルヤ否ニ注意スヘシ

第七十五條　看守長又ハ看守部長ハ各役場擔當看守ヨリ送付スル處ノ受持報告ヲ取纏メ之ヲ撿シ認印ノ上直ニ課長ニ送致スヘシ

第七十六條　看守長又ハ看守部長ハ課員ノ執務上又ハ囚人ノ行爲上ニ付異狀アルトキハ直ニ口述ヲ以テ課長ニ報告スヘシ

第七十七條　課長ハ看守長又ハ看守部長ヨリ送付スル處ノ受持報告簿ヲ撿シ指揮スヘキモノハ備考欄內ニ其要旨ヲ記シ認印ノ上署長ニ差出シ且ツ課員及在監人ニ異常ノ事アラハ口述又ハ書面ヲ以テ署長ニ報告スヘシ

第七十八條　當直看守長又ハ看守部長ハ左ノ諸帳簿ヲ整理記入スヘシ

一　日誌
二　看守以下勤怠簿
三　看守以下勤員配置表
四　看守以下皆勤休暇原簿
五　在監人懲罰執行簿
六　在監人名簿
七　在監人監房表
八　刑事被告人名簿
　　共犯及其居房罪質住所並ニ審理ノ結果等ヲ記入セシモノ
九　諸達簿
　　看守以下ニ其都度一覧セシムルモノ
十　戒具調査簿
十一　監房調査簿

第七十九條　第二課ニ於テ左ノ帳簿ヲ整理シ記入スヘシ

一　看守以下採用ニ關スル書類

二　看守以下身上ニ係ル書類
三　看守以下服具貸與簿
四　在監人犯則申告簿
五　在監人發信簿
六　仝　來信簿
七　在監人請願簿
八　囚人賞譽簿
九　看守以下身分帳簿
十　在監人早操簿
十一　在監人ニ係ル諸表類
十二　在監人行狀ニ係ル諸表及報告
十三　在監人行狀勘査早操簿
十四　防火具臺帳

第八十條　前二條ニ記セル帳簿ノ外新タニ調成ヲ要スル場合ハ其事由ヲ記シ署長ノ認可ヲ受クヘシ

○訓令第十四號

第二部監獄課
各監獄

明治年廿年大阪府廳達第廿九號看守押丁服具規則別紙之通改正ス

明治廿二年四月一日　知事

看守押丁服具規則

第一條　看守押丁ノ被服屬具ハ此規則ニ據リ貸與若クハ給與スヘシ

第二條　被服屬具ノ種類其員數及保存限期ハ甲號表面ニ依ル

第三條　上衣袴ハ常ニ壹具ヲ貸與ス其季節ニ際シ更ニ壹具ヲ增加スヘシ

但新ニ拜命ノ者其季節ニ非サル分ノ新製ヲ要スル塲合ハ此限ニアラス

第四條　肌着袴下靴下長短靴ノ類ハ便宜ニ依リ相當年度ノ豫算ニ基キ各壹個ノ代價ヲ給與スヘシ

但押丁ノ短靴ハ此限リニアラス

第五條　上衣袴ノ貸與及代料ノ支給期限ハ左ノ日割ヲ以テ給與ノ定日トス尤モ新ニ拜命之者ハ此限ニアラス

一夏服帽日覆ハ五月冬服ハ九月ノ末三日以內

一代料ハ支拂ハ保存滿期ノ翌月々俸支給ノ定日

第六條　毎年夏服ハ三月冬服ハ六月各三十日限リ別紙乙號ノ尺度表ヲ其管理ヘ差出スヘシ

第七條　貸與品ノ內帽ノ徽章洋刀手貫縄サンチヨロ手帖捕縄呼子笛外套締皮等ヲ除クノ外渾テ保存期限ヲ經過セシモノハ之ヲ給與ス

第八條　新ニ採用スルモノハ第二條乃至第四條ニ依リ貸與若クハ給與スト雖𪜈前職者ノ還納セシモノヲ以テ之ニ充ツ尤モ被服ノ類ニシテ身幹ノ不適合ナルトキハ新製ヲ以テ貸與スルヿアルヘシ

第九條　第八條ノ末段ニ依リ貸與スルモノハ上衣袴ハ使用ノ季節ヲ經過セハ一具ヲ返納スヘシ

第十條　服具ヲ毀損又ハ遺失スルモノハ職務上ニ係ルトキハ直チニ其事由ヲ典獄（典獄アラサル監獄ハ其代理者）ニ詳具シ認可ヲ經テ交換若クハ貸與ヲ請フヘシ

但保管ノ粗漏緩怠ニ出テタルモノト認ムルトキハ其代理ノ全部若クハ幾分ヲ辨償セシムヘシ

第十一條　病氣其他ノ事故ニ因リ三十日以上欠勤スルモノハ日數ニ積算シ（三十日ヲ以テ一ケ月トス）現品ト代料トヲ不問各保存ノ延期ヲナスヘシ

第十二條　轉免死亡等ニ因リ服具（保存滿期ノモノヲ除ク）ヲ還納セシムルモノ其當時現品ヲ以テ貸與セシ分ハ其現品代料ヲ以テ給與セシモノハ代料ヲ返納セシムヘシ

但事故アリテ本人ヨリ辨償シ難キモノアルトキハ保證人ヨリ之ヲ徵收スヘシ

第十三條　第十二條ニ依リ還納ニ係ル服具ノ紛失又ハ毀損等ニ依リ還納ナシ得ヘカラサルモノハ其代價ノ全部若クハ幾分ヲ辨償セシムヘシ

但紛失又ハ毀損職務上ヨリ生スルモノト認ルトキハ此限ニアラス

第十四條　第十條但書第十三條ニ依リ保存期內ノ貸與品ニ屬スルモノ、代料ヲ償還スル價値ノ計算ハ保存期限ノ月數ヲ以テ其年度最近購求ノ實價ニ（該年度內買入ナキトキハ前年度最近ノ購求價額ニ）ニ引直シ其殘期ニ係ル代料ヲ徵收ス

但代料ヲ以テ支給セシモノハ其給與セシ年度ノ豫算ニ據ル

第十五條　第十條但書第十三條ニ因リ無期限ニ屬スルモノ、辨償ハ第十四條ニ準シ左ノ區別ヲ以テ貸與ノ月ヨリ之ヲ起算スヘシ

一手帖ハ三ケ月未滿ハ全額六ケ月未滿ハ半額手貫縄サンチヨロ捕縄呼子笛外套締革ハ十二ケ月未滿全額二十四ケ月未滿半額以上ノ期限ヲ經過セシモノハ之ヲ徵收セサルモノトス

一徽章洋刀ハ使用ノ月數ニ係ハラス全額ヲ徵收ス

第十六條　第十四條第十五條ニ依リ徵收セシ金員ノ收入ハ其年度內ノ調製又ハ代料ノ支給ニ係ルモノハ仝年度監獄費ニ償戻シ前年度ニ於テ調製又ハ代料ヲ給與セシモノハ當該年度ノ雜收入ニ編入スヘシ

被服屬具表

看守ノ部

品目	員數	保存期限	品目	員數	保存期限
夏服	貳具	八ケ月	帽章	壹個	無期
冬服	貳具	十六ケ月	洋刀	仝	仝
帽	壹個	十二ケ月	手貫縄	壹筋	仝
外套肩掛 帽雨覆	各壹具	二十四ケ月	サンチヨロ	壹個	仝
帽日覆	壹個	四ケ月	捕縄	壹筋	仝

肌着袴下	各壹個	四ヶ月	呼子笛	壹個	仝
長靴	壹足	二十四ヶ月	手帖	壹冊	仝
短靴	壹足	六ヶ月	外套締革	壹個	仝
靴下	壹足	一ヶ月			

但使用季節ニ非サル月數ハ限內ニ算入セス
夏服ノ使用季節ハ貸與セシ年六月ヨリ九月ニ至ル日覆又仝シ
冬服ノ使用季節ハ貸與セシ年ノ十月ヨリ翌年十月ニ至ル

押丁ノ部

品目	員數	保存期限	品目	員數	保存期限
夏服	貳具	八ヶ月	帽章	壹個	無期
冬服	貳具	十六ヶ月	捕繩	壹筋	仝
帽	壹個	十二ヶ月	呼子笛	壹個	仝
雨衣	壹具	十八ヶ月	手帖	壹冊	仝
帽日覆	壹個	四ヶ月	短靴	壹足	六ヶ月
靴下	壹足	一ヶ月	以上ノ靴下ハ看守ニ仝シ		

○甲達第一四號　廿六年十月

看守點撿規則

第一條　看守長（支署ハ看守部長）ハ各看守ヲ執務ノ前後（朝夕二回）ニ於テ一定ノ場所ニ召集シ二列ヲ作リ看守部長（支署ハ上席看守）ヲシテ左ノ號令ヲ爲サシメ點撿スルモノトス

一　氣ヲ─付ケ
二　倣ヘ
三　番號
四　後列後ロヘ─進メ
五　止レ
六　劍前ヘ

七　元ヘ

八　捕繩呼子前ヘ

九　元ヘ

十　手帖前ヘ

十一　元ヘ

第二條　前條ノ號令ニ依リ看守長又ハ看守部長ハ看守ノ服裝帶劍姿勢ノ整否及職務上必要ノ携帶品所持ノ有無等ニ注意點撿シ了リテ左ノ號令ヲ爲サシムヘシ

但執務後ノ點撿ニハ各看守ノ手帖ヲ撿閲シ看守長又ハ看守部長ハ之ニ認印スヘシ

一　後列前ヘ進メ

此號令ニテ後列ヲ舊位ニ復サシメ看守長若クハ看守部長ハ當日又ハ翌日ニ於ケル勤務ノ配置及ヒ規則ノ訓令典獄ノ口達又ハ實際ノ出來事等ニ關スル訓示ヲ爲シ了テ左ノ號令ヲ爲サシムヘシ

一　分レ―進メ

此號令ニ依リ各看守執務前ノ點撿ナレハ各自其勤務場所ニ至リ又執務後ノ點

撿ナレハ直ニ退散スヘシ

第三條　女監取締ハ看守長又ハ看守部長ノ席ニ就キ携帶品ノ點撿ヲ受クヘシ

第四條　押丁ノ點撿ハ此心得ニ準據スヘシ

第五條　每月十五日一回看守ハ被服及總テノ貸與品ノ撿査ヲ受クヘシ

但撿査ノ際ハ第二課長（支署ハ支署長）立會フヘシ

第六條　撿査ノ時ハ看守ヲ一定ノ場所ニ召集シ一列ヲ作リ（氣ヲ着ケ）（倣）（番號）ノ號令ヲ下シ整列セシメタル上左ノ順序ニ依リ撿査スヘシ

一　拔ケ劍

二　納メ

三　捕繩呼子前ヘ

四　納メ

五　手帖前ヘ

六　納メ

七　帽雨覆前ヘ

八　納メ

九　帽日覆

十　納メ

十一　長短靴前ヘ

十二　納メ

十三　外套(押丁ニハ雨衣)

十四　納メ

十五　肩掛ケ

十六　納メ

第七條　第二課長及支署長ハ順次貸與品ノ點檢ヲ爲シ若シ不都合ノ所爲又ハ破損及不体裁ノ物品アルトキハ之カ處分ヲ典獄ニ具申スヘシ

第八條　撿査了レハ看守長ハ分レ進メノ號令ヲ下シ當日執務ノ者ハ各其勤務場所ニ至リ非番ノ者ハ退散スヘシ

第九條　病氣其他ノ事故ニ依リ第五條ノ撿査ヲ受ケサル者ハ追テ出署ノ時若クハ修補洗濯ノ出來セシ時ハ看守長ノ撿査ヲ受クヘシ

第十條　押丁ノ被服及屬具ノ撿査モ此規則ニ準據スヘシ

第十一條　第五條ノ撿査ヲ受クル夜勤者ハ出勤時限ヨリ十五分前ニ出署スヘシ

第十二條　前數條ノ如ク撿査日ヲ定ムト雖モ臨時看守長ヲシテ宿所ニ就キ撿査セシムルコトアルヘシ

看病願許否内規　大阪府典獄達

第一條　看守並等外吏以下父母疾病ノ爲看護セントヿヲ願出ルトキハ左ノ各條ニ依リ許否スヘキモノトス

第二條　看病願書ハ成規ノ書式ニ依リ戸長奥印アル醫師ノ診斷書ヲ添ヘ願出タルニ限ルヘシ

但電信若クハ急便ヲ以テ報知シタル類ニシテ成規ノ診斷書ヲ呈供スル能ハサル場合ニ於テ事狀不得止ト信認シタルトキハ追テ成規ノ診斷書ヲ差出サシムルノ指令ヲ以テ許容スルヿヲ得

第三條　看病許容ハ病症危篤若クハ自身ノ外他ニ看護スヘキモノ無キモノニ限ルヘシ

第四條　醫師ノ診斷書成規ニ從フト雖モ病狀輕緩又ハ看護ニ差間ナキ者或ハ擧動

怪シムヘキ者ト認定ノ者ニ至ッテハ許容スヘカラス

第五條　看病引日數ハ三週間以內ニ限ルヘシト雖モ事狀不得止ニ出ルモノハ特別ヲ以テ通シテ五週間以內許容スルコトヲ得

第六條　願書ノ指令ハ左項ニ依リ取扱フヘシ而テ指令ノ願書ハ一本ヲ願人ニ返還シ一本ヲ領置スルモノトス

（指令ハ總テ朱書ス）

（成規ノ診斷書ヲ添付シタルモノハ）

一書面願之趣聞屆候事

年號月日　　　大阪府監獄何分署

署印　（願書正副ニ割印ス）

（成規ノ診斷書添付セサルモノハ此但書ヲ付ス）

但歸着ノ上ハ成規ノ診斷書可差出事

往復ヲ除クノ文面アルモノハ此但書ヲ付ス

但發着共屆出ヘキ事

（成規ノ診斷書添付セス且往復ヲ除クノ文面アルモノハ此但書ヲ付ス）

但發着共屆出且歸着ノ上ハ成規ノ診斷書差出スヘキ事

許容セサルモノハ

一書面願之趣難聽屆候事

○訓示第二三號　明治二十七年九月

看守女監取締押丁ヨリ差出ス願伺屆書用紙ハ自今半紙罫紙ヲ用ヒ一通ニ限ル此段及訓示候也

當病御屆

一私儀本日相當勤務ノ處病氣ニ付出勤難相成依テ別紙診斷書相添ヘ此段及御屆候也

奈良縣監獄署詰

（看守）（女監取締）押丁

年月日　　何　某

奈良縣典獄宛

注意　當病屆ハ毎日例刻マテ三日間差出スモノトス三日以上ハ病氣引籠屆書

更ニ差出ス可シ

病氣引籠御屆

一私儀曾テ病氣ニ付欠勤中ノ處尚亦本日ヨリ何日間篤ト加養致度別紙診斷書相副此段及御屆候也

年 月 日

奈良縣監獄署詰

(看守)(女監取締)押丁 何 某

奈良縣典獄宛

出勤御屆

一私儀病氣ニ付欠勤加養中ノ處全快致シ本日ヨリ出勤致候間此段及御屆候也

年 月 日

奈良縣監獄署詰

(看守)(女監取締)押丁 何 某

奈良縣典獄宛

管內他行屆

一私儀本日相當非番(賜休暇)(何々)之處何々ノ爲メ何郡何村大字何々番屋敷何某方ヘ午前後何地當地發足何月何日午前後何時歸宅致候此段他行及御屆候也

年 月 日

奈良縣監獄署詰

(看守)(女監取締)押丁 何 某

奈良縣典獄宛

管外他行願

一私儀本日相當非番(賜休暇又ハ何々)之處何々ノ爲メ何府縣下何國何郡何村大字何々番屋敷何某方ヘ本日午前後何時當地發足何月何日午前後何時皈宅致度候間御許可被下度此段奉願候也

年 月 日

奈良縣監獄署詰

(看守)(女監取締)押丁 何 某

奈良縣典獄宛

忌引屆

一私儀實父母（又ハ何々）某本日午前後時何病死致候ニ付御成規之通忌引致度此段及御届候也

奈良縣監獄署詰
看守（女監取締）押丁

年　月　日　何　某

奈良縣典獄宛

寄　留　届

一私儀全郡何村大字何々番屋敷何某方ヘ寄留致候此段及御届候也

奈良縣監獄署詰
看守（女監取締）押丁

年　月　日　何　某

奈良縣典獄宛

注意　竪三寸五歩幅五歩ニシテ（何町大字何々番屋敷何某方）記載シタル付箋ヲナスヘシ

看　病　願

一私實養父母某何國何郡何村大字何々住居罷在候處何々病ニテ目下危篤ノ趣キニテ別紙診斷書之通リ申來候間何日間看病御許可被下度此段奉願候也

奈良縣監獄署詰
看守（女監取締）押丁

年　月　日　何　某

奈良縣典獄宛

轉寄留御届

一私儀從前何郡何町村大字何々番屋敷何某方ニ寄留致居候處都合ニ依リ何郡何町村大字何々番屋敷何某方ヘ寄留致候此段及御届候也

奈良縣監獄署詰
看守（女監取締）押丁

年　月　日　何　某

奈良縣典獄宛

注意　竪三寸五分幅五分ニシテ（何町大字何々番屋敷何某方）記載シタル付箋ヲナスヘシ

祭日休暇御届

一私實父母（又ハ養父母）某明何日祭日相當ニ付休暇致候此段及御届候也

奈良縣監獄署詰

看守（女監取締）押丁

年　月　日　　何　某

奈良縣典獄宛

○達第二百四號　十九年九月　典獄

自今看守押丁ニシテ結婚セントスル者ハ其婦タル住ノ所氏名職業年齢及媒妁人モ仝樣詳細記載シ結婚十日前ニ届出所屬長ノ認可ヲ受クヘシ

但入夫聟養子モ本文ニ依ルヘシ

○達第二百八號　十九年九月　典獄

看守押丁名刺之義從來區々ニシテ不都合ニ候條自今左ノ雛形ニ據リ調製各三葉以上携帯スヘシ

奈良縣監獄署詰 看守（押丁）何　某

竪　三寸

横一寸三分

但紙質ハ堅硬ナル洋紙トス

○廳達第八十八號　明治二十六年七月廿七日

看守女監取締押丁ノ勤務時限ハ晝勤夜勤ニ分チ相定ムヘシ但職務ノ性質ニ依リ晝勤夜勤ニ分ツヘカラサルモノハ此限リニアラス

○訓示第二一號　二十七年九月

看守女監取締押丁勤務規程

第一條　晝勤及夜勤看守押丁ハ半ケ月（毎月一日十六日正午十二時ヲ以テ交代時トス）毎ニ交代セシムヘシ

第二條　女監取締ハ一週日（日曜日正午十二時ヲ交代時トス）毎ニ交代セシムヘシ

但人員ノ都合ニ依リ晝勤ノミセシムルコトアルヘシ

第三條　役場炊場門衞病監及雜務擔當看守押丁ハ第一條ニ依リ交代セシムルノ限リニアラス

第四條　晝勤ハ役場炊場門衞病監雜務及立番所巡警夜勤ハ巡警門衞立番所ニ分割シ勤務セシムヘシ

第五條　晝勤看守女監取締押丁ハ一時間ニ付十分（立番所勤務ニ限リ一時間ニ付三十分）夜勤ハ一時間ニ付二十分休憩ヲ與フルノ割合ヲ以テ勤務セシムヘシ

第六條　役場炊場病監擔當看守ハ在監人就役時限五分前ニ出勤シ還房時限ニ退署スヘシ

第七條　看守押丁ニシテ事務ニ服スル者ハ一般官吏執務時限ニ準據スヘシ

第八條　前二條ニ掲クル外晝勤及夜勤看守女監取締押丁ノ出勤及退署時限ハ別表ノ定ムル所ニ據ルヘシ

第九條　第七條ニ掲クル者ノ外配置人員ノ都合ニ依リ一ケ月二回以内全日又ハ半日ノ休憩ヲ與フルコトアルヘシ

第十條　第七條ニ掲クル者ノ外看守長　　ヲ受クルニアラサレハ勤務ニ服シ又ハ退署スヘカラス

勤務時限表

月別＼時限別	晝勤部 出勤時限	晝勤部 退署時限	夜勤部 出勤時限	夜勤部 退署時限
一月	午前六時	午後五時	午後四時	翌日午前七時
二月	六時	五時卅分	四時卅分	七時
三月	五時卅分	六時	五時	六時三十分
四月	五時	六時卅分	五時卅分	六時
五月	五時	七時	六時	六時
六月	四時	七時卅分	六時卅分	五時
七月	四時	七時卅分	六時卅分	五時
八月	四時卅分	七時	六時	五時三十分

九月	十月	十一月	十二月
五時	五時卅分	六時	六時卅分
六時	五時卅分	四時卅分	四時
五時	四時卅分	四時	三時卅分
六時	六時三十分	七時	七時三十分

〇逹第百八十號　十九年八月　典獄

看守及押丁勤務一覽表別紙之通製定候條本月十五日ヨリ實行スヘシ

（別紙）

勤務一覽表

明治　年　月　日

時間	立番	巡警	監
自至			
自時至時			
自至			
自至			
自至			
自至			
自至			
自至			
自至			
自至			
自至			
自至			
自至			
自至			
自至			

（晝）

監督表第　區

明治　年　月　日

巡警者姓名	時間	函ノ番號 一	二	三	四	五	六	七
	自時至時							
	自至							
	自至							
	自至							
	自至							
	自至							
	自至							
	自至							
	自至							
	自至							
	自至							
	自至							
	自至							
	自至							
	自至							

看守長何某印 晝	看守長何某印 夜	公廨勤務 晝	公廨勤務 夜
自時至時	自時至時	自時至時	自時至時

第一派出所		川浚淀川派出監督		市中谷橋掃除派出	
晝	夜	晝	夜	晝	夜
自　時 至　時	自　時 至　時	自　時 至　時	自　時 至　時	自　時 至　時	自　時 至　時

○甲達一二號　廿五年十一月

看守職務心得

第一條　看守ハ其職務ヲ行フニ當リ百事愼密ト勉勵トヲ以テ誠實ニ之ヲ盡スコトヲ要ス

但服務外ト雖モ凡テ廉恥ヲ貴ヒ節義ヲ重ンシ監獄官吏タル名譽ニ恥チサル樣注意ス可キモノトス

第二條　看守ハ服務中常ニ制服ヲ着ス可キモノトス制服ハ之ヲ整頓シ清潔ニ爲シ佩劍ハ常ニ磨キ置クヘキモノトス

第三條　看守ノ上官タルモノ左ノ如シ

典獄　看守長

看守ハ上官ノ命令ハ必ス之ヲ遵奉スヘキモノトス

看守ハ上官ノ命令ニ對シ同僚若クハ囚人ノ面前ニ於テ自己ノ意見ヲ述ヘ又ハ不都合ノ擧動ヲ爲シ之ヲ遵奉セサル等ノ事アルヘカラス

看守ハ典獄以外ノ上官ノ命令ニシテ執行シ能ハサルカ又ハ之ヲ執行スル片ハ職務上及監獄ノ利益上不都合ト信スル場合ハ典獄ノ指揮ヲ受クヘキモノトス

第四條　看守ハ職務上虛言アル片ハ典獄ハ之ヲ看守身分帳ニ記入スヘキモノトス

但此場合ニ於テハ時宜ニ依リ之ヲ上官ニ具狀シ嚴量ニ處分スルコトアル可シ

看守ハ執務上ニ過失若クハ不規律ナルコトアル片ハ懲罰セラレ又ハ上官ヨリ說諭若クハ注意ヲ受クルコトアルヘシ

第五條　看守ハ前以テ屆出ヲ爲サスシテ欠勤スルコトヲ得ス疾病ニ罹リ執務スル能ハサルトキハ其交代ニ差支ヘナカラシムル爲メ正當ノ時刻ニ屆出ツ可キモノトス

但六時間以內ニ監獄醫ノ診斷書ヲ差出スヘシ

第六條　看守ハ成規ニ依リ屆出ヲナサス又ハ認可ヲ得スシテ居住地外ニ宿泊スルヲ得ス

第七條　監獄醫教誨師等ニ對シテハ之ヲ恭敬シ職務ノ秩序ヲ失セサル限リハ之レカ協議ニ應スルノ注意アルヲ要ス

第八條　看守ハ同僚ニ對シ服務ハ勿論服務外ト雖モ力メテ平和親密ニ交際シ尙ホ自己ノ家族モ同樣ナルコトヲ要ス

第九條　看守ハ規定セラレタル時限ニ據リ服務スルモノトス

第十條　暴風雨及監獄內ハ勿論其近傍ニ火災アルカ若クハ在監人不穩ノ企アル場合ハ晝夜ニ論ナク直チニ出署スヘキモノトス

第十一條　看守ハ監獄ニ屬スル器物等ニシテ自己ノ擔任ニ係ルモノハ之カ責任ヲ有ス故ニ注意シテ之ヲ取扱フヘキモノトス若シ自己ノ過失ヨリ毀損シタルトキハ損害賠償ノ責ヲ受クルコトアルヘシ

第十二條　看守ハ監獄則其他監獄ニ關スル諸規則ヲ熟知スヘキハ勿論ナリトス故ニ若シ職務上過失アル場合ニ於テハ諸規則ヲ知ラサルノ故ヲ以テ懲罰ヲ免ルヽ口實ト爲スヲ得ス

但上官ヨリ其都度命令ヲ受ケタル事項ニ付テモ又同樣タルヘシ

第十三條　看守ノ職務ハ其權內ニ於テ裁判上確定シタル刑ノ執行ニ付之カ補助ヲ爲スニアルモノトス

第十四條　看守ハ監獄則ニ揭ケアル在監人ノ第十一條第二十條ノ區別ヲ嚴格ニシテ步行ノ際敎場內及運動ノ時病監召喚等ノ際ニ於テモ混同セシムルコトヲ得ス此規程ヲ緻密ニ執行シ相侵犯セシメサルハ特ニ注意ヲ要スルモノトス

第十五條　看守ハ其執行上囚人ハ曾テ國家ノ公權及秩序ヲ紊乱シタル爲メ之ニ對シ公權ノ及フ處ヲ執行スルニアルコトヲ服膺スヘキモノトス故ニ囚人ニ對シテ常ニ嚴確公正ナラサル可カラス若シ囚人ノ取扱ニ於テ依怙偏頗ノ事アル時ハ囚人ニ於テ刑罰ハ正當ノ權利(法繼)ニアラスシテ却テ不正ノ處爲トナシ刑罰執行ノ目的ヲ阻害スルニ至ラシムルコトアルヘシ

第十六條　刑罰執行ニ依リ囚人ヲシテ其行爲ノ不正ナリシコトヲ感知セシムルヲ要ス卽チ彼ヲシテ人權ヲ濫用シタルカ爲メ此苦痛ヲ受ケ又社會ノ秩序安寧ヲ害シタルコト及ヒ自己ノ爲メ無辜ナル眷族ヲモ云フ可ラサルノ不幸ニ沈淪セシメタルコト能ク會得セシムヘシ而シテ又囚人ヲシテ刑罰ハ獨リ當然ノ結果良藥ナ

ルノミナラス又自己ノ改悛ヲ促カシ將來再ヒ法律違反ノ念ヲ起サシメサル必要ノ具タルヲ曉ラシムヘシ故ニ刑罰ハ嚴肅ニシテ且ツ純直ニ執行スヘキモノトス

第十七條　嚴肅ハ苛虐ノ謂ニアラス侮蔑罵言等ノ所行ハ偶以テ囚人ヲシテ官吏ニ對スル尊敬ノ念慮ヲ冷却セシメ其威嚴ヲ毀傷スルニ至ルモノナリ故ニ獄則ノ命スル所ハ毫モ假借スルコトナク嚴重ニ之ヲ遵奉セシメ犯行違令ハ細大ニ論ナク之ヲ摘發シ或ハ温言ヲ以テ之ヲ訓戒シ或ハ上官ニ報告スヘシ是レ則チ嚴正ノ眞義ナリ虐待ノ不法ナルハ固ヨリ論ナシ故ニ若シ之ヲ犯ストキハ嚴重ノ懲罰處分ヲ受クヘシ

第十八條　純直トハ看守ニ於テ囚人ト無用且ツ輕忽ナル談話等ヲ爲サスシテ凡テ囚人ニ命令スヘキコトハ靜肅ニ之ヲ令シ粗暴ニ渉リ親昵ニ流レス寬嚴其中ヲ得テ卒直ニ囚人ヲ遇スルヲ云フ看守ハ囚人ノ不幸ヲ憐レミ若シ囚人ニシテ愁訴スルコトアラハ冷淡ニ却下スルコトナク務メテ之ヲ慰撫シ同時ニ其不幸ノ原因ハ犯罪ノ然ラシムル所タルコトヲ說諭スヘキモノトス

第十九條　看守ハ囚人ニ對シ力メテ其威嚴ヲ保持スルコトヲ要ス威嚴ヲ保タントシテ又濫リニ囚人ヲ號令シ譴責シ强迫スルカ如キコトアラハ却テ之ヲ傷ケ終ニハ監獄ノ紀律ヲ紊スニ至ルヘシ看守ノ威嚴トハ囚人ヲシテ其最モ嚴重ニ事務ヲ處理シ職務ノ內外ヲ問ハス尊敬スヘキ行ヲ爲ス人タルコトヲ信セシムルニアルモノトス

事務ニ不注意ニシテ擧動醜汚品行不正ナル看守ハ囚人ニ蔑視セラレ決シテ其威嚴ヲ保ツニ必要ナル監獄ノ尊嚴及懲罰權ノ目的ヲ達スルコト能ハス其他如何ナル場合ト雖モ看守ニシテ若シ囚人ト私交上ノ關係ヲ保ツコトアルトキハ威力ヲ失フニ至ルヘシ則チ囚人ニ陰ニ自己ノ爲メ作業ヲ爲サシムルカ又ハ囚人ノ爲メ斡旋シ信書又ハ差入物等ノ媒介ヲ爲ス是レナリ若シ如此所爲アルトキハ看守ハ其職ヲ瀆スモノト云フヘシ

第二十條　自由刑ハ其性質及罪質等ニ依リ雜居別房ノ二法ヲ以テ之ヲ執行スルモノトス別房ニ於テ晝夜囚人ヲ嚴隔スル主趣ハ同囚相交際スルカ爲メ啻ニ感化改良ヲ妨クルノミナラス又大ニ罪惡ヲ傳播助長スルニ至ルノ弊ナカラシメンカ爲メナリ故ニ看守ハ能ク此旨趣ノアル所ヲ服膺シ之ヲ貫徹セシムルノ注意アルヲ要ス

囚人ハ別房ヲ以テ同囚相嚴隔セラルヽニ拘ハラス陰險狡猾ノ徒ハ動モスレハ詐

謀詭計ヲ以テ陰微ノ間ニ通息ヲ試ミ且惡企ヲ爲スモノナレハ看守タルモノハ恒ニ慧眼ヲ以テ之ヲ看破シ或ハ未成ニ防遏シ或ハ已遂ニ告發スルノ注意ナカル可ラス

第二十一條　正當ノ方法ヲ以テ恒ニ囚人ト交際的ノ關係ヲ保持スルヲ要ス此關係ハ大ニ同囚相通息セントスルノ冀望ヲ防制スルノ効アルモノトス正當ナル交際的ノ關係ヲ保持スルコトハ看守ノ最モ至難ナル職務ニ屬ス充分ノ識見注意及熟練アルニアラサレハ能ク此難事ヲ全フシ得ヘキニ非サルヿヲ了知セサル可ラス交際的ノ關係ハ先ツ第一ニ純正ナル職務上ヨリ之ヲ保タサルヘカラス則チ看守ハ囚人ニ對シ其遵守ス可キ事項ヲ指示シ必要ノ物品ヲ授受シ監房被服等ノ清潔且督令シ作業ニ勸勵シ教誨聽聞ニ誠心ナルヲ勸奬スルノ類是ナリ而シテ是等職務的ノ交際ハ凡テ箇明且ツ嚴肅ナルヲ要ス

職務的交際ノ外尙ホ一ノ交際アリ名ツケテ純正社會的ノ交際ト稱シ假令ハ在監人其近親ノ究苦救フヘカラサル悲境ニ沈淪スルノ報ニ接シ又ハ其父母愛兒ノ待養スルモノナクシテ死沒セシ訃音ヲ得タル等痛悼ノ情自カラ禁スル能ハス煩悶懊惱神佛ヲ疑ヒ世ヲ恨ムノ外ナシト云フカ如キ場合ニ於テハ保護者トナリテ之ヲ皷舞奬勵スルノ類是ナリ此場合ニ於テハ全ク職務上ノ語氣ヲ離レ凡テ愛憫慰撫的ナルヲ要ス

在監人若シ前項記載スル等ノ場合ニ於テ煩悶懊惱ノ狀アルトキハ典獄若クハ看守長巡回ノ際其旨ヲ申告ス可キモノトス

看守ハ在監人ト交際スル際ニ於テハ最モ周到ノ注意アラサル可ラス如何ナル場合ニ論ナク監内ノ事情他囚ニ關スル事項自己若クハ他官吏ノ私事ニ渉ル事項其他必要ナキ新奇ノ事項ヲ談話スルヲ禁ス要スルニ官吏ノ在監人ニ對スル關係區別ハ常ニ堅ク之ヲ保持スヘシ

第二十二條　雜居制ニ於テハ看守ハ在監人ノ交際ヲ嚴重ニ監督シ同類等交談セシメサルハ管理法ノ本則ナリ然レ圧工場ニ於テハ作業ノ必要上全ク同囚ノ交談ヲ禁スル能ハサル場合ナキニ非ラス故ニ看守ハ監獄則ノ主旨ヲ了知シ成ル可ク之ヲ制限シテ濫用セシメサルノ注意アルヲ要ス同囚若シ交談セント欲スル片ハ看守ハ先ツ其事項ヲ申出サシメ高聲ヲ以テ談話セシムヘシ

但如何ナル場合ト雖圧凡テ長談ニ渉ルコトヲ禁スヘシ看守ハ囚人ヲシテ休憩時限ト雖圧其許可ナクシテ濫リニ其居席ヲ離レ或ハ指定ノ工場外ニ至ルコト

ヲ禁スヘシ

雜居制ニ於テハ看守ノ在監人ニ對スル交際的ノ關係ハ常ニ職務的ナルヲ要ス特別ノ談話ヲ請フトキハ之ヲ停止シ看守長ニ申告スヘシ

囚人若シ敎誨師又ハ其他ノ上官ニ談話セントスル請フコトアラハ受持看守ニ於テ其旨報告簿ニ記入シ置クヘシ

看守ハ在監人ヲシテ相接近セシムヘカラス運動等ノ場合ニ於テハ常ニ規定ノ歩武ヲ保タシムルヲ要ス

第二十三條　受持看守ノ勤務ハ監房工場其他通例一定ノ區域及人員ニ就キ其受持ヲ定メ之ヲ管掌セシム故ニ各看守ハ其受持部內ノ場所備品人員等ニ關スル諸般ノ事項ニ就テハ總テノ責任ヲ有スルモノトス

監房ハ最モ淸潔ニ之ヲ拂拭シ常ニ秩然タル狀態ヲ保タシメサルヘカラス備品ハ破損汚穢ナカラシムヘキハ勿論常ニ整然タル秩序ノ下ニ之ヲ使用セシムルノ注意アルヲ要ス

受持看守ハ看守長之ヲ指定ス看守ハ其受持ヲ承認スル前ニ於テ先ツ其部內ノ狀態ヲ精撿シ監房工場等汚損ノ有無備品缺虧ノ有無ヲ確認シ其事項ハ受持報告簿ニ之ヲ記入シ引繼者連署シテ看守長ニ呈出スヘシ引繼後ニ屬スル凡テノ責任ハ繼續者之ニ當ルモノトス

看守ハ濫リニ其受持部內ノ備品ヲ增減シ又ハ修補スルヲ得ス備品ノ增減ハ總テ看守長ノ指揮ヲ受クヘシ若シ備品缺損シ目錄簿ニ符合セス其所業者ヲ指定スル能ハサルトキハ受持看守之カ責ニ任スルモノトス

第二十四條　看守ハ正確ニ囚人ヲ撿束スルノ責任ヲ有ス故ニ若シ囚人逃走シタル等ノ場合ニ於テハ其責任ナキヲ證明スルニ非ラサレハ嚴重ナル懲罰處分若クハ刑法ノ制裁ヲ受クルコトアルヘシ看守ハ鑰匙戸扉及窓牖ノ完否ニ就キ殊ニ周密ノ視察ヲ爲シ屢々之ヲ點撿シ其完整ナルコトヲ認確スルヲ要ス

看守ハ最モ注意シテ在監人ノ逃走用ニ供スル器械其他ノ物品ヲ隱匿スルカ如キコトナカラシムルヲ要ス

看守若シ逃走又ハ破獄ヲ企圖スル者ヲ認メタルトキハ直ニ之ヲ看守長ニ申告シ一面當該者ノ撿束ヲ一層嚴重ニシ若シ密告者アルトキハ之ヲ隱蔽シ他囚ヲシテ悟ラシメサルヲ要ス要スルニ看守ハ唯之カ申告ヲナスニ止マリ典獄ノ職權ヲ以テ相當ノ手段ヲ施ス所アルヘキナリ但急遽ノ場合ハ此限リニアラス

第二十五條　看守ハ其命令ニ對シ從順ナラサル者アルトキハ決シテ之ヲ寛恕スルコトナク命令ハ靜肅明白ナル音聲ヲ以テシ急劇ニシテ高聲ニ失スルカ如キ事アルヘカラス若シ在監人直ニ命ニ應セサルトキハ再度温言ヲ以テ之ヲ令シ其注意ヲ促スヘシ然レトモ尚ホ之ニ應セサルトキハ直チニ看守長ノ許ニ引致スヘシ此場合ニ於テ看守ハ他囚ノ監督ヲ同僚ニ委任シ自カラ之ヲ爲スカ或ハ他ノ看守ヲ呼ヒ之ヲ依托スヘキモノトス

但獨居房ニ在ルモノ及夜間雜居房内ニ於テノ事件ハ直チニ看守長ニ申告シ相當ノ指揮ヲ受クヘキモノトス倘看守ハ右ノ指揮アル迄ハ又囚人ト一言ヲ交ユルヘカラス囚人若シ發言スルトキハ之ヲ禁シ若シ倘抗言スルトキハ默シテ之ヲ制セス其旨併セテ看守長ニ申告スヘシ

第二十六條　看守ハ囚人ヨリ明カニ腕力ヲ以テ抵抗ヲ受ケル場合ニ於テ武器ヲ使用スルコトヲ得ヘシト雖モ其之ヲ使用スル場合ハ最モ周密ノ注意ヲ用ユルヲ要ス最モ必要ニシテ猶豫ナキトキハ之ヲ示シ其効驗ノ顯著ナルヲ知ラシムルコトアルヘシ

武器ハ攻撃ヲ防衞シ及抵抗ヲ鎭壓スルニ必要ナル場合ノ外使用スルコトヲ得サ

ルモノトス故ニ其使用ニ關シテハ特別ノ規定ナシト雖モ概ネ左ノ場合ト心得テ可ナリ

器物ヲ以テ脅迫ヲ試ミ官吏ノ命令ヲ用ヰスシテ倘之ヲ握持シ若クハ更ニ之ヲ把持シテ攻撃シ身体危險ナル場合

第二十七條　在監人疾病ナリト思料スル場合及ヒ其申立アリタルトキハ之ヲ報告簿ニ記入シ看守長ニ報告スヘキモノトス若シ疾病ヲ虚構スルモノト認メタルトキハ報告ノ際意見ヲ添申スヘシ

第二十八條　看守ハ其受持ノ在監人ヲシテ嚴正ニ出房又ハ入房セシメ引卒ノ途上ハ充分監視セサルヘカラス

工場ニ於ケル看守ハ如何ナル場合ト雖モ受持場ヲ離ルヘカラス止ヲ得サル場合ハ看守長ニ通報シ助勤ヲ求ムヘシ看守長ハ直ニ看守ヲ發遣スルカ若クハ相當處理ス可キモノトス

第二十九條　雜事ニ使役スル囚人ハ最モ看守ト直接交渉スルヲ以テ看守ハ特ニ注意シ濫リニ之ヲ信用セサルヘカラス且ツ掃除夫炊事夫理髮夫ノ如キハ囚人間適好ノ媒介者新事物ノ傳播者ナルカ故ニ看守ハ殊ニ慧眼ヲ以テ之ヲ

注意警戒セサルヘカラス如此囚徒ニ對シテハ殊ニ其身体作業上ノ器具及棚函籠類ノ如キハ緻密ナル點撿ヲ要スルモノトス看守ハ如何ナル塲合ト雖モ前項ノ使夫其他ノ囚人ヲ官吏ノ私用ニ使役セシムルヲ得ス又總テ囚人ハ看守ヲ附セサルコトアルヘカラス故ニ各看守ハ囚人ノミ在存スルヲ見ルトキハ一應之ヲ糺シ看守長ノ許ヘ拘引スヘキモノトス

第三十條　看守ハ上官ヨリ明確ナル命令アルニ非サレハ囚人ヲ受持塲ヨリ出スコトヲ得ス又一般官吏ハ當該看守ニ通知セスシテ其受持ヨリ囚人ヲ牽連スルヲ嚴禁ス若シ如此事アルトキハ看守ハ典獄ニ其事情ヲ直接ニ申告スヘシ看守ハ又恣ニ其受持部內ノ囚人ヲ轉業セシムルコトヲ得ス

第三十一條　看守ハ囚人ノ工業ニ勉勵シ規定ノ時間ハ間斷ナク工業ニ從事スルヤ否ヤニ就キテハ嚴重ナル監督ヲ要ス且ツ工業ノ素品若クハ器械類ニ缺クルコトアルトキハ工業主任又ハ授業手ニ報告スヘシ但塲合ニ依リ看守長ニ申告シ素品若クハ器械類缺乏ノ爲メ一時休役セシムルコトナキヲ要ス

第三十二條　外間傭主ヨリ差出シ置ク所ノ授業手ニ對シ常ニ親切叮嚀ナルヲ要ス故ニ相當ノ保護ヲ與ヘ四人ヲシテ授業手ニ對シテ倨傲不遜ナルカ如キコトアラシムヘカラス授業手ノ四人ニ對スル關係ハ常ニ嚴重ニ之ヲ監察シ授業手ヲシテ四人ヲ苛遇シ若クハ輕蔑罵詈スルカ如キコトアラシムヘカラス授業手ト四人間トノ喧爭ハ如何ナル塲合ニ論ナク之ヲ禁嚴スヘシ授業手ト四人間ニ於テ不都合ノ所爲アリト認ムルカ若クハ書信又ハ食物ノ授受若クハ不正ノ談話ヲ認メタルトキハ典獄ニ申告スヘシ

但至急ヲ要スル塲合ハ看守長ニ申告スルモノトス

第三十三條　看守ハ所定ノ教誨日ニハ參集ノ時限ニ遲速ナク教誨塲ニ牽連シ整然タル秩序ノ下ニ教誨ヲ聽聞セシムルノ準備アルヲ要ス受持看守ハ其部內ニ教育ヲ受クヘキ囚人アルトキハ教育時間遲速ナク教塲ニ參集セシムルノ注意アルヲ要ス

第三十四條　看守ハ在監人運動ノ際ニ於テハ同囚相交談セシメサル樣精密ニ注意シ所定ノ塲外ニ出ツルヲ嚴制スヘシ

第三十五條　看守ハ其所用ノ簿帳及諸表ハ凡テ叮嚀ニ之ヲ扱ヒ規定ニ從ヒ遲速ナク記入シ且其記入ハ務メテ精確ナルヲ要ス若シ疑義ニ渉ルコトアルトキハ工業主任若クハ看守長ニ之ヲ質問スヘシ

看守ノ取扱フヘキ帳簿ハ左ノ如シ

受持看守

一　受持囚名簿

様式左ノ如シ

入監日	身分職業	罪質	刑期	満期	賞表	番號（囚人監房）	姓名	年齢	備考

二　報告簿

作業看守

三　作業日報

様式左ノ如シ

第何號役場囚作業日報　　何年何月何日㊞

一異動ナシ

一某囚ハ第何號役場ニ移ル某囚ハ減食罰何日ニ處セラル

一某囚ハ病氣　三時間休役セリ

四　作業報告表

様式左ノ如シ

第　期終了　明治　年　月　日	
衣食費額	
食費額	
等級	
前月末日迄現役日數	
刑名刑期	
在監番號姓名	

明治　年　月中計算

種目／科程／工錢	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四
工錢額														
科程外														
科程了														
科程オ了														

五　役場器械貸與簿

樣式左ノ如シ

月日	貸與器械	囚人番號
九　一二	鍬一　鋸一　庖丁一　何々、、、	何　號

第三十六條　此心得ハ女監取締ニ適用ス

○甲達一二號　廿五年十一月

看守服務心得

第一條　看守ハ公務ノ餘暇武ヲ練リ文ヲ修メ常ニ剛毅ノ氣象ヲ養ヒ仁恤ノ心ヲ存

シテ在監人ヲ處遇シ又事變ニ際シテハ確乎不拔ノ精神ヲ以テ進止其度ヲ失セサル樣注意セサルヘカラス

第二條　諸規則ヲ確守シ上官ノ命令ヲ遵奉シ自己ノ品所ヲ端正ニシテ殊ニ起居進退言語ヲ愼ミ威嚴ヲ保チ在監人ノ侮慢ヲ招カサル樣セサルヘカラス

倘ホ職務上ノ機密ハ勿論凡テ緊要ナル事件ハ決シテ他言セサル樣注意スヘキモノトス

第三條　制服ヲ着シタルトキハ常ニ容儀ヲ愼ミ假令監獄圍外ト雖トモ醉態ヲ露シ或ハ傘屐ヲ用ヰ又ハ衆人ノ着目シ易キ物品ヲ携帶スル等不体裁ノ行爲ナキ樣注意スヘシ

第四條　在監人ニ對シ不當ノ言語ヲ吐キ或ハ短氣粗暴ノ所爲ニ渉リ又ハ懇切ニ過キテ柔弱ニ流ルヽコトナク宜シク適度ノ嚴格ヲ保チ力メテ改良ヲ誘掖シ獄則ヲ固守セシムル樣注意スヘシ

第五條　左ノ諸項ハ服務上遵守スヘキモノトス

一　職務上ニ就キ上官ニ申立ル事ハ眞實ヲ旨トシ決シテ愛憎偏頗ノ申立ヲ爲スヘカラス

二　監房掲示條目ヲ暗記シテ在監人ニ懇諭シ違犯ナカラシムルヲ要ス

三　何レノ場所ヲ問ハス服務中ハ習字讀書新聞紙等ヲ閲スルコトヲ禁ス

四　在監人ノ聞得ヘキ場所ニ於テ撿束上ニ係ル辯論ハ勿論時事ニ渉ル論議ヲ爲スヘカラス

五　戒護中漫リニ同僚ト會合シ又ハ職務上必要ナキ談話ヲ爲スヘカラス

六　看守長ノ指揮命令アルニアラサレハ女監構内ニ入ルヘカラス

七　出勤中醉態ヲ露ハシ又ハ放歌吟詩等ヲ爲スヘカラス

八　非番タリト雖トモ常ニ非常ノ變ニ應スルノ心掛ケアルヘシ

九　監獄署ヲ距ルコト七丁以外ノ地ニ住スヘカラス

十　非番又ハ休暇中住地外ニ出ツルトキハ其行先ヲ署長ニ届出ツヘシ

但宿泊スルモノハ其旨願出認可ヲ受クヘシ

十一　看守ハ典獄及同班以下ニ對シ左ノ稱呼ヲ用ユヘシ

典獄監獄書記看守長ニ對シテハ誰官殿監獄醫敎誨師同班及下班ニ對シテハ誰官ト呼フヘシ外來ノ人ニ對シテハ誰殿ト呼フヘシ

十二　在監人ニ對シテ言語殊ニ刑事被告人ニ就テハ其身分上ノ關係ニ依リ斟酌